

し き し
志 木 市 遺 跡 群

VIII

1 9 9 7

埼玉県志木市教育委員会

は じ め に

志木市教育委員会
教育長 秋山 太蔵

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、都心から25km圏内の池袋から東武東上線で20分という交通の利便性に恵まれているため、昭和40年代以降急激な都市化の進展と人口増加とともに大小様々な開発が行われてきました。

市内には、市域中央を流れる新河岸川を境に、西側が武蔵野台地と呼ばれる洪積台地と東側が荒川によって形成された沖積地の自然堤防上に、埋蔵文化財の包蔵地が現在16か所確認されていますが、近年の多発する開発行為によって、破壊や消滅の危機にさらされています。

こうした状況の中で、埋蔵文化財を保護、保存していくことは、現代に生きる私たちに課せられた使命ではないかと考えます。

先人の生活の場であった遺跡は、本来、現状のまま保存することが望ましいのですが、住宅建設等に伴う土木工事で、止むを得ず現状を変更する場合、教育委員会では、土地所有者のご協力をいただき、緊急の発掘調査を実施し、その記録保存を図ってきました。

この度、平成7年度に実施しました個人住宅建設に伴う発掘調査の成果がまとまり、調査報告書として刊行する運びとなりました。

本書が、市民の皆様の埋蔵文化財に対する認識を深め、また、郷土の歴史研究のため広く活用されますことを願ってやみません。

おわりに、本書の刊行にあたり、ご指導ご協力いただきました関係者の皆様に対し、心から厚くお礼申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市内に所在する遺跡群の、平成7年度の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け、平成7年4月1日より平成8年3月31日まで実施した。
3. 本書の作成において、執筆は下記のように分担したが、それ以外は尾形則敏が執筆した。編集は尾形が担当したが、第8章については佐々木保俊が行った。なお、朝霞市博物館の野沢均氏には中近世の遺物のご教示を、さらに第10章1は同氏の玉稿を賜った。

第8章 佐々木保俊

第3・5章、第2・4・6・7・9章 第2節 検出された遺構 深井恵子

4. 城山遺跡第29地点・中野遺跡第41地点の自然科学分析については、下記の方々に依頼し、その結果を付編に併載するものである。

西本豊弘（国立歴史民俗博物館）

鈴木 茂（株式会社パレオ・ラボ）

植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）

新山雅広（株式会社パレオ・ラボ）

5. 遺物の実測は、太田敦子・星野恵美子が行い、遺構・遺物のトレースは深井が行った。ただし西原大塚遺跡第34地点の遺物については、斑目ちひろが実測を行い、佐々木がトレースを行った。
6. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

○ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また同一遺構内にあるビットでも、おそらく後世のビットと思われるものには、数値を省略した。

○遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

J＝縄文時代住居跡 H＝古墳時代・平安時代住居跡 D＝土坑 M＝溝跡 S＝集石

FP＝が穴 P＝ビット

○遺物挿図版中の網点スクリーンは基本的に赤彩範囲を示すが、土器番号下に黒彩とあるものは、黒色土器の黒彩範囲を示す。

7. 調査組織

調査主体者 志木市教育委員会（生涯学習課文化財保護係）

教 育 長 秋山 太蔵

教 育 総 務 部 長 川日 憲夫

参事兼生涯学習課長 並木 勝司（～平成8年3月31日）

生涯学習課長 鈴木 重光（平成8年4月1日～）

生涯学習課長補佐 尾崎 健市

文化財保護係長 岡本 孝（～平成9年3月31日）

文化財保護係長	関根 正明	(平成9年4月1日～)
文化財保護係主査	佐々木保俊	
文化財保護係主任	清水あや子	(平成8年4月1日～)
文化財保護係主任	尾形 則敏	
文化財保護係主事	今野 美香	(～平成8年3月31日)
文化財保護係主事補	藤沢 晶子	(～平成8年3月31日 退職)

志木市文化財保護委員(5名)

神山健吉(委員長)・井上国夫(副委員長)・尾崎征男・高橋長治・高橋 豊

8. 発掘調査及び整理作業参加者

○西原大塚遺跡第34地点の発掘調査

調査担当者 佐々木保俊

発掘調査員 内野美津江

発掘・整理協力員 足立裕子・阿部公子・岩森 都・海野ひとみ・大平裕子・大野涼子・
岸田純一・木村千枝子・熊谷秀子・佐々木志野・鈴木百合香・須藤京子・高倉光代・
高橋恭子・塚田和枝・渡嘉敷千代子・永井真理・中村マキ子・二階堂美知子・松川光一・
松崎陽子・宮川幸佳・東浦久美子・広沢奈津子・藤森 栄・古田トシ子・斑目ちひろ・
宮川幸佳・油橋由美・森 文子・吉谷顕子

○城山遺跡第29・32地点 田子山遺跡第39・41・42地点 中道遺跡第36・37地点 中野遺跡第41地点の発掘調査

調査担当者 尾形則敏

発掘調査員 深井恵子

発掘・整理協力員 太田敦子・鎌木あけみ・高田美智子・星野恵美子・松浦恵子・丸山恵美子

9. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である(敬称略)。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・埼玉県立さきたま資料館・志木市立郷土資料館・志木市立志木第三小学校・志木市立宗岡小学校

浅野晴樹・麻生 優・荒井幹夫・石井 寛・飯田充晴・井上洋一・上田 寛・梅沢太久夫・
江原 順・岡田威夫・岡本東三・加藤秀之・片平雅俊・隈本健介・栗島義明・小出輝雄・
肥沼正和・小滝 勉・小島清一・小宮恒雄・笹森健一・斯波 治・白石浩之・実川順一・
鈴木一郎・鈴木加津子・鈴木正博・鈴木重信・高橋 学・田代 隆・田中英司・田中広明・
照林敏郎・中島岐視生・並木 隆・根本 靖・野沢 均・早坂廣人・廣田吉三郎・藤波啓啓・
牧田 忍・松本 完・松本富雄・柳井章宏・山田高友・和田晋治・渡辺邦仁

城山遺跡第29地点 (開発主体者 個人) 城山遺跡第32地点 (開発主体者 個人)

田子山遺跡第39地点 (開発主体者 個人) 中道遺跡第36地点 (開発主体者 個人)

田子山遺跡第41地点 (開発主体者 個人) 中道遺跡第37地点 (開発主体者 個人)

田子山遺跡第42地点 (開発主体者 個人) 西原大塚遺跡第34地点(開発主体者 個人)

中野遺跡第41地点 (開発主体者 個人)

目 次

はじめに

例言／目次／挿図目次／図版目次／表目次

第1章 平成7年度調査成果の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査成果の概要	3
第2章 城山遺跡第29地点の調査	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 検出された遺構と遺物	8
第3章 城山遺跡第32地点の調査	22
第1節 遺跡の概要	22
第2節 検出された遺構と遺物	22
第4章 田子山遺跡第39地点の調査	25
第1節 遺跡の概要	25
第2節 検出された遺構と遺物	26
第5章 田子山遺跡第41・42地点の調査	35
第1節 遺跡の概要	35
第2節 検出された遺構と遺物	35
第6章 中道遺跡第36地点の調査	40
第1節 遺跡の概要	40
第2節 検出された遺構と遺物	41
第7章 中道遺跡第37地点の調査	49
第1節 遺跡の概要	49
第2節 検出された遺構と遺物	49
第8章 西原大塚遺跡第34地点の調査	65
第1節 遺跡の概要	65
第2節 検出された遺構と遺物	67
第9章 中野遺跡第41地点の調査	85
第1節 遺跡の概要	85
第2節 検出された遺構と遺物	86
第10章 まとめ	97

付 編 自然科学分析

城山遺跡第29地点127号土坑出土のウマについて	101
城山遺跡第29地点出土灰試料の植物珪酸体	101
城山遺跡第29地点・中野遺跡第41地点から出土した炭化材樹種	102
城山遺跡第29地点・中野遺跡第41地点から出土した大型植物化石	106

挿 図 目 次

第1図	志木市の発掘調査件数の推移	1
第2図	市域の地形と調査地点 (1/20000)	5
第3図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	7
第4図	遺構分布図 (1/200)	8
第5図	123号住居跡 (1/60)	9
第6図	123号住居跡出土遺物 (1/4)	9
第7図	124号住居跡 (1/60)	11
第8図	土坑 (1/60)	13
第9図	124号土坑 (1/60)	14
第10図	126・127号土坑 (1/30)	16
第11図	127号土坑出土遺物 (1/4)	17
第12図	ビット群出土遺物1 (1/4)	18
第13図	ビット群出土遺物2 (4/5)	19
第14図	124号土坑・遺構外出土遺物 (1/3)	20
第15図	遺構分布図 (1/300)	22
第16図	128号土坑・1号ビット (1/60)	23
第17図	遺構外出土遺物 (1/3)	23
第18図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	25
第19図	遺構分布図 (1/300)	26
第20図	2号集石 (1/30)	26
第21図	4号炉穴 (1/60)	27
第22図	5号炉穴・3号集石 (1/30)	28
第23図	集石・炉穴出土遺物1 (1/3)	29
第24図	集石・炉穴出土遺物2 (2/5)	29
第25図	土坑 (1/60)	30
第26図	7・9号溝跡 (1/60)	31
第27図	8号溝跡 (1/60)	33
第28図	遺構分布図 (1/300)	35
第29図	50号住居跡 (1/60)	36
第30図	50号住居跡カマド (1/30)	37
第31図	202号土坑 (1/60)	38
第32図	50号住居跡・202号土坑出土遺物 (1/4)	39
第33図	50号住居跡出土金属製品 (1/3)	39
第34図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	40
第35図	遺構分布図 (1/300)	41
第36図	18号住居跡・18号溝跡 (1/60)	42
第37図	18号住居跡貯蔵穴 (1/30)	43
第38図	18号住居跡出土遺物1 (1/4)	43
第39図	18号住居跡出土遺物2 (1/3)	43

第40図	19号溝跡 (1/60)	46
第41図	1号ピット (1/30)	47
第42図	1号ピット出土遺物 (1/4)	47
第43図	遺構分布図 (1/300)	49
第44図	19号住居跡 (1/60)	51
第45図	19号住居跡カマド (1/30)	54
第46図	19号住居跡遺物出土状態 (遺構1/60、遺物1/9)	55
第47図	19号住居跡出土遺物 1 (1/4)	58
第48図	19号住居跡出土遺物 2 (1/4)	59
第49図	19号住居跡出土遺物 3 (1/4)	60
第50図	19号住居跡出土遺物 4 (1/3)	60
第51図	37号土坑 (1/30)	63
第52図	37号土坑出土古銭 (4/5)	63
第53図	1号道路状遺構 (1/60)	64
第54図	1号道路状遺構出土遺物 (1/3)	64
第55図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	64
第56図	遺構分布図 (1/300)	65
第57図	16号住居跡・135号土坑 (1/60)	67
第58図	17号住居跡 (1/60)	68
第59図	16・17号住居跡出土遺物 (1/3)	69
第60図	18号住居跡・137・138号土坑 (1/60)	71
第61図	18号住居跡出土遺物 1 (1/4)	74
第62図	18号住居跡出土遺物 2 (1/3)	75
第63図	18号住居跡出土遺物 3 (1/3)	76
第64図	18号住居跡出土遺物 4 (1/3)	78
第65図	18号住居跡出土遺物 5 (1/3)	79
第66図	土坑 (1/60)	80
第67図	136号土坑出土遺物 (1/4)	80
第68図	133・134・136~138号土坑出土遺物 (1/3)	81
第69図	6号住居跡 (1/60)・カマド (1/30)	83
第70図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	85
第71図	遺構分布図 (1/300)	86
第72図	50号住居跡 (1/60)	87
第73図	50号住居跡カマド (1/30)	88
第74図	50号住居跡遺物出土状態 (遺構1/60、遺物1/9)	90
第75図	50号住居跡出土遺物 1 (1/4)	91
第76図	50号住居跡出土遺物 2 (1/4)	92
第77図	50号住居跡出土遺物 3 (1/4)	93
第78図	51号住居跡 (1/60)	94
第79図	51号住居跡カマド (1/30)	95
第80図	51号住居跡出土遺物 (1/4)	96

図 版 目 次

- 図版1 城山遺跡第29地点
1. 調査区全景 2. 123号住居跡 3. 123号住居跡遺物出土状態
4. 124号住居跡 5. 124号住居跡(掘り方)
- 図版2 城山遺跡第29地点
1~3. 127号土坑遺物出土状態 4・5. 127号土坑馬骨出土状態
6. 127号土坑調査風景 7. 126・127号土坑 8. 127号土坑出土遺物
- 図版3 城山遺跡第29地点
1. 123号住居跡出土遺物 2・3. 土坑出土遺物 4・5. 29号溝跡出土遺物
6・7. ビット群出土遺物 8. 124号土坑・遺構外出土遺物
- 図版4 城山遺跡第32地点
1. 調査区近景 2. 発掘調査風景 3. 1号ビット 4. 128号土坑出土遺物
5. 1号ビット出土遺物 6・7. 遺構外出土遺物
- 図版5 田子山遺跡第39地点
1. 調査区全景 2. 発掘調査風景 3. 2号集石 4. 3号集石 5. 4号炉穴
- 図版6 田子山遺跡第39地点
1. 8号溝跡 2. 9号溝跡 3. 2・3号集石出土遺物 4. 4・5号炉穴出土遺物
5. 7号溝跡出土遺物 6・7. 8号溝跡出土遺物 8. 9号溝跡出土遺物
- 図版7 田子山遺跡第41・42地点
1. 50号住居跡・202号土坑 2. 50号住居跡(掘り方)
3. 50号住居跡遺物出土状態 4. 50号住居跡カマド(掘り方)
5・6. 50号住居跡出土遺物 7. 50号住居跡出土土器 8. 202号土坑出土遺物
- 図版8 中道遺跡第36地点
1. 18号住居跡・18号溝跡 2. 18号住居跡貯蔵穴遺物出土状態
3・4. 18号住居跡出土遺物 5. 18号溝跡出土遺物 6. 1号ビット出土遺物
7. 遺構外出土遺物
- 図版9 中道遺跡第37地点
1. 調査区近景 2. 確認調査風景 3~6. 19号住居跡遺物出土状態
7・8. 発掘調査風景
- 図版10 中道遺跡第37地点
1. 19号住居跡 2. 19号住居跡貯蔵穴 3. 19号住居跡入口施設
4・5. 19号住居跡カマド 6. 19号住居跡カマド(掘り方) 7. 37号土坑(土層断面)
8. 37号土坑遺物出土状態
- 図版11 中道遺跡第37地点
19号住居跡出土遺物
- 図版12 中道遺跡第37地点
19号住居跡出土遺物
- 図版13 中道遺跡第37地点
1. 19号住居跡出土遺物 2. 1号道路状遺構出土遺物 3. 37号土坑出土古銭
- 図版14 西原大塚遺跡第34地点

1. 16号住居跡・135号土坑 2. 17号住居跡 3. 18号住居跡遺物出土状態
 4. 18号住居跡 5. 18号住居跡（灰跡） 6. 133号土坑 7. 136号土坑
 8. 6号住居跡
- 図版15 西原大塚遺跡第34地点
 16～18号住居跡出土遺物
- 図版16 西原大塚遺跡第34地点
 18号住居跡出土遺物 133・134号土坑出土遺物 136～138号土坑出土遺物
- 図版17 中野遺跡第41地点
 1. 確認調査風景 2. 発掘調査風景 3～5. 50号住居跡遺物出土状態
 6. 50号住居跡紡錘車出土状態 7. 50号住居跡貯蔵穴遺物出土状態
- 図版18 中野遺跡第41地点
 1. 50号住居跡カマド 2. 50号住居跡支脚出土状態 3. 50号住居跡遺物出土状態
 4. 51号住居跡紡錘車出土状態 5. 51号住居跡カマド
 6. 51号住居跡カマド遺物出土状態 7. 51号住居跡カマド（掘り方）
 8. 51号住居跡（掘り方）
- 図版19 中野遺跡第41地点
 1. 50号住居跡出土遺物 2・3. 51号住居跡出土遺物
- 図版20 城山遺跡第29地点
 127号土坑出土のウマ
- 図版21 城山遺跡第29地点
 城山遺跡灰試料のプラント・オパール
- 図版22 城山遺跡第29地点・中野遺跡第41地点
 城山遺跡第29地点・中野遺跡第41地点から出土した炭化材の樹種（1）
- 図版23 城山遺跡第29地点・中野遺跡第41地点
 城山遺跡第29地点・中野遺跡第41地点から出土した炭化材の樹種（2）
- 図版24 城山遺跡第29地点・中野遺跡第41地点
 城山遺跡第29地点・中野遺跡第41地点から出土したイネ科の稈
- 図版25 城山遺跡第29地点
 城山遺跡から出土した大型植物化石
- 図版26 城山遺跡第29地点
 城山遺跡から出土した大型植物化石

目 次

第1表	ピット群出土遺物観察表	19
第2表	ピット群出土古銭観察表	20
第3表	遺構外出土遺物観察表	48
第4表	37号土坑出土古銭観察表	64
第5表	城山遺跡127号土坑から検出された炭化材の樹種同定結果	103
第6表	中野遺跡50号住居跡から検出された炭化材の樹種同定結果	103
第7表	城山遺跡127号土坑から検出された大型植物化石	107

第1章 平成7年度調査成果の概要

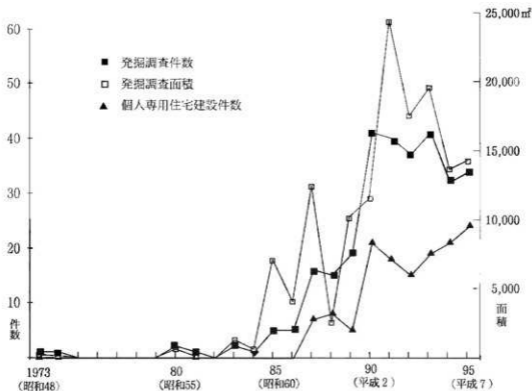
第1節 調査に至る経過

志木市は、埼玉県南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.7km、東西4.7kmの広がりを持ち、面積は9.06km²、人口6万4千の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、街には市域東部に荒川、市域の中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして市域西部から中央の新河岸川に合流する柳瀬川の3本の川が流れ、恵みを与えている。

こうした自然環境の中で、西原人塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に存在している。

当市は、都心から25km圏内に位置し、東武東上線志木駅―池袋間を急行で20分という交通の便に恵まれ、都心近郊のベッドタウンとして発展してきた。近年の都市化に伴い、各種の開発行為も増



第1図 志木市の発掘調査件数の推移

大してきたが、とりわけ住宅建設の占める割合が高く開発による遺跡破壊が進行する状況にある。また、遺跡の集中する本町・柏町・幸町地区は都市化の最も進展する地域になっていることも遺跡破壊の事態を一層大きくしていると言える。

こうした状況の中、志木市教育委員会では文化財行政を進めていくために、埋蔵文化財を保護・保存していくことが重要な課題となっている。しかしながら、開発により遺跡の現状保存が困難な状況であり、記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

第1図は、志木市における発掘調査件数および面積の推移を表したものである。志木市では、1973（昭和48）年に第1回の発掘調査が実施された。そして以後、1982（昭和57）年まで志木市史編さん事業に伴う発掘調査が単発に実施されていた。1983（昭和58）年には、初めて志木市において遺跡調査会が組織され、1985（昭和60）年には城山遺跡第1地点の調査が志木市遺跡調査会により実施された。この調査は、市内における発掘調査体制の本格的組織化の契機となり、以降志木市の埋蔵文化財保護を推進する上で大きな転換となったと言える。

また、当市における開発行為、特に住宅建設については小規模のものが多く、こうした小規模の開発にも対応することも必要があった。しかし、小規模な開発の当事者が個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など記録保存を進める上で困難な点が多かった。そのため、1987（昭和62）年からは、国・県よりの補助金の交付を受け、志木市教育委員会を主体とした発掘調査を開始し、こうした事態に対応してきている。さらに、民間・公共事業を問わず確認調査については、すべて公費で対応し、開発事業者の負担軽減と埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布状況の把握を積極的に進めている。第1図で発掘調査件数及び面積が、1987（昭和62）年以降急激に増加しているのは以上の理由による。

最近では、昭和40年前後の人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきており、平成2年度以来、個人住宅建設に伴う調査件数が増加してきている。

平成7年度は、34地点の調査（確認調査31地点、立会い調査1地点、前年度からの継続調査2地点）を実施した。そのうち、志木市教育委員会が実施した発掘調査は8地点で、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査は5地点である。

工事内容の内訳件数は、個人専用住宅24件（兼倉庫建設1件を含む）、共同住宅5件、倉庫建設2件、分譲住宅2件、区画整理事業1件である。

第2節 平成7年度の調査成果

番号	調査地点	所在地	面積 m ²	調査期間	備 考
1	西原大塚遺跡 (区画整理事業)	幸町3丁目	3,371.00	平成7年4月 3日～平成 8年3月28日	平成5年度からの継続事業 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
2	城山遺跡 第27地点	柏町3丁目 2655-60-番	371.52	2月27日～ 4月28日	平成6年度からの継続事業 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
3	城山遺跡 第29地点	柏町3丁目 2618-15他	146.41	4月11日～ 4月28日	確認調査は4月5日に実施 後述 第2章参照
4	中野遺跡 第38地点	柏町1丁目 1512-1	46.36	4月20日	遺構・遺物は検出されなかった
5	田子山遺跡 第38地点	本町2丁目 1734-11・43	68.17	4月21日	遺構・遺物は検出されなかった
6	城山遺跡 第30地点	柏町3丁目 2604-1	200.85	4月24日	遺構・遺物は検出されなかった
7	田子山遺跡 第39地点	本町3丁目 1816-5	154.12	5月16日～ 5月31日	確認調査は5月9日に実施 後述 第4章参照
8	水川前遺跡 第6地点	柏町4丁目 2687-65	100.86	5月25日	遺構・遺物は検出されなかった
9	中道遺跡 第36地点	柏町5丁目 2994-1他	179.51	6月2日～ 6月21日	確認調査は5月31日に実施 後述 第6章参照
10	城山遺跡 第31地点	柏町3丁目 2604-1	164.27	6月6日	遺構・遺物は検出されなかった
11	本町4丁目	本町4丁目 1143-102	97.97	6月15日	遺構・遺物は検出されなかった
12	本町4丁目	本町4丁目 1949-24	413.00	7月4日	遺構・遺物は検出されなかった
13	富士前遺跡 第14地点	本町3丁目 1853-23	140.15	7月25日	遺構・遺物は検出されなかった
14	田子山遺跡 第40地点	本町2丁目 1689-5	77.84	7月26日	遺構・遺物は検出されなかった
15	中道遺跡 第37地点	柏町4丁目 2671-8	154.44	8月7日～ 9月6日	確認調査は8月3日に実施 後述 第7章参照
16	西原大塚遺跡 第34地点	幸町3丁目 3233他	317.00	8月4日～ 8月29日	後述 第8章参照
17	中野遺跡 第39地点	柏町1丁目 1474-10-番	173.05	8月7日	遺構・遺物は検出されなかった

番号	調査地点	所在地	面積 m ²	調査期間	備 考
18	本町4丁目	本町4丁目 1110-1	285.54	平成7年 8月8日	遺構・遺物は検出されなかった
19	田子山遺跡 第41地点	本町2丁目 1744-20番	55.80	8月28日～ 9月4日	確認調査は8月22日に実施 後述 第5章参照
20	田子山遺跡 第42地点	本町2丁目 1744-20番	55.80		
21	田子山遺跡 第43地点	本町2丁目 1718-4	185.25	8月30日	遺構・遺物は検出されなかった
22	馬場遺跡 第1地点	下宗町1丁目 1940	995.84	9月11日	遺構・遺物は検出されなかった
23	中野遺跡 第40地点	柏町1丁目 1507-1・4他	1,903.18	9月18日～ 平成8年 1月26日	確認調査は9月12日に実施 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施 立会い調査は10月17日に実施 遺構・遺物は検出されなかった
24	田子山遺跡 第44地点	本町2丁目 1716-6他			
25	中野遺跡 第41地点	柏町1丁目 1518-4	235.63	10月27日～ 11月13日	確認調査は10月26日に実施 後述 第9章参照
26	城山遺跡 第32地点	柏町3丁目 1137-1他	59.62	11月15日	確認調査は11月14日に実施 後述 第3章参照
27	中野遺跡 第42地点	柏町1丁目 1475-1	1,283.51	11月29日	遺構・遺物は検出されなかった
28	中道遺跡 第38地点	柏町5丁目 2950-1・35	1,019.82	平成8年 3月14日～ 5月7日	確認調査は12月8日に実施 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
29	中道遺跡 第39地点	柏町5丁目 2946-1・2	1,209.91	2月6日～ 3月12日	確認調査は12月7日に実施 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
30	新邸遺跡 第6地点	柏町5丁目 2931-5	80.24	平成7年 12月14日	遺構・遺物は検出されなかった
31	本町4丁目	本町4丁目 1949-38	139.50	12月25日	遺構・遺物は検出されなかった
32	田子山遺跡 第45地点	本町2丁目 1683-14	128.50	平成8年 2月6日	遺構・遺物は検出されなかった
33	本町4丁目	本町5丁目 1145-250番	174.74	2月14日	遺構・遺物は検出されなかった
34	市場遺跡 第18地点	本町1丁目 1583の一部	71.36	2月14日	遺構・遺物は検出されなかった
合 計			14,143.44		



第2図 市城の地形と調査地点 (1/20000)

第2章 城山遺跡第29地点の調査

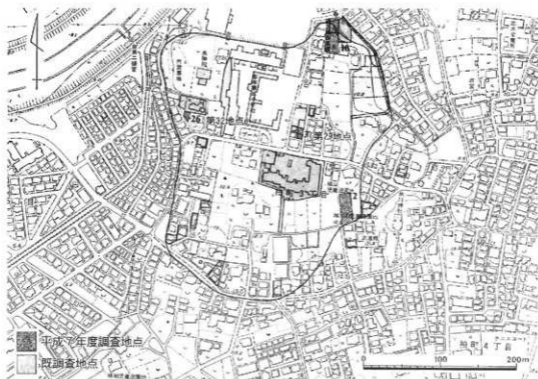
第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

城山遺跡は、志木市柏町3丁目を中心とする遺跡で、柳瀬川流域右岸の台地縁辺部に立地する。遺跡から北西方向には柳瀬川によって開析された沖積低地を臨むことができ、遺跡の標高は約12m、低地との比高差は約5mを測る。

柳瀬川流域に分布する遺跡は、所沢市、三芳町、富士見市などにも数多く存在することが知られているが、市内では他に西原大塚遺跡、新邸遺跡、中道遺跡、城山遺跡、中野遺跡が挙げられる。こうした遺跡は、中野遺跡を除き同じ地続き上に立地しており、言わば一つの遺跡群として捉えてもよさそうである。今後、地域研究の一環として、遺跡間との総合的な調査・研究が要求されよう。また、遺跡の現況は、宅地化が急激に進行しており、畑地を僅かに残す程度となっている。

本遺跡は、昭和49年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査により、縄文時代前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、平安時代の集落跡、中世の城館跡であることが判明している。



第3図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成7年4月5日に実施した。調査区長軸方向に2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、調査区域内はほぼ全面から住居跡・溝跡と考えられる遺構が確認された。そのため、発掘調査にあたり、調査区域内に残土置場を確保することは不可能と判断し、11日からは、調査区北半部分の表土剥ぎと同時に残土の搬出作業を開始した。

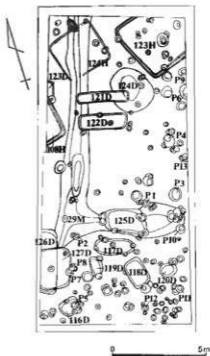
13日には併行して人員導入による細部の遺構確認作業と調査区内の整備を開始する。しかし、調査区のほぼ全面に遺構が分布しているとはいえ、当面の残土は調査区内に置かざるを得ないことから、17日には、調査区南端部分を残土置場として確保するため、まずその部分の調査を先行して終了させることにした。そして、116～120号土坑の精査及び写真撮影・実測をその日のうちにすべて終了させ、狭小ながら当面の残土置場に当てることにした。

18日、調査区北半部分の調査を開始した。その結果、調査区内には縄文時代早期後葉の土坑(124 D) 1基、古墳時代後期の住居跡(108・123 H) 2軒、平安時代住居跡(124 H) 1軒、そして、中・近世の土坑11基、溝跡(29 M) 1本、ピット群が分布していることが判明した。

特に注目すべきは、馬の埋葬施設が発見されたことである。127号土坑(127 D)からは、馬の骨(上半部を欠損)が横臥した状態で検出され、その直上からは板碑が、そして下部からは広い範囲で炭化種子が出土した。

24日には、第2回目の残土搬出作業を行う。

28日には、すべての遺構の写真撮影・実測を終了し、5月1日からは埋め戻し作業を開始、翌2日には完了した。これにより、すべての調査を完了する。



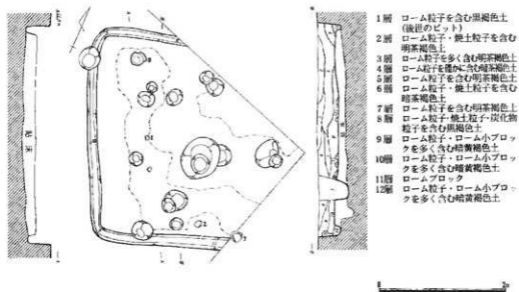
第4図 遺構分布図 (1/200)

第2節 検出された遺構と遺物

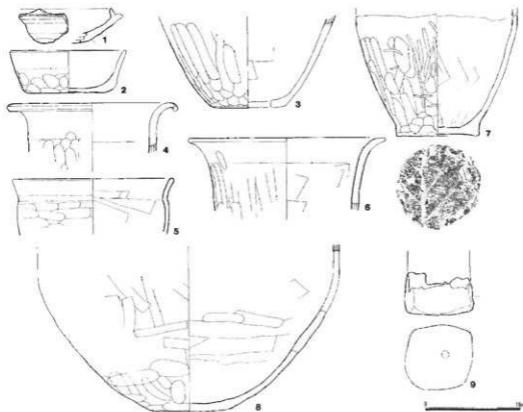
(1) 住居跡

123号住居跡 (第5図)

[住居構造] 東側は調査区域外にあるものと思われる。(平面形) 長方形か。(規模) 不明×3.45m。(壁高) 24～31cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できる範囲では全周する。上幅14～20cm・下幅6～9cm・深さ8～11cmを測る。(床面) 中央部分及び壁際を除いて、硬化した床面が



第5図 123号住居跡 (1/60)



第6図 123号住居跡出土遺物 (1/4)

確認された。(柱穴) 検出されたピットは後世のものと考えられる。(覆土) 12層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

[遺物] 床直及び覆土中から、土器、土製支脚が出土した。

[時期] 古墳時代後期。

123号住居跡出土遺物 (第6図)

須恵器環形土器 (1)

口唇部は丸く、受部端は弱い沈線が回る。受部と口縁部の境はやや強い沈線が回る。口縁部は一部成形により決られている。底部は回転ヘラ削り調整が施される。住居中央からやや西壁寄りの床面上約25cm浮いた覆土中からの出土である。小破片。

土師器環形土器 (2)

器高4.5cm、口径12.3cm、底径8.0cm。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後、指頭押捺が施される。内面には一部煤の付着が見られる。南壁近くの床面上の出土で完形である。

土師器甕形土器 (3)

単孔式のものである。底部穿孔径4.7cmを測る。内面は横方向ヘラナデ、外面は縦方向(下→上)のヘラ削り。覆土中からの出土で、胴部下半から底部を1/3程遺存する。

土師器甕形土器 (4~8)

4は口縁部が大きく外反し、口唇部は折り返し状に丸くめくれている。胎土中に金雲母を含む。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は縦方向のヘラ削り。覆土中の出土で、口縁部から胴部上半を1/4程遺存する。

5は口縁部が外傾する。口縁部内外面横ナデ、以下内面は横方向のヘラナデ、外面は横方向のヘラ削り。覆土中の出土で、口縁部から胴部上半を1/4程遺存する。

6は口縁部が弓状に大きく外反する。口縁部内外面横ナデ、以下内面は横方向のヘラナデ、外面は縦方向のヘラ削り。覆土中の出土で、口縁部から胴部上半を1/4程遺存する。

7は底部に木葉痕を残す。内面は横方向のヘラナデ、外面は縦方向のヘラ削り後、細長い磨きが粗く施される。住居南東コーナー付近の床面上の出土で、胴部中位以下を2/3程遺存する。

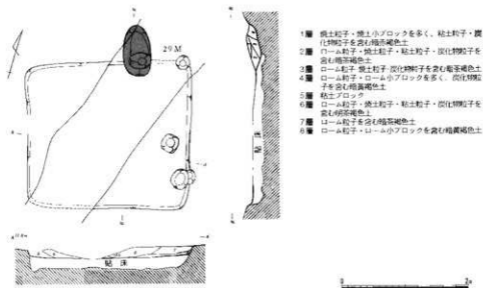
8は丸甕である。内面は横方向のヘラナデ、外面はヘラ削り後、ヘラナデ(磨きの)が粗く施される。住居北西コーナーの床面上約15cm浮いた覆土中からの出土で、胴部中位以下を2/3程遺存する。

土製品 (9)

支脚である。大部分が欠損している。断面はやや不整形であるが、一辺7cmの方形状を呈する。中心には直径0.8cmの孔が開いている。

124号住居跡 (第7図)

[住居構造] 29号溝跡に切られる。(平面形) 正方形。(規模) 2.56×2.34m。(壁高) 10~15cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(床面) 全体的に軟弱である。(カマド) 北壁中央よりやや東に位置し、方位はN-18°-E。長さ80cm・幅43cm・壁への掘り込み55cmを測る。29号溝跡により大部分破壊



第7図 124号住居跡 (1/60)

されているので詳細は不明である。(柱穴) 検出されなかった。(覆土) 4層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

[遺物] 覆土中から七器小破片が出上したが、実測できるものはなかった。

[時期] 平安時代。

(2) 土坑

116号土坑 (第8図)

[構造] ビットは後世のものである。(平面形) 不整形。(規模) 1.12×0.9 m。(長軸方位) $N-46^\circ$ - E。(深さ) 19cm。坑底はほぼ平坦である。(覆土) ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の状態から中・近世の所産のものであろう。

117号土坑 (第8図)

[構造] ビットは後世のものである。(平面形) 長楕円形。(規模) 2.09×0.82 m。(長軸方位) $N-78^\circ$ W。(深さ) 10cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、断面皿状を呈する。(覆土) ローム粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の状態から中・近世の所産のものであろう。

118号土坑 (第8図)

〔構造〕ピットは後世のものである。(平面形) 長方形。(規模) 1.53×0.98m。(長軸方位) N-17°-W。(深さ) 22cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) 4層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

〔時期〕近世か。

118号土坑出土遺物 (図版 3-2-1・2)

1は瀬戸の灰軸皿の口縁部小破片である。軸の色調は淡緑色を呈する。時期は15世紀であろう。

2は素焼土器の口縁部小破片である。色調は橙色を呈する。ロクロ成形。外面には一部へう状工具により削られた部分がある。時期は18世紀であろう。

119号土坑 (第8図)

〔構造〕ピットは後世のものである。(平面形) 長方形。(規模) 1.06×0.59m。(長軸方位) N-5°-E。(深さ) 18~20cmを測る。坑底は東側が僅かに深く、壁は西側を除いて緩やかに立ち上がる。(覆土) ローム粒子を含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕覆土の状態から中・近世の所産のものであろう。

120号土坑 (第8図)

〔構造〕ピットは後世のものである。(平面形) 楕円形。(規模) 0.91×0.68m。(長軸方位) E。(深さ) 16~30cm。坑底は東側が深く、壁は急斜に立ち上がる。(覆土) ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕覆土の状態から中・近世の所産のものであろう。

121号土坑 (第8図)

〔構造〕29号溝跡・124号土坑を切る。(平面形) 長方形。(規模) 2.24×0.6m。(長軸方位) N-75°-W。(深さ) 14~20cm。坑底はほぼ平坦で、断面形は皿状を呈する。(覆土) ローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土を基調とする。

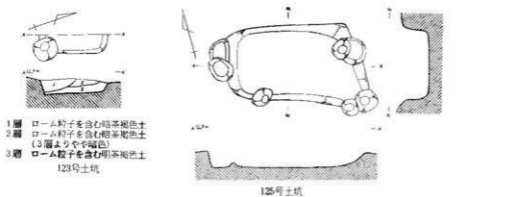
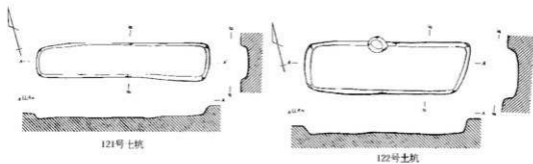
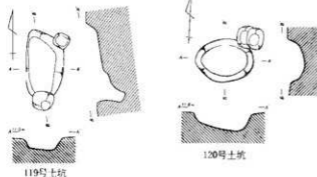
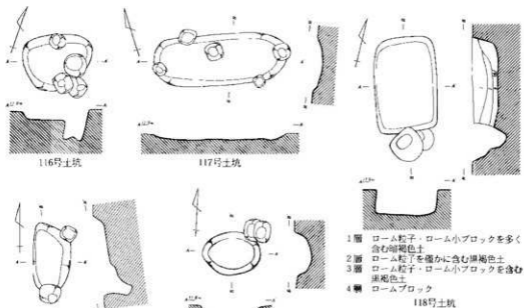
〔時期〕中世か。

121号土坑出土遺物 (図版 3-2-3)

3は瀬戸のあめ軸皿である。軸の色調は茶色を呈する。内面に文様あり。時期は14世紀か。29M (図版 3-4-1) と同一個体である。

122号土坑 (第8図)

〔構造〕29号土坑を切る。(平面形) 長方形。(規模) 2.59×0.85m。(長軸方位) N-75°-W。(深さ) 15cm前後を測る。坑底は平坦で、断面形は皿状を呈する。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。



[時期] 近世。

122号土坑出土遺物 (図版 3-2-4・5)

- 4は青磁碗である。小破片のため、産地については不明である。時期は18世紀以後である。
5は肥前系の染付け碗か。時期は18世紀中頃であろう。小破片のため、詳細は不明である。

123号土坑 (第8図)

[構造] 108号住居跡を切る。西側部分が調査区域外にあり、詳細は不明である。(平面形) 不明。(規模) 不明×1.10m。(深さ) 24cm前後を測る。(覆土) 3層に分層される。

[時期] 近世。

123号土坑出土遺物 (図版 3-2-6)

6は瀬戸の灰釉鉢の口縁部小破片である。釉の色調は淡黄褐色を呈する。時期は18世紀以後である。

124号土坑 (第9図)

[構造] 121号土坑に切られる。(平面形) 楕円形。(規模) 2.40×2.17m。(長軸方位) N-13°-W。(深さ) 50~55cmを測る。(覆土) 9層に分層される。

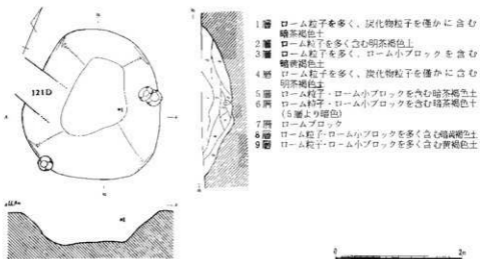
[時期] 縄文時代早期後葉。

124号土坑出土遺物 (第14図1)

縄文時代早期後葉の条痕文系土器の小破片である。覆土中には繊維を含む。

125号土坑 (第8図)

[構造] 29号土坑を切ると思われる。(平面形) 不整形。(規模) 2.22×1.28m。(長軸方位) N-



第9図 124号土坑 (1/60)

75° - W。(深さ) 50cm前後を測る。坑底は平坦である。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。

[時期] 近世。

126号土坑出土遺物 (図版 3-3-7-8)

7は素焼土器の口縁部小破片である。ロクロ成形である。時期は近世であろう。

8は瀬戸系の天目茶碗の底部破片である。削り出し高台。時期は17世紀～18世紀であろう。

126号土坑 (第10図)

[構造] 127号土坑を切る。西側部分が調査区域外にあり、詳細は不明である。(平面形) 長方形か。(規模) 不明×3.47m。(深さ) 30～38cmを測る。(覆土) 127号土坑の覆土上層に貼床状の9層を施すが、基本的には5層に分層される。

[時期] 中世。

126号土坑出土遺物 (図版 3-3-9～12)

9は瓦器の口縁部小破片である。ほうろくか。胎土には石英を含む。色調は内外面黒色を呈する。調整はロクロナデが施される。

10は素焼土器の底部破片である。ロクロ成形。底部には回転糸切り痕を残す。時期は15世紀～16世紀であろう。

11は青磁碗である。小破片のため、詳細は不明である。

12は瀬戸の徳利である。小破片のため、詳細は不明である。

127号土坑 (第10図)

[構造] 126号土坑に切られる。(平面形) 隅円長方形か。(規模) 不明×2.19m。(長軸方位) N 7° - E。(深さ) 50cm前後を測る。(ピット) 確認されたピットは、後世のものと考えられる。(馬骨の出土状態) 横臥した状態で検出された。頭部および上半部は、おそらく126号土坑の構築の際に失われたものと考えられる。馬骨の周囲を観察すると、直上には板碑が表面を上にして出土しており、下部からは広い範囲で炭化物が検出されている。また、焼土が下腿骨の近くから検出されている。(覆土) 10～15層が相当する。

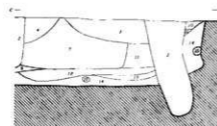
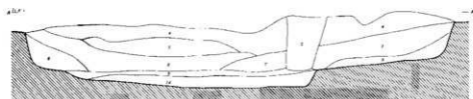
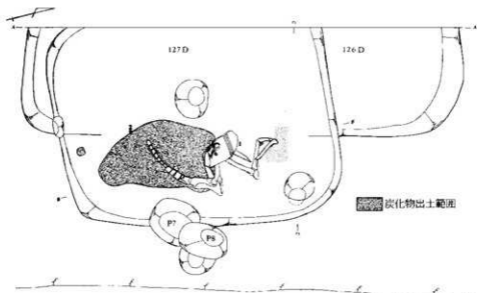
[時期] 中世。

127号土坑出土遺物 (第11図、図版 3-3-13)

第11図1は板碑の破片である。いわゆる「青石塔婆」と呼ばれるもので、石質は緑泥片岩である。長さ34.6cm、幅21.0cm、厚さ3.0cm。二条線と主尊種子が残り、主尊種子は異字体キリク(阿弥陀如来)である。馬骨の直上からの出土である。

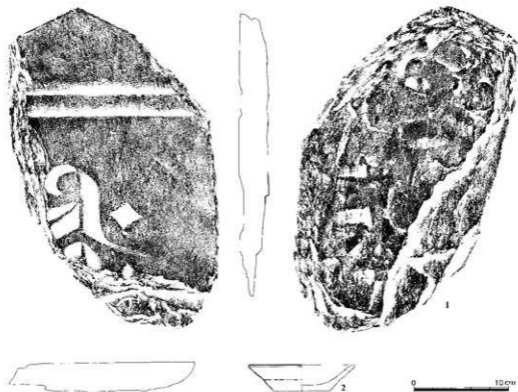
2は素焼土器である。器高2.8cm、口径11.2cm、底径6.0cm。底部には回転糸切り痕を残す。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には茶褐色バミス・砂粒を含む。覆土中の出土で、時期は16世紀代である。

図版 3-3-13は素焼土器の小破片である。ロクロ成形され、底部には回転糸切り痕を残す。色調は淡橙色を呈する。胎土は精練されており、細砂粒を僅かに含む。



- | | | |
|-----|--------------------------------------|---|
| 1層 | 表土 | } |
| 2層 | ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土
[後部のピット] | |
| 3層 | ローム粒子を含む暗褐色土(29M層土) | |
| 4層 | ローム粒子を含む暗褐色土 | |
| 5層 | ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む
明褐色土 | |
| 6層 | ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土 | |
| 7層 | ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む
明褐色土 | |
| 8層 | ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土 | |
| 9層 | ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む
黄褐色土 | |
| 10層 | ローム粒子を多く含む暗褐色土 | |
| 11層 | ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む
暗褐色土 | |
| 12層 | ローム粒子を僅かに含む暗褐色土 | |
| 13層 | 焼土 | |
| 14層 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・
炭化物粒子を含む黄褐色土 | |
| 15層 | ロームブロック | |

第10図 126・127号土坑 (1/30)



第11図 127号土坑出土遺物(1/4)

(3) 溝跡

29号溝跡(第4図)

[構造] N-17°-Eの走行角度をもつ。北側は調査区域外に延びるものと思われ、南側は126・127号土坑を切っているがその先は不明である。また、途中で東側へほぼ直角に枝分かれする箇所では125号土坑に切られ、その先は5m程で止まっている。確認できる範囲での長さは13m、上幅90~185cm、下幅17~85cm、深さ12~24cmを測る。断面形は丸い皿状を呈する。(覆土)上層はローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土、中層はローム粒子を含む黒褐色土、下層はローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

[時期] 近世。

29号溝跡出土遺物(図版3-4・5)

1は瀬戸のあめ釉皿の小破片である。釉の色調は茶色を呈する。内面に文様あり。時期は14世紀か。121D(図版3-2-3)と同一個体である。

2は瀬戸のあめ釉徳利か。釉の色調は薄茶色を呈する。小破片のため、詳細不明である

3・4は志野釉皿の底部小破片で、同一個体の可能性がある。割り出し高台。時期は17世紀前半である。

5は灰釉人皿の底部小破片である。中国製か。時期は13世紀~14世紀であろう。

6は志野靱皿の底部小破片である。削り出し高台。器面全体に被熱痕がある。時期は17世紀中頃であろう。

7は瀬戸の灰釉鉢と思われる。釉の色調は淡黄褐色を呈する。時期については中世の可能性があるが、小破片のため、詳細は不明である。

8は瀬戸の灰釉壺の小破片である。釉の色調は淡黄褐色を呈する。時期については中世の可能性があるが、小破片のため、詳細は不明である。

9は鉄胎徳利である。小破片のため、産地については不明である。時期は18世紀以後であろう。

10は甕あるいは徳利の底部小破片である。削り出し高台。胎土には小石・砂粒を含む。小破片のため、産地については不明である。時期は18世紀以後であろう。

11は瀬戸系の掃鉢である。内面には縦方向に櫛目が施される。時期は18世紀以後であろう。

12～14は素焼土器である。12は口縁部から底部にかけての破片である。ロクロ成形され、底部には回転糸切り痕を残す。時期は18世紀中頃であろう。13は口縁部から底部にかけての破片である。ロクロ成形され、底部には回転糸切り痕を残す。時期は17世紀～18世紀であろう。14は底部破片である。ロクロ成形され、底部には回転糸切り痕を残す。時期は16世紀～17世紀であろう。

15は瓦器の小破片である。小破片のため、詳細は不明であるが、ほうろくあるいは手焙りか。

16・17は肥前系碗の小破片である。小破片のため、詳細は不明であるが、16の時期は18世紀中頃であろう。

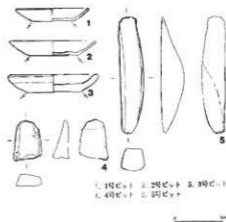
(4) ビット群 (第12図)

調査区域内からは、多数のビットが検出された。

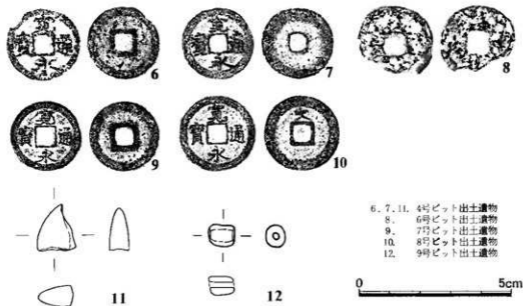
ここでは、これらの時期の特定できないビットを一括してビット群として扱い、特に遺物を伴うものについてのみ、ビット番号を付けることにした。遺物を出土したビットは、全部で13本である。出土遺物としては、特に9号ビットから、弥生時代から古墳時代にかけてのガラス小玉が1点出土したが、その他は陶・磁器小片、碁石、古銭などの近世以降に比定される遺物である。おそらく、その他も含め大部分のビットが近世以降の所産のものと考えられる。

ビット群出土遺物 (第12・13図、図版3-6・7、第1・2表)

ビット群からは、ガラス小玉1点、碁石2点、陶・磁器7点、古銭5枚、碁石1点が出土した。



第12図 ビット群出土遺物1 (1/4)



第13図 ビット群出土遺物2 (4/5)

番号	遺構名	遺物	法量 (cm)・調整及び特徴	出土状況
第12図1	1号ビット	土師質土器	器高1.4, 口径7.7, 底径4.3。ロクロ成形され、底部には回転系切り痕を残す。ロクロ回転は右回転で、時期は19世紀であろう。口縁部の2箇所に油煙の付着あり、遺存度は4/5以上である。	覆土中
	2号ビット	土師質土器	器高は1.6, 推定口径9.2, 底径4.9。ロクロ成形され、底部には回転系切り痕を残す。ロクロ回転は右回転で、時期は19世紀であろう。遺存度は2/3程である。	覆土中
3	3号ビット	土師質土器	器高は1.9, 推定口径9.5, 底径5.4。ロクロ成形され、底部には回転系切り痕を残す。ロクロ回転は右回転で、時期は15世紀であろう。1・2の土器に比べ、厚手である。遺存度は1/2程である。	覆土中
4	4号ビット	石製品	砥石である。長さ12.4, 幅2.5。断面はほぼ方形を呈し、4面すべての面を使用している。完形である。	覆土中
5	5号ビット	石製品	砥石である。4のものとはほぼ同形になると思われるが、大きさはやや人形になる。大部分が破損している。	覆土中
第13図11	4号ビット	石製品	蔀石の小破片であろうか。よく磨かれ、1面に作られている。重さは1.5gである。	覆土中
12	9号ビット	ガラス製品	ガラス小玉である。長さ0.85, 幅0.7, 孔径0.15, 重さは0.5g。色調はコバルトブルー、完形である。	覆土中
図版3-6-1	8号ビット	磁器	肥前系の碗か、小破片のため、詳細は不明である。	覆土中
2	10号ビット	陶器	瀬戸の灰輪筒形容器あるいは香がの口縁部小破片であろうか、小破片のため詳細は不明であるが、時期は18世紀であろう。	覆土中
3	11号ビット	陶器	瀬戸の灰輪碗の口縁部小破片である。時期は18世紀であろう。	覆土中
4	7号ビット	素焼土器	底部破片である。ロクロ成形され、底部には回転系切り痕が残る。ロクロ回転は右回転である。時期は19世紀であろう。	覆土中
5	12号ビット	素焼土器	底部破片である。ロクロ成形され、底部には回転系切り痕が残る。ロクロ回転は右回転である。時期は17世紀～18世紀であろう。	覆土中
6	13号ビット	素焼土器	底部破片である。ロクロ成形され、底部には回転系切り痕が残る。ロクロ回転は右回転である。時期は15世紀～16世紀であろう。	覆土中

第1表 ビット群出土遺物観察表

番号	遺構名	種別	計測値(単位cm・g)			備考
			外径	穿径	量	
第13図6	4号ビット	寛永通宝	2.45	0.60	2.3	古寛永
7	4号ビット	寛永通宝	2.40	0.55	2.2	古寛永
8	6号ビット	不明	2.50	0.70	1.3	遺存状態不良「永」の字か
9	7号ビット	寛永通宝	2.30	0.60	2.3	新寛永
10	8号ビット	寛永通宝	2.50	0.60	2.8	文銭

第2表 ビット群出土古銭観察表

(5) 遺構外出土遺物 (第14図2~16)

縄文時代の土器が検出されている。時代的には前期～後期にかけての土器であり、1～4群に分類された。

第1群土器 前期中葉の黒浜式土器(2~4)

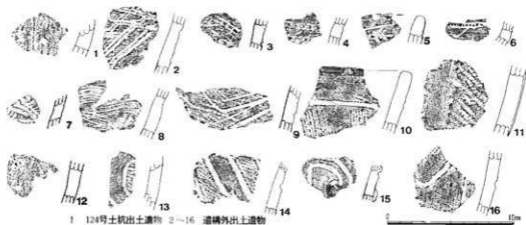
胎土中に繊維を含む土器である。2は燃糸文が施文される。2条1単位の無節の燃糸文により、上下羽状文あるいは菱形文を描出している。3・4は半截竹管による連続爪形文が施文される。3は鋸歯状文になろうか。

第2群土器 前期後葉の諸磯式土器(5~9)

5は口縁部破片で、半截竹管による平行沈線上に爪形文が施文される。口唇部には弱い押捺が加えられる。6・7は爪形文が施文される。8は平行沈線文が横位に施文される。9は幅広の平行沈線による菱形文になろうか。地文には単節縄文RLが施文されている。

第3群土器 中期後葉の加曾利E式土器(10~12)

10は口縁部直下に沈線を巡らし、その下には櫛歯状工具による条線が垂下している。11は微隆起帯を垂下させ、縄文帯と無文帯を作り出している。縄文は単節縄文LRが施文されている。12は櫛歯状工具による条線を波状に垂下させている。



第14図 124号土坑・遺構外出土遺物(1/3)

第4群土器 後期前葉の称名寺式～編之内式土器（13～16）

13は2本の沈線により曲線的な文様が描出される。縄文は単節縄文LRである。14は斜行する沈線を境に縄文帯と無文帯を交互に作り出している。縄文は単節縄文LRである。

15は渦巻き状の中心に小突起が付されている。16は無文地に2本の沈線による懸垂文化した文様が施文されている。

【引用・参考文献】

- 志木市史編さん室 1984『志木市史 原始・古代資料編』
 1986『志木市史 中世資料編』
 1987『志木市史 近世資料編Ⅲ』
 1990『志木市史 通史編 上』
- 佐々木保俊・尾形則敏 1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集
- 佐々木保俊 1987『城山遺跡長勝院地点発掘調査報告書』志木市の文化財第11集
 1992「城山遺跡第11地点の調査」『志木市遺跡群Ⅳ』志木市の文化財第17集
 1996「城山遺跡第12地点の調査」志木市の文化財第24集
- 尾形則敏 1989「城山遺跡第4地点の調査」『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集
 1991「城山遺跡第7・8地点の調査」『志木市遺跡群Ⅲ』志木市の文化財第16集
 1991「城山遺跡第6地点の調査」『西原大塚遺跡第7地点 新邸遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点』志木市の文化財第15集
 1995「城山遺跡第20地点の調査」『志木市遺跡群Ⅵ』志木市の文化財第21集
 1996「城山遺跡第13地点の調査」志木市の文化財第24集
- 尾形則敏・深井恵子 1996「城山遺跡第25地点の調査」『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財第23集

第3章 城山遺跡第32地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

第2章 城山遺跡第29地点の調査（7ページ）を参照。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、11月14日に実施した。調査区域内に1本のトレンチ（ほぼ東西方向）を設定し、バックホーを使用し表土を剥く。同時に遺構確認作業を行った結果、中央付近から方形の遺構を1基確認した。そのため、継続してプランを確認しながら周辺の表土剥ぎを行った。残土置場については、調査区内にその場所を確保することができた。

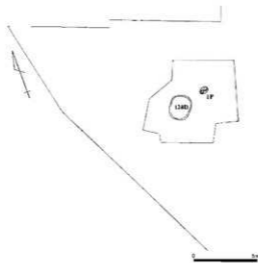
人員導入による発掘調査は、翌15日に実施した。まず、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行い、その後、遺構の精査を開始した結果、遺構は土坑1基（I28D）とピット1本（P1）であることが判明した。同日、すべての実測・写真撮影を終了し、17日には埋め戻しを完了した。

第2節 検出された遺構と遺物

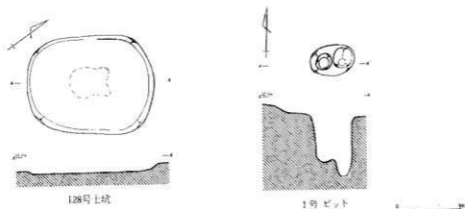
(1) 土坑

128号土坑（第16図）

〔構造〕 土坑として取り扱ったが、小竪穴状遺構であると思われる。（平面形）隅丸方形。（規模）



第15図 遺構分布図 (1/300)



第16図 128号土坑・1号ピット (1/60)

2.0×1.58m。(長軸方位) N-35°-E。(深さ) 12cm前後を測る。坑底は平坦で、中央付近にやや硬化した面が確認された。(覆土) ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代の土器の小破片が出土したが実測できるものはなかった。

〔時期〕 覆土の観察からは、古墳時代後期以降のものと思われる。

(2) ピット

1号ピット (第16図)

〔構造〕 2個のピットが重複している。(規模) 70×50cm。(深さ) 76cmと100cmを測る。

〔時期〕 中世か。

1号ピット出土遺物 (図版4-5)

1は布目瓦である。被熱により色調は全体に淡黄褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。中世瓦か。

2は瀬戸系の灰輪盤の小破片である。年代は13~14世紀に比定される。

(3) 遺構外出土遺物 (第17図、図版4-7)

時代的には縄文時代早期から近世までの遺物が出土している。

第1群土器 縄文時代早期後葉の条痕文系土器 (第17図1)

胴部下半の小破片である。表裏とも貝殻による条痕が施されるが、裏面はやや不明瞭である。胎



第17図 遺構外出土遺物 (1/3)

土中には繊維を含む。

第2群土器 縄文時代前期後半の諸磯式土器（第17図2・3）

2は浮線文土器で、「く」字状を呈する口縁部付近の小破片である。浮線文は刻みが付加された細く薄いもので、縦位に施されている。

3は半截竹管による平行沈線が施されている。

第3群土器 縄文時代中期後半の加曾利E式土器（第17図4）

口縁部の小破片である。楕円形と思われる区画文の中には条線が施されている。

第4群土器 縄文時代後期の土器（第17図5）

胴部の小破片である。2本の沈線により懸垂文と思われる文様が施されている。

第5群土器 中・近世の遺物（図版4-7）

陶・磁器が3点出土した。

1は肥前系の磁器碗の小破片である。年代は18世紀以降であろう。

2は常滑焼の小破片で、年代は不明である。

3は播鉢の小破片で、産地・年代等は不明である。信楽系か。

第4章 田子山遺跡第39地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

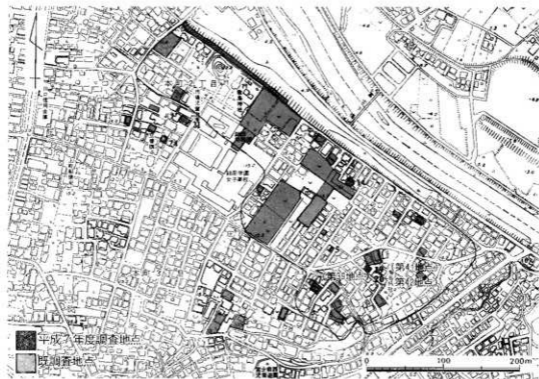
田子山遺跡は、志木市本町2丁目を中心とする遺跡で、東武東上線志木駅の北東1kmに位置している。遺跡は、北東方向に新河岸川を臨む台地上に立地し、標高約15mの平坦部に南北約100m、東西約500mの範囲に広がっている。

本遺跡の第1回目の発掘調査は、昭和63年に実施され、以後の調査により、縄文時代早期・中期・後期、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代、近世の複合遺跡であることが判明している。

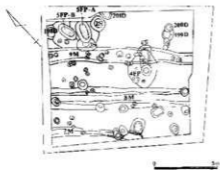
昨年度（平成7年度）には、第32地点の調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代にかけてのものと考えられる方形周溝墓が1基当地域では初めて検出されている。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成7年5月9日に実施した。調査区の長軸に合わせ、2本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、調査区内ほぼ全面にわたり遺構が分布していることが確認された。そのため、16日からは、バックホーにより調査区内すべての表土



第18図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)



第19図 遺構分布図 (1/300)

査を開始する。2Sは実測を終了し、掘り方の写真撮影を行う。

24日、3号集石(3S)の精査を開始する。

25日、残土を調査区域内では処理しきれなくなったため、2回目の残土搬出作業を行った。同日、4号炉穴(4FP)の精査を開始する。

26日、5号炉穴(5FP)の精査を開始する。

31日には、4・5FPの実測・写真撮影を終了し、すべての調査を完了する。

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 集石

2号集石(第20図)

〔構造〕5号炉穴Aを切る。(規模)1.16×1.1m。(深さ)19cm前後を測る。(礫の状態)中心部に比較的に密に分布する。被熱による破砕礫が多い。(覆土)ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。(掘り方)礫を除去すると土坑状の掘り込みが確認された。平面形は楕円形を呈し、規模は127×110cmを測る。

〔遺物〕礫出土と同レベルから縄文時代の土器小片が出土した。

〔時期〕縄文時代早期後葉。

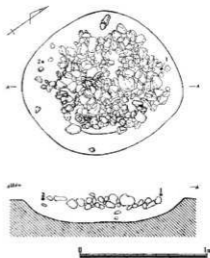
2号集石出土遺物(第23図1・2)

1・2は条痕文系土器である。いずれも表面に縦位の条痕文が施され、胎土には砂粒を含み繊維の混入は目立たない。

を剥ぎ、その残土を調査区域外に搬出する作業を開始する。その作業は、18日に終了した。

人員導入による発掘調査は、18日から開始した。バックホーによる表土剥ぎ作業に併行して、まず、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行う。その結果、確認調査により確認された遺構は、平行して走る3本の溝跡と縄文時代の土坑・炉穴・集石が数基あることが判明した。同日には、2本の溝跡(7・8M)と2号集石(2S)の精査を開始する。

23日には、7・8Mの写真撮影を行い、9Mの精



第20図 2号集石 (1/30)

3号集石 (第22図)

[構造] 9号溝跡に切られ、5号炉跡Aを切る。土坑を伴う。(平面形) 楕円形か。(規模) $1.6 \times 1.05\text{m}$ (長軸方位) $N-53^\circ-W$ 。(深さ) 27cm前後を測る。(礫の状態) 土坑の西側に多く分布するが、礫はあまり多くない。比較的土坑の上層から出土している。(覆土) ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 礫出土と同レベルから縄文時代の土器小片・石器が出土した。

[時期] 縄文時代早期後葉。

3号集石出土遺物 (第23図3・4、第24図13)

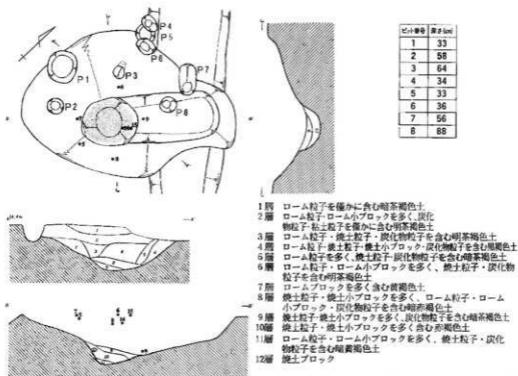
第23図3・4は条痕文系土器である。3は表裏に条痕文が施され、表面には3点の刺突痕がみられる。胎土には白色砂粒を含み、繊維の混入はない可能性がある。4は表裏に3より粗い条痕文が施され、胎土にはやや繊維を含む。

第24図13は打製石斧である。肉厚の形状であるが、刃部は片面からの調整により鋭利に仕上げられている。

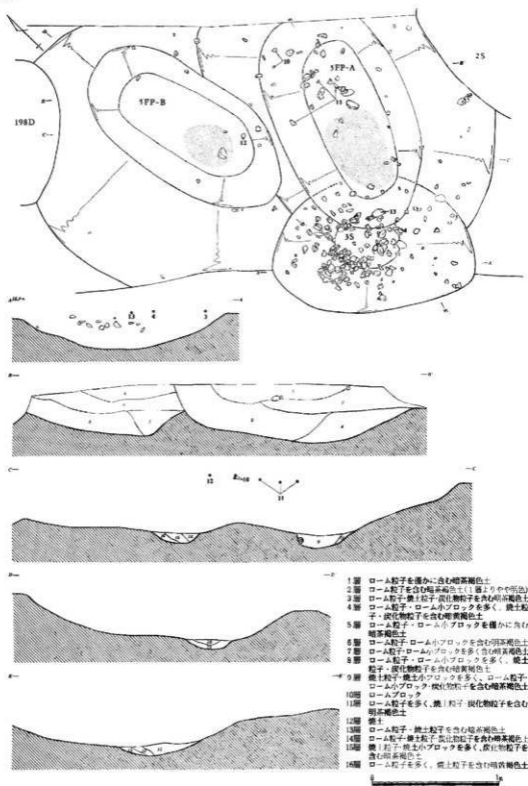
(2) 炉穴

4号炉穴 (第21図)

[構造] 9号溝跡に切られる。(平面形) 不整形。(規模) $3.40 \times 2.34\text{m}$ (長軸方位) $N-44^\circ-E$ 。



第21図 4号炉穴 (1/60)



第22図 5号炉穴・3号集石 (1/30)

(深さ)40~62cmを測る。炉床は20cm程焼けて赤化している。(覆土)12層に分類される。炉床部分は8~12層の4層に分かれる。

[遺物] 縄文時代の土器片と石器が出土した。

[時期] 縄文時代早期後葉。

4号炉穴出土遺物(第23図5~9、第24図14・15)

第23図5は早期前葉の擦糸文系土器である。器厚は比較的厚く、胎土には砂粒を含む。

6~9は早期後葉の条痕文系土器である。6の表面には僅かに条痕文が観察される。色調は明橙色を呈し、胎土には繊維を含む。7~9は粗い条痕文が施され、色調は暗茶褐色を呈する。

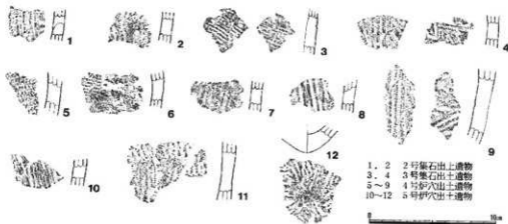
第24図14は敲石と思われる。上部は欠損しているが、下面を敲打面としている。側面についても丁寧に調整が施され、丸く仕上げられている。

15は用途不明の石器。片面には使用剥離痕が残る。石質は砂岩である。

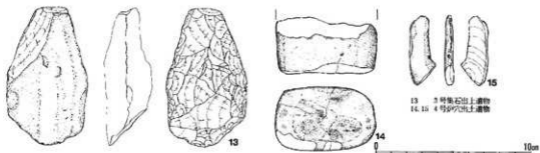
5号炉穴(第22図)

[構造] 2基の炉穴が重複している。新旧関係の新しいものをAとし、古いものをBとする。

〈5号炉穴A〉2号・3号集石に切られ、5号炉穴Bを切る。(平面形)楕円形。(長軸方位)N-



第23図 集石・炉穴出土遺物1(1/3)



第24図 集石・炉穴出土遺物2(2/5)

23°-E。(深さ)42cm前後を測る。炉床は厚さ10cm程が焼けて赤化している。(覆土)4層に分層される。炉床部分は9~13層の5層に分かれる。

〔5号炉穴B〕2号・3号集石、5号炉穴A、198号土坑に切られる。(平面形)楕円形。(長軸方位)N-10°-W。(深さ)40cm前後を測る。炉床は厚さ7cm程が焼けて赤化している。(覆土)4層に分層される。炉床部分は14~16層の3層に分かれる。

〔遺物〕覆土中から縄文時代の土器小片が出土した。

〔時期〕縄文時代早期後集。

5号炉穴出土遺物(第23図10~12)

10~12は早期後葉の条痕文系土器である。12は尖底の底部破片である。いずれも色調は外面が橙色、内面が黒褐色を呈し、繊維を僅かに含む。

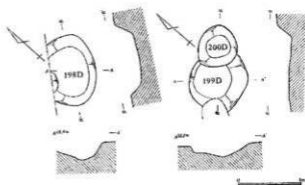
(3) 土坑

198号土坑(第25図)

〔構造〕5号炉穴Bを切る。一部は調査区域外にあり不明。(平面形)楕円形か。(規模)不明×1.13m。(深さ)26cm。(覆土)上層はローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土、下層はローム粒子を含む明茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕覆土の状態から縄文時代のもと考えられる。



第25図 土坑(1/60)

199号土坑(第25図)

〔構造〕200号土坑と重複する。(平面形)楕円形。(規模)1.0×0.93m。(長軸方位)N-2°-W。(深さ)20cm前後を測る。(覆土)ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕覆土の状態から縄文時代のもと考えられる。

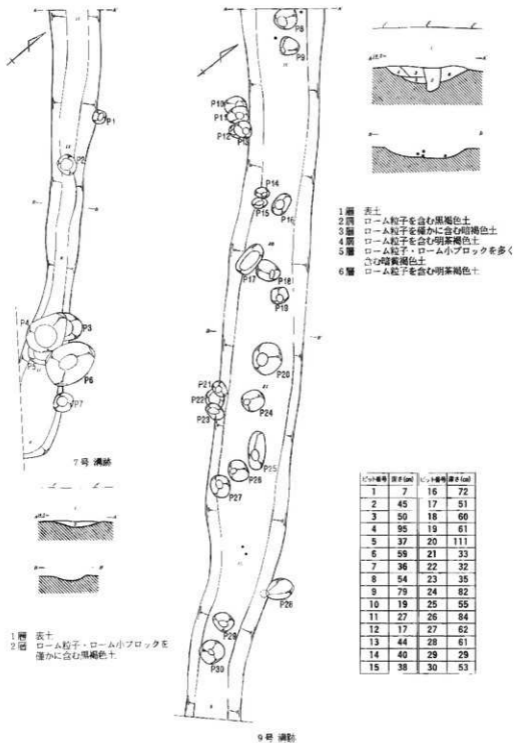
200号土坑(第25図)

〔構造〕199号土坑と重複する。(平面形)楕円形。(規模)0.7×0.65m。(深さ)24cm前後を測る。(覆土)ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕覆土の状態から縄文時代のもと考えられる。

(4) 溝跡



第26図 7・9号溝跡 (1/60)

7号溝跡（第26図）

〔構造〕 N-16°-Wの走行角度をもつ。確認できる範囲での長さは7.14m、上幅42~80cm、下幅20~58cm、深さ8~11cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が僅かに出土した。

〔時期〕 平安時代（9世紀以降）。

7号溝跡出土遺物（図版6-5）

- 1・2は須恵器環形土器の小片である。1は青灰色を呈する。やや口唇部が肥厚し、外反しない。2は暗黄褐色を呈し、小石を含む。
- 3~6は土師器壺形土器の小片である。5・6はヘラ削りにより薄く仕上げられている。

8号溝跡（第27図）

〔構造〕 N-46°-Wの走行角度をもつ。確認できる範囲での長さは5.45m、上幅143~180cm、下幅36~68cm、深さ43~54cmを測る。溝底は16層の黄褐色土により貼られており平坦になっている。（覆土）19層に分層される。

〔遺物〕 覆土中から土器小片が出土した。

〔時期〕 平安時代（9世紀以降）。

〔所見〕 出土遺物は21・22が7世紀から8世紀前半に、その他の大部分は9世紀以降に比定できるものと考えられる。

8号溝跡出土遺物（図版6-6・7）

1~6は須恵器環形土器である。1は体部小片、5~6は底部小片である。2は底部周辺ヘラ削り調整が施され、胎土には白色針状物質を含む。3~6は回転糸切り未調整である。6は付高台が落している。

7~20は須恵器壺・壺形土器である。7~11は頸部破片、12~18は胴部破片、19・20は底部破片である。12~16の外面には平行叩き目が残る。

21は土師器環形土器である。口唇部内面には沈線がまわり、内外面赤彩が施される。底部にはヘラ削り痕が残る。

22は土師器壺形土器である。長壺の口縁部破片である。内外面横ナデが施される。

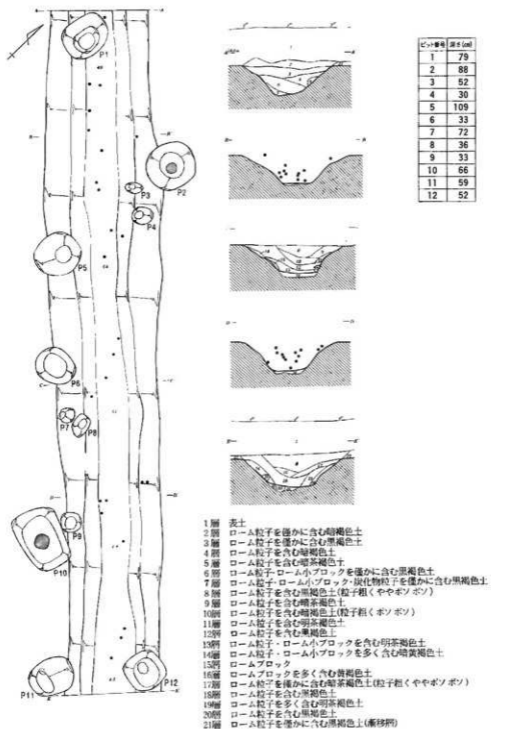
9号溝跡（第28図）

〔構造〕 N-45°-Wの走行角度をもつ。確認出来る範囲での長さは5.65m、上幅78~129cm、下幅50~97cm、深さ9~21cmを測る。溝底はほぼ平坦で、断面形は浅い皿状を呈する。（覆土）4層に分層される。

〔遺物〕 覆土中から土器の小破片が僅かに出土した。

〔時期〕 平安時代（9世紀以降）。

9号溝跡出土遺物（図版6-8）



第27図 8号溝跡 (1/60)

1・2は須恵器環形土器の底部破片である。2点とも底部に回転糸切り痕を残しており、1は胎土に白色針状物質を含み、色調は淡灰褐色を呈する。2は胎土に白色砂粒を含み、色調は青灰色を呈する。

3・4は須恵器甕形土器である。3は口縁部破片で、胎土には白色砂粒と白色針状物質（微量）を含む。内外面横方向のナデ調整が施される。4は胴部破片と思われる。表面には僅かに平行叩き目が残る。胎土には白色砂粒を含む。

[引用・参考文献]

- 佐々木保俊 1990「田子山遺跡第1地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集
 1992「田子山遺跡第6・7地点の調査」『志木市遺跡群Ⅳ』志木市の文化財第17集
 1992「田子山遺跡第4・5地点の調査」『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集
 1996「田子山遺跡第10地点の調査」志木市の文化財第24集
- 尾形則敏 1995「田子山遺跡第29地点の調査」『志木市遺跡群Ⅵ』志木市の文化財第21集
 1996「補説 田子山遺跡第31地点の発掘調査概要」『田子山富士』志木市の文化財第22集
 1996「田子山遺跡第13地点の調査」志木市の文化財第24集
- 尾形則敏・深井恵子 1996「田子山遺跡第32地点の調査」『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財第23集
 1996「田子山遺跡第37地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第23集

第5章 田子山遺跡第41・42地点の調査

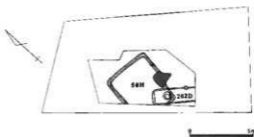
第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

第4章 田子山遺跡第39地点の調査(25ページ)を参照

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成7年8月22日に実施した。調査区の長軸中央に1本のトレンチを設定し、バックホーを使用して表土を剥ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、住居跡と思われる遺構を1基確認した。その後、遺構のプランを確認しながら、周囲の表土剥ぎを行い、残土は遺構の分布しない調査区内で処理することにした。



第28図 遺構分布図(1/300)

人員導入による発掘調査は8月28日から開始した。まず、調査区区域内の整地と細部の遺構確認作業を行い、同日には遺構の精査に入る。遺構は平安時代の住居跡(50H)であることが判明し、さらにこの住居跡を切る平安時代の土坑(202D)が1基確認された。

30日には、202D・50Hの写真撮影を行い、実測を開始し、9月1日には、50Hのカマドの実測及び掘り方の精査を開始した。4日には、すべての実測・写真撮影が終了、5日には埋め戻しが完了した。

第2節 検出された遺構と遺物

50号住居跡(第29・30図)

〔住居構造〕南西コーナーは調査区域外にあるものと思われる。(平面形)長方形。(規模)4.56×3.90m。(長軸方位)N-10°-E。(壁高)49~40cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)カマド部分とその南側の一部を除き、確認できる範囲では全周する。上幅20~30cm・下幅8~10cm・深さ8~15cmを測る。(床面)ほぼ全面に硬化した床面が確認された。(カマド)東壁中央よりやや南に位置し、方位はN-69°-W。長さ143cm・幅82cm・壁への掘り込み86cmを測る。大部分が崩落しているため詳細は不明であるが、天井部を被覆していたと思われる灰白色粘土がやや広い範囲で検出されている。煙道部は45°程の勾配で、途中段をもち緩やかに立ち上がっている。(柱穴)検出されなかった。(貯蔵穴)カマド右側のコーナーに位置し、平面形は隅丸方形を呈し、規模は58×50cm・深さ16cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを多く、炭化材・焼土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。(覆土)2層は漸移層と思われる。本住居跡の覆土は、3層から11層に相当

し、堆積状態はレンズ状を呈している。

〔時期〕 平安時代。

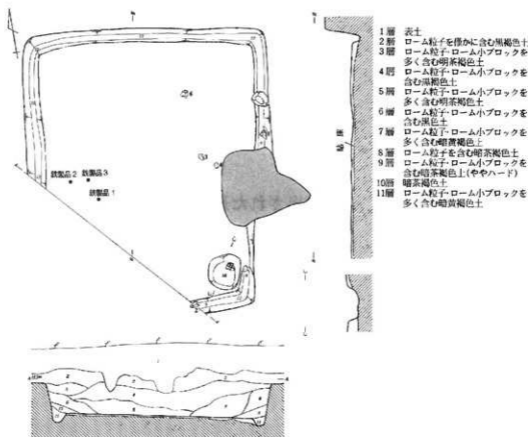
50号住居跡出土遺物 (第32・33図)

須恵器坏形土器 (第32図 1~4)

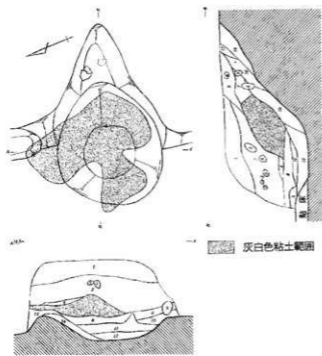
1は器高3.4cm、口径12.8cm、底径5.3cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は淡橙色を基調とする。内面底部には「手」という字が墨書されている。胎土には小石(大きいもので5mm)を含む。カマド左横の壁溝内からの出土で、口縁部の一部を欠損する。

2は器高3.5cm、口径12.5cm、底径5.5cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は淡橙色を基調とする。外面底部には「手」という字が墨書されている。胎土には小石(大きいもので4mm)を含む。貯蔵穴右横の壁溝内からの出土で、口縁部の一部を欠損する。

3は器高3.6cm、口径12.8cm、底径5.8cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗灰褐色を基調とする。胎土には小石を含む。カマド前面の床面上約20cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/2程である。



第29図 50号住居跡 (1/60)



- 1層 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを含む暗茶褐色土
- 2層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、粘土粒子・粘土小ブロックを含む暗茶褐色土
- 3層 粘土ブロック
- 4層 粘土粒子・粘土小ブロックを多く、焼土粒子を含む暗灰褐色土
- 5層 焼土粒子・焼土小ブロックを多く、粘土粒子・粘土小ブロックを含む灰褐色土
- 6層 焼土ブロック
- 7層 粘土粒子・粘土ブロックを多く、焼土粒子・焼土小ブロックを含む灰白色土
- 8層 粘土粒子・粘土小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロックを含む黒褐色土
- 9層 ロームブロック
- 10層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子を含む暗黄褐色土
- 11層 焼土粒子・焼土小ブロックを多く、粘土粒子・粘土小ブロックを含む暗赤褐色土
- 12層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子を含む黒褐色土
- 13層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土
- 14層 焼土粒子・焼土ブロックを多く、粘土ブロックを含む暗赤褐色土
- 15層 粘土粒子・粘土小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む灰褐色土
- 16層 焼土粒子・焼土ブロックを多く、炭化物粒子を含む暗茶褐色土
- 17層 ローム粒子を多く、焼土粒子を含む黄褐色土
- 18層 ローム粒子・焼土粒子を強かに含む暗茶褐色土

第30図 50号住居跡カマド (1/30)

4は現器高1.7cm、底径6.3cm。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸切り痕が残る。色調は暗灰褐色を基調とする。胎土には小石を含む。カマド前面の床面上からの出土で、底部のみの遺存である。

土師器壘形土器 (第32図5・6)

5は口縁部が「コ」字状を呈する。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は横方向のヘラ削りが施される。色調は暗赤褐色を呈する。覆土中の出土で、口縁部から胴部上半を1/2程度遺存する。

6は台付甕の胴部下半から脚台部にかけての破片である。脚台部は「ハ」字状に開く。胴部外面は斜方向のヘラ削り、内面はヘラナデ。脚台部は内外面横ナデ。色調は暗赤褐色を呈する。住居北東コーナー近くの床面上の出土である。

鉄製品 (第33図1～4)

1は現存長7.0cm、幅5.0cm。断面形は長方形で0.7cmの厚さがある。袋状を呈していることから、鉄斧などの柄を付けるための茎部と思われる。西壁近くの床面上約28cm厚いた覆土中からの出土である。

2は現存長9.2cm、幅は基部で3.0cm、先端部で1.0cm、厚さ0.6cm。先端部は尖っており、約40°の角度で曲がっている。基部は先端部とは逆方向に折り返されている。鍔(やりがんな)か。

3は鉄鍔の蓋被部と思われる。現存長10.6cm。断面は中央付近で幅0.9cm、厚さ0.5cmの長方形を

呈する。西壁近くの床面上約40cm浮いた覆土中からの出土である。

4は鉄鍔（雁股鍔）の鍔身部と思われる。現存長3.1cm。先端部は二股に分かれ尖っている。覆土中からの出土である。

銅製品（第33図5）

現存長7.5cm。頭部はマッチ棒状を呈し、頭部・茎部ともに加飾はみられない。形態的には小型未開敷蓮華に類似する。覆土中からの出土である。

202号土坑（第31図）

〔構造〕南東部分は調査区域外である。50号住居跡を切る。（平面形）長方形。（規模）不明×1.18m。（長軸方位）N-47°-W。（深さ）25~34cm。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（覆土）9層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

〔遺物〕覆土中から、土器小片が出土した。

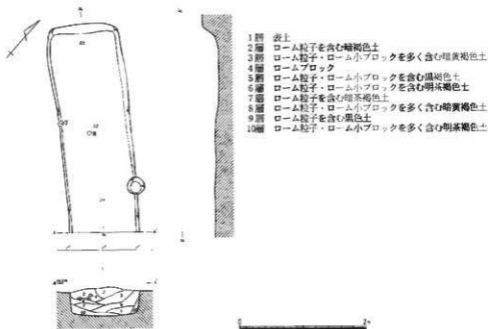
〔時期〕平安時代。

202号土坑出土遺物（第32図）

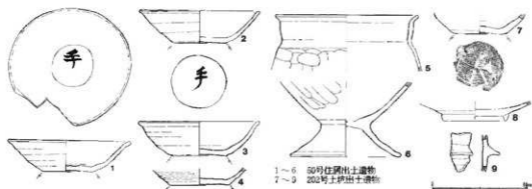
須恵器坏形土器（7）

現器高2.2cm、底径5.0cm。底部には回転糸切り痕が残り、その上からは棒状工具により「×」印が刻まれている。色調は淡橙色を呈する。胎土には小石（大きいもので5mm）を含む。坑底上約30cm浮いた覆土中からの出土である。

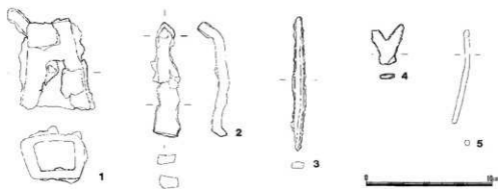
灰釉陶器（8）



第31図 202号土坑 (1/60)



第32図 50号住居跡、202号土坑出土遺物 (1/4)



第33図 50号住居跡出土金属製品 (1/3)

高台付の である。現器高2.1cm、底径6.6cm。色調は灰白色を呈し、内面には灰釉が施される。高台は付高台である。底部には回転糸切り痕を残す。坑底上約20cm浮いた覆土中からの出土である。土師器羽釜(9)

利釜の鈎の部分であろう。鈎の高さ1.9cm。色調は暗赤褐色を基調とする。

第6章 中道遺跡第36地点の調査

第1節 遺跡の概要

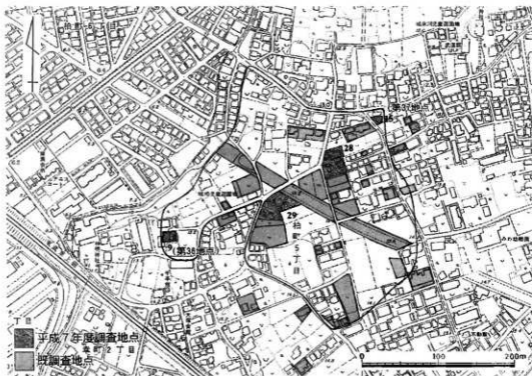
(1) 立地と環境

中道遺跡は、志木市柏町5丁目を中心とする遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1kmに位置している。遺跡は、柳瀬川の南東方向の台地上に立地し、標高はその北端で約13m、南端で約14mを測り、低地との比高差は約7mである。

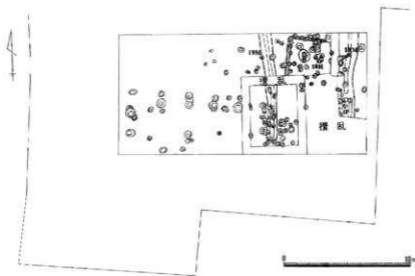
本遺跡の発掘調査は、昭和62(1987)年の都市計画道路富士見・大原線建設に伴う調査を契機に本格的に実施され、以後の調査により、旧石器時代、縄文時代中期、古墳時代中・後期、平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明してきた。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成7年5月31日に実施した。調査区の長軸方向に合わせ、2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し、表土を削ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、かなり攪乱による破壊は受けているものの住居跡と思われる遺構1基と数本のピットが確認された。そのため、6月2日にはバックホーとブルドーザーを使用し、調査区域全面の表土削ぎ作業を行い、同日にはその作



第24図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)



第35図 遺跡分布図 (1/300)

業を終了する。

人員導入による発掘調査は、5日から実施した。午前中、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行い、午後からは住居跡と思われる遺構の精査を開始する。遺構は、19号溝跡(19M)や攪乱により大部分が破壊されているが、出土土器から古墳時代前期の住居跡(18H)であると判明した。

8日には、18H・18Mの写真撮影を行い、その後実測を開始した。また、貯蔵穴及び柱穴からは土器・砥石がまとめて出土したため、遺物出土状態の写真撮影を行い、実測を開始した。

12日には、18Hの実測が終了、19Mの精査を開始する。

20日、19Mの実測が終了、18Hの掘り方の精査を開始する。また、調査区西半部のビット群の精査を開始し、掘りを終了したものから順次実測を終了させることにした。

21日、18Hの掘り方の写真撮影・実測を終了し、午前中にすべての調査を完了した。

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

18号住居跡 (第36・37図)

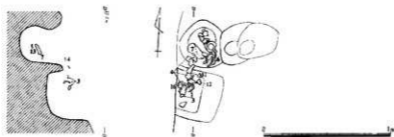
[住居構造] 18号溝跡と攪乱に破壊されているため、詳細は不明である。(壁高)比較的に遺存の良い西壁で18cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)確認できる範囲では全周する。上幅12~23cm・下幅6~13cm・深さ8~13cmを測る。(床面)北壁側に硬化した床面が確認された。(柱穴)主柱穴の可能性のあるもののみ、図版中に深さを記入した。その他は後世のビットである。(貯蔵穴)住居跡南東コーナーに位置するものと考えられる。平面形は長方形を呈し、規模は不明×39cm・深さ38cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土を基調とする。



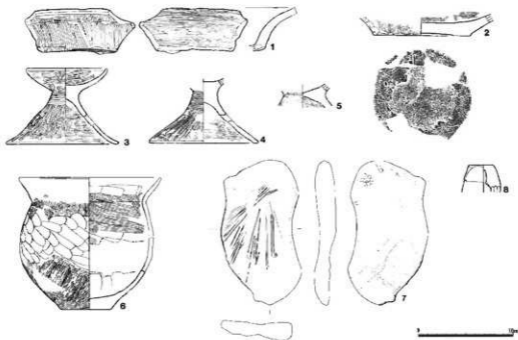
- | | | |
|-----|--------------------------|----------|
| 1層 | ローム粒子を含む暗褐色土 | |
| 2層 | ローム粒子を含む暗褐色土(1層よりやや暗い色) | |
| 3層 | ローム粒子・ローム小ブロックを稀かに含む黒褐色土 | } 18M 覆土 |
| 4層 | ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土 | |
| 5層 | ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土 | } 18H 覆土 |
| 6層 | ローム粒子を含む褐色土 | |
| 7層 | ローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土 | |
| 8層 | ロームブロック | |
| 9層 | ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土 | |
| 10層 | ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土 | |



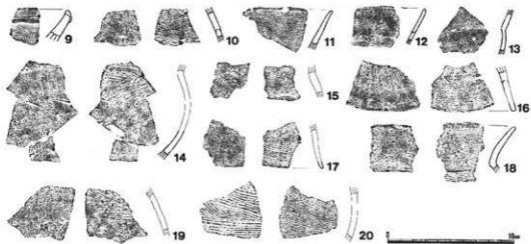
第36図 18号住居跡・18号溝跡 (1/60)



第37图 18号住居跡貯蔵穴 (1/30)



第38图 18号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第39图 18号住居跡出土遺物 2 (1/3)

(覆土) 5層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

[遺物] 貯蔵穴・柱穴から土器がまとめて出土した。

[時期] 古墳時代前期。

18号住居跡出土遺物 (第38・39図)

土師器壺形土器 (1・2・9・10)

1は口縁部破片。複合部は剥落したものと考えられ、口唇部は面取りが施される。内外面へラ磨き調整が施されるが、ハケ目痕を顕著に残す。覆土中の出土である。

2は底部破片。木葉痕あり。内外面ハケ目調整が施される。北西コーナー柱穴付近の床面上からの出土である。

9は折り返しをもつ口縁部小破片。へラ磨き調整は内面が横方向後縦方向、外面は横方向に施される。内外面赤彩。貼床中からの出土である。

10は胴部小破片。輪積み痕が1段観察される。内面はハケ目調整、外面はハケ目調整後へラ磨き調整が施される。内外面赤彩。貼床中からの出土である。

土師器器台形土器 (3・4)

3・4ともに脚部中央が貫通しないタイプのものである。3は現器高8.1cm、推定口径8.5cm、底径11.8cm。器受部は内湾気味に開く碗状を呈し、脚台部は「ハ」字状に大きく開く。口唇部は僅かに面取りが施される。脚台部の途中には3ヶ所の透孔が開けられている。器受部は内外面へラ磨き調整、脚台部は内面がハケ目調整、外面はハケ目調整後へラ磨き調整が施される。貯蔵穴内からの出土で、遺存度2/3程である。

4は脚部である。3に類似するが、全体に直線的である。脚台部は内面がハケ目調整、外面はハケ目調整後へラ磨き調整が施される。貯蔵穴内からの出土で、遺存度は脚台部を2/3程である。

土師器甕形土器 (5・6・18~20)

5は合付甕の脚部破片である。内外面ハケ目調整が施される。北西コーナー柱穴付近の床面上約12cm浮いた覆土中からの出土である。

6は器高14.1cm、口径14.9cm、底径5.2cm。頸部は「く」字状を呈し、口縁部はやや内湾気味に開く。口縁部内外面は軽い横ナデ、内面は頸部がハケ目調整、以下へラナデ、外面はハケ目調整が施されるが、胴部中位はへラナデが施される。色調は外面が黒色を呈し全体に煤けている。内面は暗褐色を呈する。貯蔵穴横の柱穴内からの出土で、遺存度は4/5程である。

18は「く」字状を呈する口縁部小破片。内外面ハケ目調整が施される。覆土中の出土である。

19は胴部小破片。内外面やや目の細かいハケ目調整が施される。覆土中の出土である。

20は胴部小破片。内外面やや目の粗いハケ目調整、内面はその後粗いへラ磨き調整が施される。覆土中の出土である。

土師器増形土器 (11~15)

11は口縁部小破片。内外面ハケ目調整後へラ磨き調整が施される。口縁部外面はその後軽い横ナデが施される。貯蔵穴内からの出土である。

12は口縁部小破片。外面には1段の輪積み痕がみられる。内外面へラ磨き調整が施されるが、輪

積り痕下端にはハケ目痕が残る。貯蔵穴内からの出土である。

13は頸部小破片。器面がやや摩耗しているが、内面はへう磨き調整、外面にハケ目痕が顕著に残る。貯蔵穴内からの出土である。

14は頸部から胴部下半にかけての破片。内外面ハケ目調整後へう磨き調整が施される。覆土中の出土である。

15は頸部小破片。内外面にハケ目痕が顕著に残る。貯蔵穴内からの出土である。

土器高坏形土器 (16・17)

16は脚台部の小破片。裾端部はやや平坦である。内外面ハケ目調整が施される。裾部外面はその後横ナデが施される。貯蔵穴内からの出土である。

17は脚台部の小破片。裾端部は細い。内外面ハケ目調整が施される。外面はその後縦方向のへう磨き調整が施される。覆土中からの出土である。

石製品 (7)

有溝砥石であろう。表面は中央部が窪んでいる。石質は泥砂岩か。

土製品 (8)

支脚の破片か。上面にあたる部分は平坦に作られている。内面は棒状工具による成形痕が残る。外面はへうナデによる調整が施される。貼床中からの出土である。

(2) 溝跡

18号溝跡 (第36図)

〔構造〕 ほぼ南北に走行する。西側が攪乱により破壊されているため、詳細は不明である。確認できる範囲での長さは6.4m、下幅30cm前後、深さ11~23cmを測る。溝底は凹凸があり、断面は西側が40°、東側が15°の角度で立ち上がる。(覆土) 5層に分層される。

〔時期〕 近世以降か。

18号溝跡出土遺物 (図版 8-5)

1は肥前系磁器皿の底部破片である。削り出し高台。内面に文様あり。

2は瀬戸の灰釉皿の口縁部小破片である。ロクロ回転は右回転。施釉は口縁部内外面。磁器は15世紀であろう。

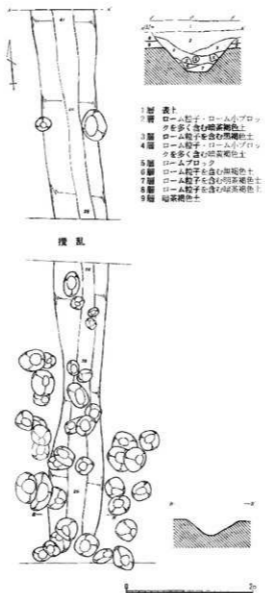
3は瀬戸の灰釉壺の肩部小破片であろう。内面には指押さえ痕が残る、その後ナデ調整が施される。磁器は14世紀~15世紀であろう。

4は美濃の灰釉皿の底部小破片である。器面全体に黒い油煙の付着痕がみられる。付高台。磁器は17世紀であろう。

5・6はほうろくである。5は口縁部小破片である。内外面ロクロナデ痕が残る。時期は近世以後である。6は底部小破片である。底部外面はナデ調整が施される。時期は近世以後であろう。

19号溝跡 (第40図)

〔構造〕 ほぼ南北に走行する。確認できる範囲での長さは8.82m、上幅56×100cm・下幅19~34cm、



深さ24~46cmを測る。溝底はほぼ平坦で、断面は西側が45°、東側が50°の角度で立ち上がる。

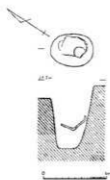
(覆土) 6層に分層される。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土の観察から、近世以降のものであろう。

(3) ビット

1号ビット (第41図)



第41図 1号ピット(1/30)



第42図 1号ピット出土遺物(1/4)

〔構造〕ここでは一応ピットとして取り扱った。(平面形)楕円形。(規模)34×26cm。(深さ)50cm。

〔遺物〕深さ30cm程の位置で常滑甕が1点出土した。

〔時期〕近世。

1号ピット出土遺物(第42図)

常滑甕の胴部下半から底部にかけての破片である。現器高10.3cm、底径14.1cmを測る。胎土には小石・砂粒を含む。内面には指押え痕が残る。内外面にはナデ調整が施される。時期は近世である。

(4) 遺構外出土遺物(図版8-7、第3表)

出土遺物は、陶・磁器18点、瓦器2点である。時期は中世～近世以降である。

〔引用・参考文献〕

- 佐々木保俊・尾形則敏 1988『中道遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第5集
 佐々木保俊 1996『中道遺跡第21地点の調査』志木市の文化財第24集
 尾形則敏 1989『中道遺跡第6地点の調査』『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集
 1992『中道遺跡第12地点・中道遺跡第13地点の調査』『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集
 尾形則敏・深井志子 1996『中道遺跡第33地点の調査』『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財第23集
 野沢 均・尾形則敏 1996『中道遺跡第26地点の調査』志木市の文化財第24集

番号	遺物	法量 (cm)・調整及び特徴
図版8-7-1	陶器	常滑焼の頸部から胴部上半にかけての破片である。内面には輪積み痕と指押えの指紋あり。胎土には砂粒を含む。内面は頸部が横ナデ、以下ナデ調整が施される。時期は14世紀であろう。
2	陶器	常滑焼の胴部上半の破片である。内面には輪積み痕と指押え痕が残る。胎土には砂粒を含む。内面は横ナデが施される。時期は14世紀であろう。
3	陶器	常滑焼の胴部破片である。胎土には砂粒を含む。内面は横方向のナデ調整が施される。時期は14世紀であろう。
4	陶器	備前(堺か)の播鉢であろう。胎土には砂粒を含む。外面ナデ調整が施される。時期は18世紀以後。
5	陶器	美濃の鉄軸鉢の口縁部小破片である。おそらく、こね鉢の類であろう。時期は17世紀後半以後。
6	陶器	信楽系の土瓶の底部小破片であろう。蓋子あるいは笠間か。時期は19世紀以後であろう。
7	陶器	小破片であるため、産地・時期については不明である。
8	陶器	瀬戸の灰釉皿の底部小破片であろう。胎土には砂粒を含む。時期は15世紀であろう。
9	陶器	京焼系の碗の口縁部小破片である。胎土の色調は淡黄色を呈する。時期は18～19世紀であろう。
10	陶器	京焼系の碗の底部小破片である。高台は削り出し高台である。胎土は緻密で色調は白色を呈する。時期は18世紀であろう。
11	陶器	美濃のあめ釉徳利の小破片であろう。内面はロクロナデが施される。時期は18世紀後半であろう。
12	陶器	志戸呂の天目茶碗の底部破片である。現器高3.5。底径4.5。高台は削り出し高台である。胎土には砂粒を含む。色調は茶褐色を呈する。時期は16世紀であろう。
13	陶器	瀬戸の灰釉香炉の小破片であろう。時期は15世紀か。
14	磁器	肥前系の飯茶碗の小破片である。草花文あり。時期は18世紀後半～19世紀であろう。
15	磁器	肥前系の湯飲碗の小破片である。草花文あり。時期は18世紀後半であろう。
16	磁器	磁製の菊花瓶(小皿)の口縁部小破片である。小破片のため、産地については不明である。時期は18世紀以後であろう。
17	磁器	磁製の筒碗の口縁部小破片である。小破片であるため、産地については不明である。時期は19世紀以後であろう。
18	磁器	肥前系の碗の底部破片である。現器高2.4。底径4.9。時期は18世紀後半～19世紀であろう。
19	瓦器	ほうろくである。器高4.8。推定口径36.6。桶底孔は口縁部に3ヶ、底部に1ヶの計4ヶ開けられている。そのうち口縁部の2ヶは銅線でくくられていた。時期は18世紀後半である。
20	瓦器	火鉢である。菊花文が押捺されている。小破片のため、詳細は不明である。

第3表 遺構外出土遺物観察表

第7章 中道遺跡第37地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

第6章 中道遺跡第36地点の調査(40ページ)を参照。

(2) 発掘調査の経過

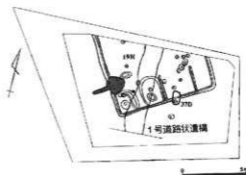
確認調査は、平成7年8月3日に実施した。調査区の長軸方向に合わせ、中央に1本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を削ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、住居跡と思われる遺構を1基確認した。その後、継続してその遺構のプラン確認を行ったところ、調査区域中央から北側にかけてのかなり広い範囲に分布していることが判明した。そのため、調査区域内に残土置場を確保することが困難であると判断し、7日、バックホーを使用し、表土剥ぎを開始、その残土をダンプに積載し、調査区域外に搬出した。

8日からは人員導入による発掘調査を実施した。まず、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行い、同日には遺構の精査を開始する。遺構は古墳時代中期の住居跡1軒(19H)の他に溝状に19Hの上を横切る道路状遺構1基(1道)と土坑1基(37D)が存在するものと判明した。

道路状遺構については、翌9日には実測を終了し、精査を終了した。

37Dの精査は14日から開始した。37Dからは人骨と古銭5枚が出土したことから、中世の土坑墓と考えられる。15日には、人骨・古銭の出土状態の写真撮影し、16日には実測を終了した。

19Hについては、22日にセクションA・Bの実測を終了し、24日には遺物出土状態の写真撮影を行った。30日には、遺物出土状態の実測を終了し、遺物の取り上げ作業を完了した。9月1日、遺構の写真撮影・実測を終了し、4日からはカマドの実測を開始し、6日には実測・写真撮影を完了した。埋め戻しは翌7日に行った。



第43図 遺構分布図(1/300)

第2節 検出された遺構と遺物

19号住居跡(第44~46図)

〔住居構造〕住居北側は調査区域外にあり、1号道路状遺構、37号土坑に切られる。(平面形)正方形か。(規模)不明×8.04m。(壁高)遺存の良い部分で45~49cmを測り、急斜に立ち上がる。

(壁溝) 確認できる範囲では全周する。上幅22～35cm・下幅6～12cm・深さ9～16cmを測る。(間仕切り溝) 南壁に接して2ヶ所で見出された。長さは約2m、深さは14～22cmを測る。(床面) 入口部に該当すると思われる南壁付設のテラス状の隆起部分から貯蔵穴・カマド付近にかけて、よく踏み固められており、さらに住居内にあたかも通路を思わせるように硬化した部分が見出された。(カマド) 西壁中央からやや南へ偏って位置する。主軸方位はN-55°-E。長さ2.6m・幅1.5mを測る。壁溝の一部を埋め戻した後に構築されており、煙道は壁を長さ140cm・上幅30cm・深さ10cm程で、細長く掘り込んでいる。袖部は14層の黒褐色土に灰白色粘土を貼り、構築しているものと思われる。(炉) カマド前面に平面形が楕円形で104×46cm、深さ10cmの焼けた部分が見出された。カマドの燃焼部の前でもあり、灰を掻き出した箇所とも考えられるが、一応ここでは炉として理解した。(柱穴) 支柱穴は4本と思われるが、確認できたのは3本で、深さは61～72cmを測る。(貯蔵穴) カマド左横の南西コーナーに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、規模は72×70cm、深さ56cmを測る。覆土は上層がローム粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土、中層はローム粒子を含む明茶褐色土、下層はローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。北側には高さ4cm程の「L」字状の凸堤が巡っている。(覆土) 20層に分解される。

[遺物] カマド左横の貯蔵穴付近と住居南東コーナーから多く出土した。

[時期] 古墳時代中期。

19号住居跡出土遺物 (第47～50区)

土師器環形土器 (1～11・49・50)

1は器高が口径の1/2を上回り、底部は平底を呈する。胎土に砂粒を含む。口縁部内外面は軽く横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。全面赤彩。床面上約18cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/2程である。

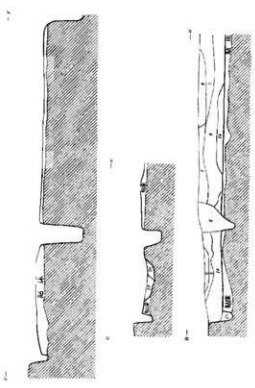
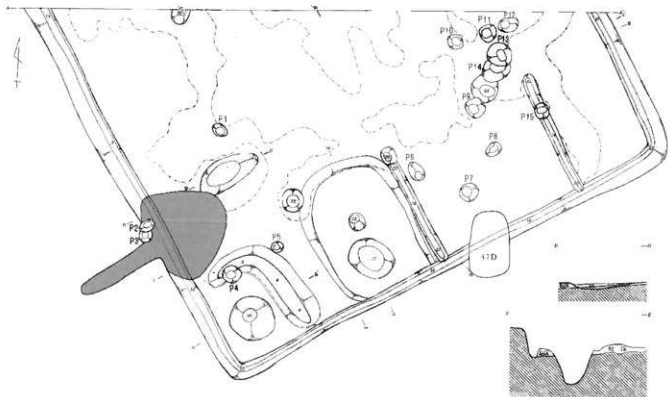
2は底部から体部にかけて球状を呈し、口縁部は複合口縁状に明瞭な輪軸痕を残す。胎土に砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はナデ、外面はヘラ削りが施される。全面赤彩。床面上約15cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は4/5程である。

3は口縁部は短く外反し、底部は平底を呈する。胎土に砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。全面赤彩。床面上からの出土で、遺存度は1/3程である。

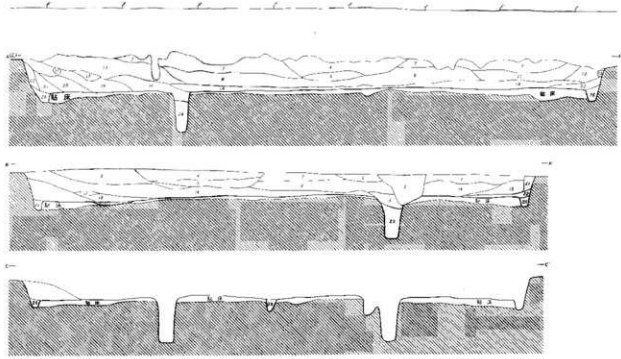
4は外反する口縁部をもつ。胎土に砂粒・茶褐色粒子を含む。器面は摩耗しているため、調整痕は不明瞭であるが、口縁部内外面は横ナデ、外面はヘラ削りが施される。全面赤彩。床面上からの出土で、遺存度は1/4程である。

5は底部がヘラ削りにより平底気味に作られている。胎土に小石・砂粒を含む。器面が摩耗しているため、調整痕は不明瞭であるが、口縁部内外面は横ナデ、以下内面は磨き調整、外面はヘラ削り後磨き調整が施される。全面赤彩。床面上からの出土で、遺存度は4/5以上である。

6は口縁部が大きく外反し、底部はヘラ削りにより平底気味に作られている。胎土に砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ後磨き調整、外面はヘラ削りが施される。全面赤彩。覆土中からの出土で、遺存度は2/3程である。



層番号	説明
1	71
2	52
3	28
4	70
5	60
6	62
7	75
8	56
9	88
10	59
11	62
12	78
13	86
14	69
15	69



- 1層 表土
- 2層 ローム粒子・焼土粒子を種かに含む褐色土(後述のピット)
- 3層 ローム粒子を含む暗茶褐色土
- 4層 ローム粒子を含む暗茶褐色土(ハート)
- 5層 ローム粒子・小石を含む暗茶褐色土(超ハート) 1号遺跡状溝
- 6層 ローム粒子を含む暗茶褐色土
- 7層 ローム粒子を含む暗茶褐色土
- 8層 ローム粒子を種かに含む黒色土
- 9層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土
- 10層 ローム粒子を含む暗茶褐色土
- 11層 ローム粒子を種かに含む黒褐色土
- 12層 ローム粒子を含む暗茶褐色土
- 13層 ロームアロウ
- 14層 ローム粒子を多く、炭化物粒子を種かに含む明茶褐色土
- 15層 ローム粒子を種かに含む黒褐色土
- 16層 ローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子を種かに含む暗茶褐色土
- 17層 ローム粒子・ロームブロックを多く含む暗茶褐色土
- 18層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土
- 19層 ローム粒子を含む暗茶褐色土
- 20層 ローム粒子を多く含む黒褐色土
- 21層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土
- 22層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土
- 23層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土
- 24層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土
- 25層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土
- 26層 焼土粒子・焼土小ブロックを含む黒褐色土
- 27層 粘土粒子・粘土小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土
- 28層 ロームブロック・粘土小ブロックを多く、焼土粒子を含む暗茶褐色土

7は口縁部が外反し、底部は丸底を呈する。胎土に砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後軽い磨き調整が施される。全面赤彩。床面上約12cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/2程である。

8は口縁部が外反する。胎土に砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はナデ、外面はヘラ削りが施される。また、外面には縦・斜めに深く抉られた痕が数本観察できる。全面赤彩。床面上からの出土で、遺存度は1/4程である。

9は頸部に明瞭な段をもち、口縁部は直立する。底部はやや窪んでいる。須恵器環蓋の模倣環であろう。胎土に小石・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はナデ、外面はヘラ削り。全面赤彩。床面上約28cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は2/3程である。

10は底部のみ残存する。胎土に砂粒を含む。内面はヘラナデ後数本の細長い磨文が施され、外面はヘラ削り後軽いナデ調整が施される。全面赤彩。床面上からの出土である。

11は頸部が「く」字状を呈する。鉢である可能性もある。胎土に砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は横方向のヘラ磨き調整が施される。口縁部内面および外面は赤彩。床面上からの出土で、頸部から体部下半にかけて1/4程遺存する。

土師器鉢形土器 (12)

底部から体部にかけては半球状を呈し、口縁部は短く外反する。胎土に砂粒を含む。外面は剥落しており、調整痕は不明瞭であるが、口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデが施される。床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて1/3程遺存する。

土師器高坏形土器 (13~29)

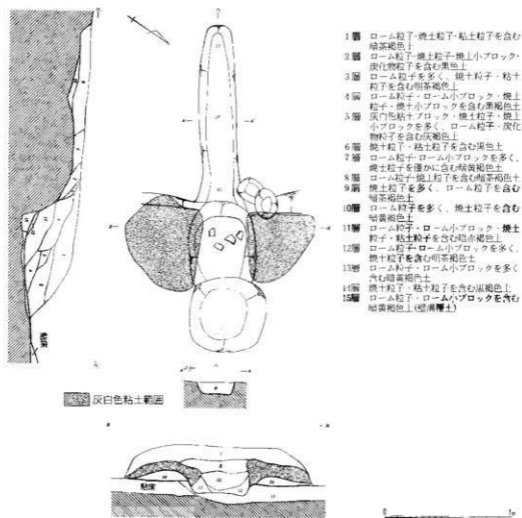
13は坏部下端に段をもち、口縁部が大きく外反する大型のものである。胎土に小石・砂粒を含む。全体にナデ調整が施されるが、坏部内面底部はヘラ磨き調整が施される。全面赤彩。床面上約9~20cm浮いた覆土中からの出土で、坏部を1/2程遺存する。

14は13に相似た器形の土器であるが、やや小ぶりである。胎土に小石・砂粒を含む。坏部は口縁部が内外面横ナデ、以下内面はヘラ磨き、外面はヘラナデか。脚台部は内面が棒状工具による成形が施され、外面は縦方向のヘラ磨き調整。脚台部内面を除き全面赤彩。床面上からの出土で、脚台部の裾部を欠損する。

15~20は相似た器形の上器である。15は坏部下端に段をもち、口縁部が大きく開くが、やや内湾気味のものである。胎土に小石・砂粒・茶褐色粒子を含む。坏部は全体に横ナデが施されるが、底部内面を中心にヘラ磨き調整が施される。脚台部は外面が縦方向のヘラ磨き調整。脚台部内面を除き全面赤彩。ほぼ床面上からの出土で、口縁部から脚台部を2/3程遺存する。

16は15の上器より口縁部が大きく内湾する。胎土に小石・砂粒を含む。全体に横ナデが施されるが、内外面底部はヘラ磨き調整が施される。内面にはハケ目痕がみられる。全面赤彩。床面上からの出土で、坏部を2/3程遺存する。

17は16の土器よりやや深身である。胎土に砂粒を含む。全体に横ナデが施されるが、外面の段直上は縦方向のヘラナデ（先端がさきら状）、底部はヘラ磨き調整が施される。全面赤彩。床面上からの出土で、坏部を4/5程遺存する。



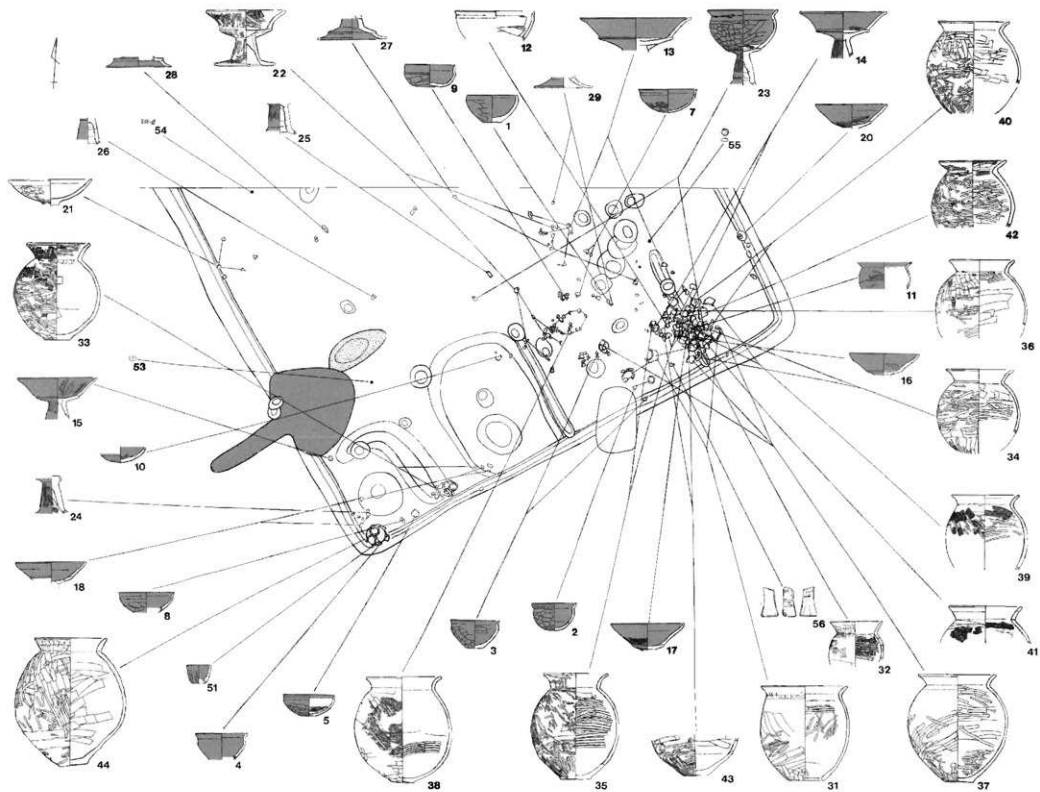
第45図 19号住居跡カマド (1/30)

18は16の器形に近似する。胎土に砂粒を含む。内面は剥落が著しく調整痕は不明。外面は口縁部横ナデ、以下ナデ調整が施されるが、僅かにへら削り痕が残る。全面赤彩。床面上からの出土で、坏部を2/3程度遺存する。

19は15の器形に近似する。胎土に砂粒を含む。内面はへらナデ後斜方向のへら磨き調整、外面は横ナデ後へら磨き調整が施される。全面赤彩。覆上中からの出土で、坏部の口縁部から体部下半にかけてを1/2程度遺存する。

20は15の器形に近似する。胎土に小石・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへら磨き調整が施される。全面赤彩。床面上約9cm浮いた覆土中からの出土で、坏部のみの遺存でほぼ完形である。

21は坏部下端に段をもたず、全体に浅い皿状を呈する。胎土に砂粒を含む。口縁部内外面は横ナ



第46图 19号伴冢陪葬物出土状态(遗物 1/60, 遗物 1/8)

デ、以下内面はヘラナデ、外面は体部がヘラ削り。脚柱部との境界は縦方向のナデ調整が施される。床面上からの出土で、口縁部から脚台部にかけてを1/2程遺存する。

22は坏部は口縁部が大きく外反し、底部内面は平坦である。脚台部は直線的に開く脚柱部と大きく屈曲して外反する裾部をもつ。胎土に砂粒を含む。色調は明褐色を呈する。坏部は内外面ハケ目調整後ヘラ磨き調整、脚台部は内面がヘラナデ、外面はヘラ磨き調整が施される。床面上約4~20cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は4/5程である。

23は坏部下端に段をもち、体部は碗状に深く、口縁部は外反する。脚台部は細身で長い。胎土に小石・砂粒を含む。坏部は内面ヘラナデ、外面は口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ナデ、頸部にはハケ目痕が残る。脚台部は内面に輪積み痕を残し、外面はハケ目調整後ヘラ磨き調整が施される。坏部の底部内面と脚台部内面を除き赤彩。坏部は床面上から、脚台部は床面上約20cm浮いた覆土中からの出土で、口縁部から脚台部にかけて2/3程遺存する。

24~29は脚台部だけの遺存である。24~26・29は長脚のもの、27・28は有段のものである。

24は胎土に砂粒を含む。坏部の底部内面がヘラ磨き、脚台部は内面に棒状工具による成形痕が残る、外面はヘラ磨き調整が施される。脚台部内面を除き赤彩。床面上からの出土である。

25は胎土に砂粒を含む。脚柱部は内面に輪積み痕を残し、外面は縦方向のヘラナデ、裾部は内外面は横ナデが施される。外面赤彩。床面上からの出土である。

26は胎土に小石・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面は縦方向のヘラ磨き調整が施される。外面赤彩。ほぼ床面上からの出土である。

27は裾部の途中に段をもち、裾部は大きく外反する。胎土に小石・砂粒を含む。内外面横ナデが施される。内外面赤彩。床面上約5~15cm浮いた覆土中からの出土である。

28は胎土に小石・砂粒を含む。内外面横ナデが施される。内外面赤彩。床面上約7cm浮いた覆土中からの出土である。

29は裾部の途中に段をもち、裾部は大きく外反する。胎土に小石・砂粒を含む。内外面横ナデが施される。外面赤彩。床面上約10cm浮いた覆土中からの出土である。

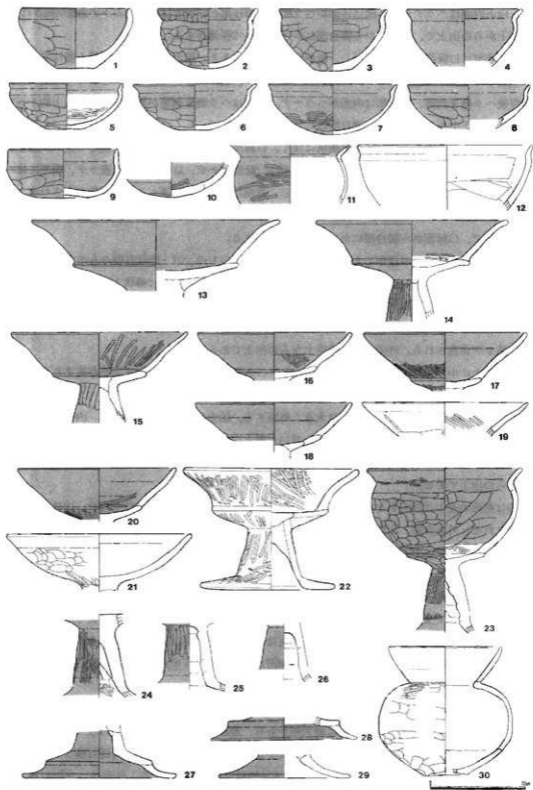
49・50は坏（黒色土器）の底部小破片で、同一個体と考えられる。内面ヘラナデ後放射状に暗文が施される。外面はヘラ削り後磨き調整が施される。覆土中からの出土である。

土師器埴形土器 (30)

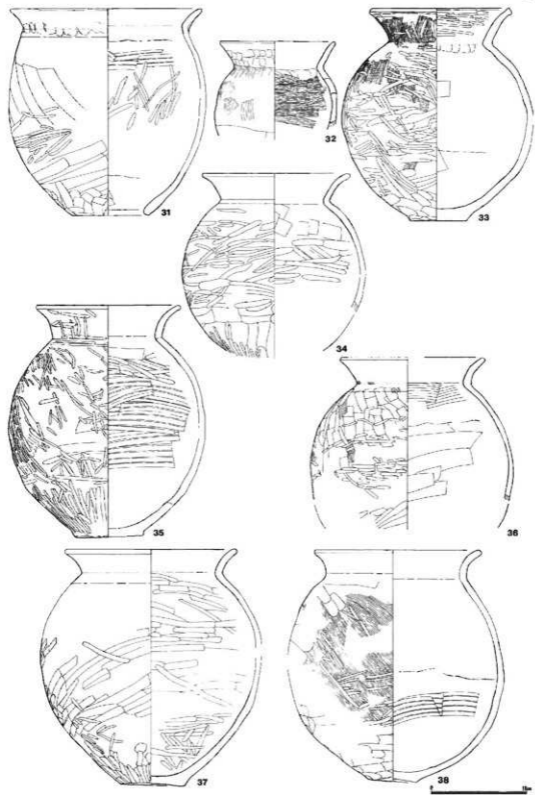
胴部はソロバン玉状を呈し、口縁部は大きく内湾気味に開く。底部は碁笥底である。胎土に砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で遺存度は1/3程である。なお、実測図は胴部上半と下半が接合しなかったため、合成して作成した。

土師器甕形土器 (31)

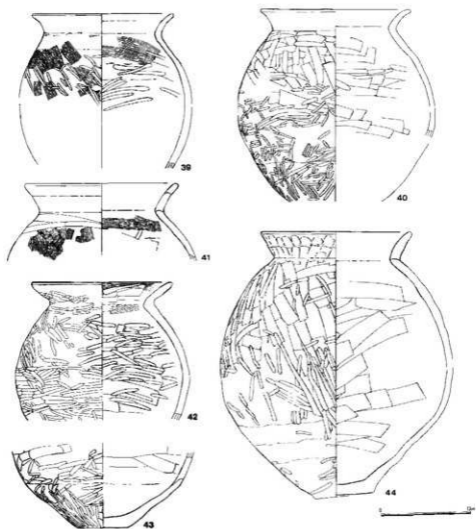
筒抜け式のものである。胴部中位に最大径をもち、頸部で屈曲し、口縁部は外反する。外面口縁部直下には薄く粘土がかけられている。胎土に小石・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ（先端がやややささら状）、胴部下半は細長い磨きが施される。外面はヘラ削り後ヘラナデ・磨き調整が施される。床面上からの出土でほぼ完形である。



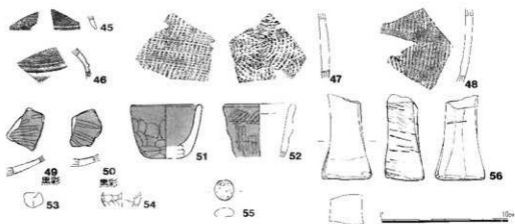
第47图 19号住居跡出土遺物1 (1/4)



第48図 19号住居跡出土遺物2 (1/4)



第49圖 19号住居跡出土遺物3 (1/4)



第50圖 19号住居跡出土遺物4 (1/3)

土器変形土器 (32~44)

32は小型甕であろうか。胴部中位に最大径をもち、頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。胎土に小石・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はナデ(細かい筋。指か布によるものか)、外面はナデ調整が施されるが、僅かにハケ目痕が残る。床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて4/5程遺存する。

33は壺である可能性がある。球胴のもので、頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反する。口唇部は面取りが施される。胎土に小石・砂粒を含む。内面は口縁部が横ナデ後へラ磨き調整、以下へラナデ、外面は口縁部がハケ目調整、以下ハケ目調整後粗いへラ磨き調整が施されるが、胴部下半にはへラ削り痕が顕著に残る。貯蔵穴の凸堤直上からの出土で、遺存度は4/5程である。非常に堅緻な作りの土器である。

34は口唇部に面取りが施されない以外は33の器形に近似する。非常に堅緻な作りの土器である。胎土に小石・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はへラナデ後胴部中位を中心にへラ磨き調整、外面は全体にいていねいなナデ後へラ磨き調整が施されるが、胴部下半にはへラ削り痕が残る。床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて2/3程遺存する。

35は34の土器に近似し、非常に堅緻な作りの土器である。胎土に小石・砂粒を含む。内面は口縁部が横ナデ、以下粗いハケ目調整(先端がささら状のへラナデか)、外面は口縁部が横ナデ後へラ磨き調整、以下胴部上半から中位にかけてはいていねいなナデ後へラ磨き調整、下半はへラ磨き調整が施されるが、へラ削り痕が僅かに残る。床面上からの出土で、遺存度は4/5以上である。

36は33~35に比べ、やや口縁部が短めである。非常に堅緻な作りの土器である。胎土に小石・砂粒を含む。口縁部は内外面横ナデ、以下内面はへラナデ、外面は胴部上半から中位にかけていていねいな後へラナデ後ハケ目調整あるいはナデ、下半は粗いへラ磨き調整が施されるが、へラ削り痕が僅かに残る。床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて2/3程遺存する。

37は36に比べ、頸部のすばまりが弱く、やや太めの土器である。非常に堅緻な作りの土器である。胎土に小石・砂粒を含む。口縁部は内外面横ナデ、以下内面はへラナデされるが、胴部下半はへラ磨き調整が施される。外面は胴部上半から中位にかけていていねいなナデ、下半は粗いへラ磨き調整が施されるが、へラ削り痕が僅かに残る。床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて2/3程遺存する。

38は頸部のすばまりが弱く、「く」の字の口縁が削れている。胎土に砂粒を含む。口縁部は内外面横ナデ、以下内面はへラナデ、外面は胴部上半から中位にかけて斜位のハケ目調整後へラナデ・粗いへラ磨き調整、下半にはへラ削り痕が顕著に残る。床面上約8cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/2程である。

39は胴部の膨らみがやや弱い。胎土に小石・砂粒を含む。内面は口縁部が横ナデ、胴部上半は細かいハケ目調整、中位から下半にかけてはへラナデ後へラ磨き調整が施される。外面は口縁部から胴部上半かけて横ナデ、以下細かいハケ目調整後粗いへラ磨き調整が施される。床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて1/2程遺存する。

40は器形としては37に近似する。胎土に砂粒を含む。口縁部は内外面横ナデ、以下内面はへラナ

デ、外面は胴部上半から中位にかけてヘラナデ、下半は粗くヘラ磨き調整が施されるが、ヘラ削り痕が残る。床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて2/3程遺存する。

41は堅緻な作りではあるが、器厚が厚い分ややシャープさに欠ける。胎土に小石・砂粒を含む。内面は口縁部が横ナデ、胴部上半はハケ目調整、以下ヘラナデが施される。外面は口縁部横ナデ、以下ハケ目調整後ナデ調整が施される。床面上からの出土で、口縁部から胴部中位にかけて1/2程遺存する。

42は頸部の屈曲が強く、口縁部はやや受口状に大きく外傾する。胎土に小石（大きなものは直径1.5cm）・砂粒を含む。内面は口縁部がハケ目状工具による横ナデ後ヘラナデ、以下ヘラナデ後ヘラ磨き調整が施される。外面は口縁部横ナデ後ヘラ磨き、以下ヘラナデ後ヘラ磨き調整が施されるが胴部下半にはヘラ削り痕が僅かに残る。床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて2/3程遺存する。

43は胎土に小石・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整が施される。床面上からの出土で、胴部中位から底部にかけて2/3程遺存する。

44は他の甕形土器と比べ大型で、作りがやや粗雑なものである。胎土に小石・砂粒を含む。口縁部は内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラナデ（先端ささら状）後粗いヘラ磨き調整が施される。住居南西コーナーの床面上からの出土で、ほぼ完形である。

須恵器蓋形土器（45・46）

45は口縁部の小破片である。口縁部はやや外反し、口唇部内面には幅1mmの弱い沈線が回る。色調は灰褐色を呈する。胎土に白色砂粒を含む。覆土中からの出土である。

46は天井部から口縁部にかけての小破片である。天井部と口縁部の境に段をもち、全体に作りは良い。色調は濃灰褐色を呈する。覆土中の出土である。

須恵器甕形土器（47・48）

47・48は胴部の小破片で、覆土中からの出土である。

47は色調が内面灰褐色、外面黒色を呈する。胎土に白色砂粒を含む。外面は平行叩き後櫛状工具によるナデ調整が施され、内面には同心円文の当て道具痕が残る。

48の色調は濃灰褐色を呈する。胎土に白色砂粒を含む。内面はスリケン調整、外面は平行叩き後軽くナデ調整が施される。

ミニチュア土器（51～54）

51は器高4.3cm、推定口径5.6cm。深身の塊状を呈する。胎土に砂粒を含む。内外面磨き調整が施されるが、外面にはヘラ削り痕が残る。全面赤彩。住居南西コーナーの44の土器の直上からの出土で、遺存度は1/3程ある。

52は器器高4.3cm、推定口径5.7cm。輪積み痕を明瞭に残す。胎土に砂粒を含む。外面に粗いハケ目痕が残る。内面には指紋が観察される。外面に赤彩の可能性あり。覆土中からの出土で、遺存度は1/4程ある。

53は器高1.2cm、口径1.2cm。不明品であるが、一応ミニチュア土器として取り扱った。表面には5ヶ所の刺突痕が残る。外面に粗いハケ目痕が残る。内面には指紋が観察される。外面に赤彩の可

能性あり。床面上からの出土で、完形である。

54は胴部の小破片であろう。現器高1.1cm。内面には輪積み痕が残る。外面はヘラ削り後磨かれている。床面上からの出土である。

石製品 (55・56)

55は丸い小石である。ここでは一応遺物として取り扱ったが不明品である。大きき1.6×1.5cm、厚さ0.7cm、重さ2.7g。全体にやや赤味を帯びた黒色を呈し、表面はつやつやした光沢をもつ。

56は砥石である。断面は長方形で4面ともに使用されている。よく使用されており、弓状に中央部分が窪んでいる。表面には使用痕であろうか、何本もの細い溝が観察される。

37号土坑 (第51図)

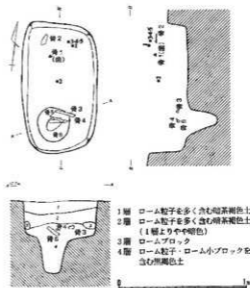
[構造] 19号住居跡を切る。人骨と古銭5枚が出土していることから、土坑墓と考えられる。(平面形)長方形。(規模)102×59cm(深さ)24~46cmを測る。溝底はほぼ平坦で、断面は西側が45°、東側が50°の角度で立ち上がる。(覆土)6層に分層される。

[遺物] 人骨と古銭5枚が出土した。人骨は骨1~骨6の6点が出土し、そのうち骨1は歯であり、骨3~骨6については大腿骨に相当するものと考えられる。

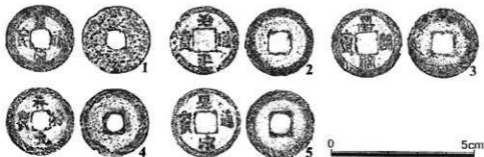
[時期] 中世。

37号土坑出土古銭 (第52図、第4表)

古銭は、すべて北宋銭で、1・5が皇宋通宝(初鑄年 1039年)、2が治平通宝(初鑄年 1064年)、3が嘉祐通宝(初鑄 1056年)、4が祥符元宝(初鑄年 1008年)である。



第51図 37号土坑 (1/30)



第52図 37号土坑出土古銭 (4/5)

番 号	種 別	計 測 値 (単位cm・g)			初 鋳 年	
		外 径	穿 径	量 目		
第52図 1	皇宋通宝	2.40	0.65	2.2	北 宋	1039年
	2	治平通宝	2.45	0.75	2.2	北 宋
3	嘉祐通宝	2.50	0.75	2.8	北 宋	1056年
4	祥符元宝	2.45	0.60	3.4	北 宋	1008年
5	皇宋通宝	2.45	0.70	2.4	北 宋	1039年

第4表 37号土坑出土古銭観察表

なお、3～5の3点の古銭については、穿孔に紐状の繊維が通してあることが確認された。本来これら5点の古銭は、紐が通され一まとまりにくくられていたものと考えられる。

1号道路状遺構 (第53図)

〔構造〕南北の方向に延びるたかく踏み固められた硬化面が確認されたので、一応道路状遺構として取り扱う。19号住居跡を切る。確認できる範囲での長さは7.1m、幅1.3～1.6mを測る。硬化面の下には深さ12～26cmの溝状の掘り込みが確認され、断面の土層は上層がローム粒子を含む暗褐色土、下層がローム粒子・小石を含む暗褐色土を基調とし、全体に硬く締まっている(19HのA土層セクションでは4・5層に相当する)。

〔遺物〕青磁盤の破片が1点出土した。

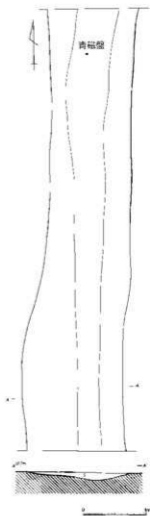
〔時期〕中世。

1号道路状遺構出土遺物 (第54図)

青磁盤の底部破片である。高台は付高台で、内面底部には錦蓮華文が描かれている。精練された胎土から中国製であるものと考えられ、時期は13世紀代であろう。



第54図 1号道路状遺構出土遺物 (1/3)



第53図 1号道路状遺構 (1/60)

第8章 西原大塚遺跡第34地点の調査

第1節 遺跡の概要

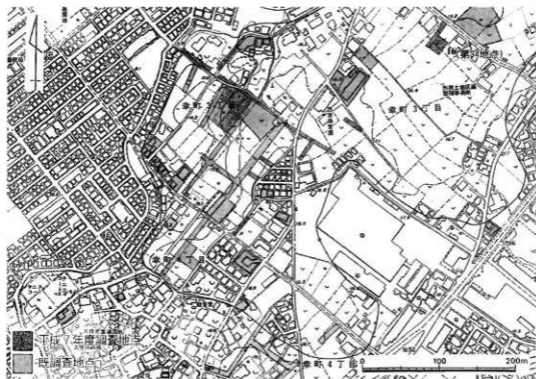
(1) 立地と環境

西原大塚遺跡は、志木市幸町3丁目を中心に広がる市域最大規模の遺跡である。遺跡は北西に柳瀬川を望む台地上にあり、標高は遺跡南端で約19m、遺跡北端で約16m、台地下の柳瀬川に開折された低地で約8mを測る。台地の縁辺は、崖下の小規模な湧水地による凹凸を除きおおむね直線的で、比較的急な傾斜をもつ。遺跡の現況は大部分が畑地であるが、この地区で土地区画整理事業が実施されており、今後、住宅建設を始めとする各種開発行為の増大が予想される。

本遺跡は、昭和48年に第1回目の発掘調査が行われて以来、住宅建設や区画整理事業などに伴い、試掘調査を含めて50地点を越す調査が実施されており、旧石器時代、縄文時代前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが知られている。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、平成7年8月4日から開始した。隣接する地点を区画整理事業に伴い調査しており、その結果から遺構の存在が確大視されたため、調査区全面の表土剥ぎをバックホーで行い、排土を



第55図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

ダンプカーにより搬出する。

7日からは協力員を導入、調査区東側から遺構確認作業を行い、4軒の住居跡と3基の土坑などを確認する。

8日からは調査区ほぼ中央に位置する住居跡を縄文時代16号住居跡(16J)として掘り始める。

9日からは調査区東側に確認されたカマドをもつ住居跡(6H)の調査を開始するが、須恵器坏形土器の破片の出土が僅かにあり、平安時代の住居跡であることが判明した。また、縄文時代中期の所産と思われる土坑2基(133・134D)の調査を始め、土層図の作成後、写真撮影を行った。

10日には16Jの精査中に住居跡ほぼ中央に土坑を確認、135号土坑(135D)とする。16Jの炉はこれにより破壊されたものと推測された。また、縄文時代17号住居跡(17J)を掘り始める。16Jの土層図の作成・写真撮影、6Hの写真撮影、133・134Dの平面図・断面図の作成、135Dの写真撮影を行う。

11日には調査区北東側にある136号土坑(136D)の調査を始め、写真撮影、平面図・断面図の作成を行う。また、6Hの北側にビット列を検出、2号ビット列として精査を行うが、これは6Hを切っていることが判明した。この日、16J・135Dの平面図・断面図・レベリング、6Hの土層図・平面図・断面図・レベリング、136Dの写真撮影、平面図・断面図の作成を行う。

14日には調査区南側を拡張、この部分の住居跡を縄文時代18号住居跡(18J)とする。また、6Hのカマドの図面作成にかかる。2号ビット列の平面図作成・レベリングを行う。

17日には18Jの調査を開始する。

18・19日には17Jの土層図・平面図・断面図の作成、写真撮影、2号ビット列の写真撮影を行う。

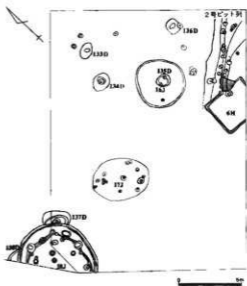
23日には18Jを切って土坑を検出、137号土坑(137D)として調査する。

24日には18Jの遺物出土状態の写真撮影・図面の作成を行う。

25日には18Jの写真撮影・土層図の作成を行う。

28日には18Jの南西にこれに切られた土坑(138D)を検出、これを調査する。18Jの平面図・断面図の作成・レベリング、137・138Dの平面図の作成を行う。

29日には137・138Dの写真撮影、18Jのレベリングを行い、実質上の調査を終了した。なお、埋め戻しは8月31日・9月1日に行った。



第56図 遺構分布図(1/300)

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 縄文時代の遺構と遺物

16号住居跡 (第57図)

〔住居構造〕 135号土坑に切られる。土層からは両遺構の前後関係は把握できなかったが、16号住居跡の床が土坑により破壊されていた。(平面形) 不整な隅丸方形。(規模) $3.8 \times 3.7\text{m}$ 。(壁高) 30cm前後を測り、北東壁の傾斜は他に比べてゆるやかである。(床面) 住居中央がよく硬化していた。(炉跡) 135号土坑により破壊されたものと思われる。(柱穴) 住居に伴うと思われるピットは壁際の1本のみである。(覆土) 上・下2層に分けられ単純な堆積状態を呈する。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

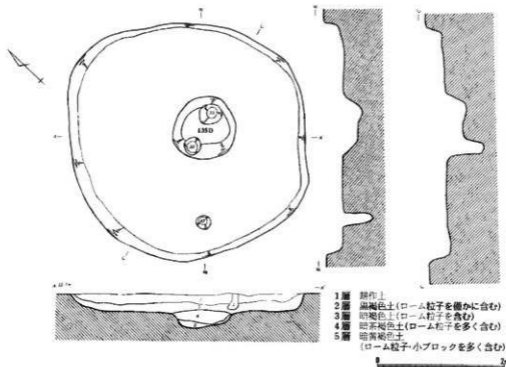
〔時期〕 加曾利E式期。

16号住居跡出土遺物 (第59図1~3)

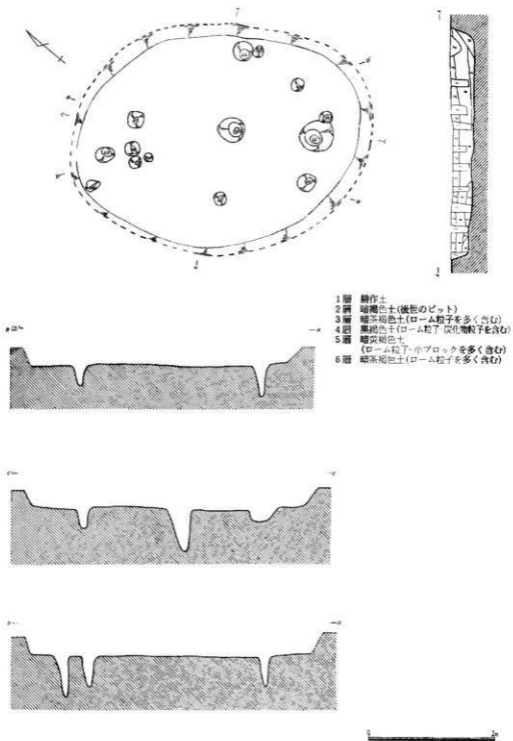
1は剣みが増えられた隆帯が貼付され、それに沿って沈線が施される。2・3は共に縦位回転の単節斜縄文が施された土器。

17号住居跡 (第58図)

〔住居構造〕 攪乱が著しく、壁の検出は一部にとどまった。(平面形) 楕円形。(規模) $4.8 \times 3.7\text{m}$ 。



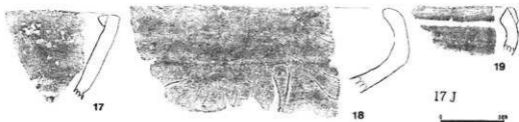
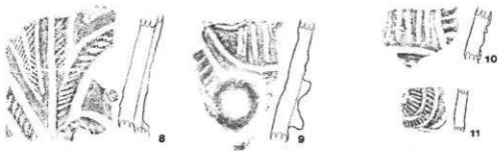
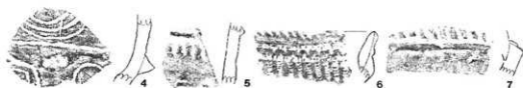
第57図 16号住居跡・135号土坑 (1/60)



第58図 17号住居跡 (1/60)



16 J



17 J



第59圖 16・17号住居跡出土遺物 (1/3)

(壁高) 25~40cmを測り、比較的ゆるやかな傾斜をもつ。(床面) 住居中央に僅かに硬化面を残す。(炉跡) 検出できなかったが、住居ほぼ中央のピット周辺に焼土・炭化物が目立ち、この部分に炉があった可能性がある。(柱穴) 深度のあるピットもあるが、不規則な配列状態であり、支柱穴を確定することはできなかった。(覆土) 下層はローム粒子・小ブロックを多く含み、埋め戻された感がある。

〔遺物〕4層中に比較的多くみられ、いわゆる廃棄パターンの状態を呈するが、土器片のみで量的には少ない。

〔時期〕勝坂式期。

17号住居跡出土遺物 (第59図4~19)

4は断面三角形の隆帯を巡らせ、結節沈線により重弧文などの文様が描かれる。5は降帯下に幅広の爪形文が巡る。いずれも胎土中に雲母を含む。阿玉合式系の土器。

6・7の文様は主に半截竹管の外側を押し引きした連続爪形文が用いられて施文される。6は口縁部破片で小突起が付され、口唇端部には刻み加えられる。口縁部には2条の連続爪形文を巡らせ、その間の隆帯化した部分を上下に交互刺突を加え鋸歯状文とする。それ以下は連続爪形文を縦位に集合して施す。7は屈曲部に連続爪形文を巡らせ、縦位の連続爪形文が集合して施される。

8~11は刻みが附加された隆帯やキャタビラ文により文様が描かれる土器。9・10は区画内に沈線が充填される。

12・13は単節斜縄文を地文とし隆帯が貼付された土器。12は口頸部破片で楕円形の区画文が作出されようか。13は胴部上位の破片で懸垂文が施される。

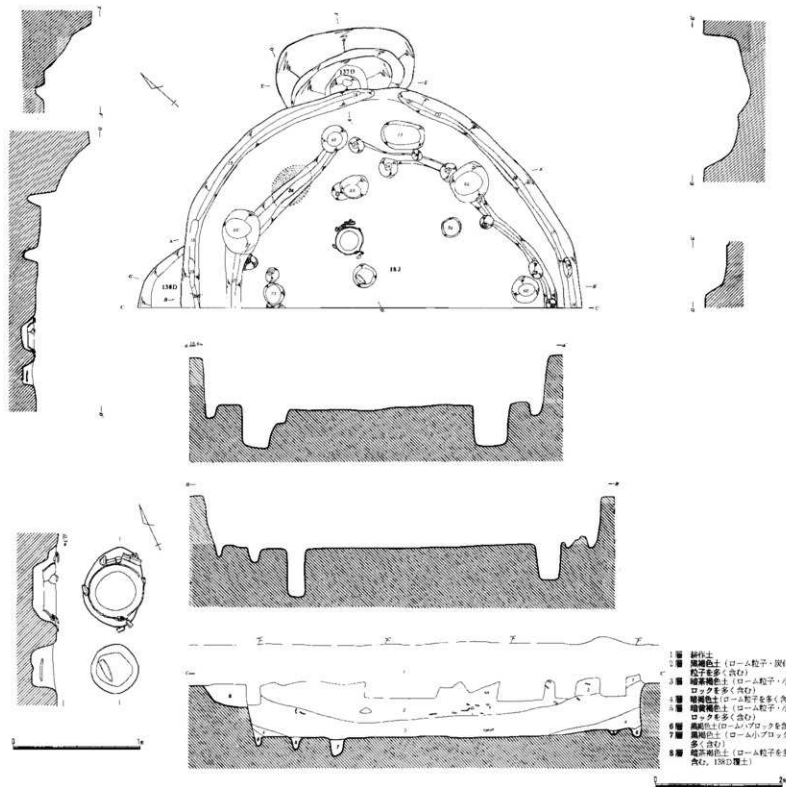
14~16は単節の縄文が施された土器。14は口唇部が外側に肥厚し直線的に開く。

17は口縁部が僅かに内湾し、口唇部は平坦で内屈する。頸部には沈線が巡る。

18・19は浅鉢形土器。18は外面に稜をもち強く内湾する。19は口縁部に沈線が巡り、内面には稜をもち外反する。

18号住居跡 (第60図)

〔住居構造〕住居南半は調査区外にある。137号土坑に切られ、138号土坑を切る。(平面形) 楕円形を呈するものと思われる。(規模) 不明×6.3m。(壁高) 85cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 拡張住居と考えられ二重に巡る。拡張前は上幅15~30cm・下幅5~15cm・深さ9~27cm、拡張後は上幅15~20cm・下幅5~10cm・深さ15~30cmを測り、ほぼ全周するものと思われる。(床面) 硬質ローム層まで掘り込まれているため良好であるが、とくに硬化面は認められなかった。北側壁寄りには被熱のため赤化している部分があり、これは拡張前の壁溝の埋没土にも及んでいた。(炉跡) 住居北側に偏って位置する。径63×46cm・深さ20cmの楕円形の掘り込みをもち、キャリパー形土器の口頸部を埋設した埋嬰炉である。周囲に礫が散在しているが、石で囲んであったのであろうか。炉跡の南側に径37cm・深さ20cmの円形の掘り込みがあり、拡張前の炉跡であった可能性がある。(柱穴) 深度のあるピットが支柱穴と思われる。拡張前の支柱穴は壁溝内側のものが、拡張後の支柱穴は壁溝と切り合うものがそれに該当しよう。(覆土) 大略、上下2層に分層できる。下層



第60図 18号住居跡、137・138号土坑(1/60)

はロームブロックを多く含み、埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕いわゆる廃棄パターンを呈し、覆土上層から多量に出土した。

〔時期〕加曾利E I 式期。

18号住居跡出土遺物（第61～65図）

1は炉跡に埋設されていたキャリバー形土器。口縁部には渦巻状の把手が対面して付される。Lの燃糸文を口縁部には横位に、頸部以下には縦位に施し地文とする。口縁部の文様は隆帯による横「S」字状文とそれを变化させた形の渦巻文に楕円形文などを連結して形成される。頸部にはほぼ半周にわたって半截竹管の内側を用いた断面「カマボコ」状の太沈線が波状に巡らされる。

2はキャリバー形の上器で、頸部は無文帯となる。口縁部の文様はLRの単節斜縄文を地文とし、隆帯による渦巻文と楕円形の区画文からなる。2Bは渦巻文の剥離した土器面の、2Cは渦巻文となった隆帯の接合面の拓影図であり、2Cに縄文が鮮明にみとれる。これは隆帯の貼付が縄文施文後、器面がある程度乾燥した段階で行われたことを示唆した好例といえよう。

3は口縁部を欠く。Lの燃糸文を地文とし、頸部に平行沈線が走り、平行沈線と蛇行沈線の懸垂文が施される。

4は胴部がほぼ円筒状を呈し、口縁部は僅かに外反する。頸部には2条の隆帯を巡らせ、胴部はLRの斜縄文を地文とし隆帯による懸垂文がみられる。頸部の隆帯と懸垂文の接続部は舌状に突出し強調される。

5は浅鉢形土器。体部は僅かに内湾しながら開き、口縁部は強く内屈する。頸部の屈曲部には貼付文が巡っていたらしく剥離痕が残っているが、鈔のようなものが貼付されていたのであろうか。口縁部には極太の凹線により浮き彫り状の文様が描かれ、2孔が穿たれている。

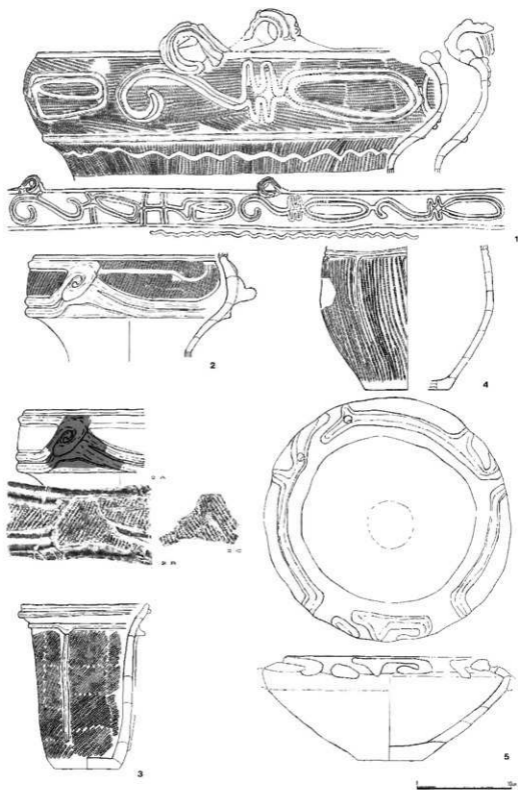
6～10は阿玉台式系の土器。

6は断面三角形の隆帯による長楕円形の区画文が走り、結節沈線による連弧文が施される。7は幅広の爪形文が走り、結節沈線による重弧文が施される。8は断面三角形の隆帯とそれに沿う結節沈線文を境とし、結節沈線による連弧文と幅広の爪形文が巡る。9は隆帯下に結節沈線による連弧文を正反対向して施す。10は幅広の爪形文が巡る。これらはいずれも胎土中に雲母を含む。

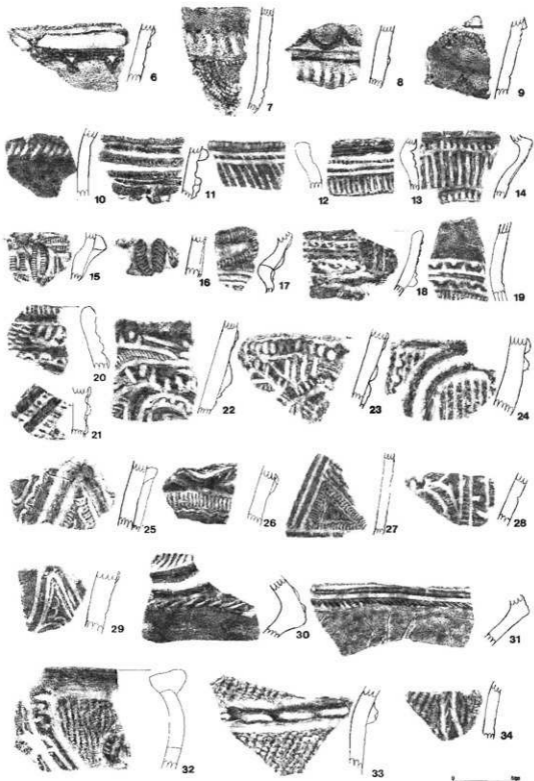
11～34は勝板式系の土器。

11は断面「カマボコ」状の2本の隆帯が走り、下位の隆帯からは二又に分かれる隆帯が垂下する。隆帯の上下左右には連続爪形文が施される。12は口縁部に半截竹管の外側を押し引きした連続爪形文が走り、下位には結節沈線を斜位に集合して施し、2条の沈線を巡らす。13は外屈するくびれ部にへう状施文具による刻みが施され、半截竹管による平行沈線文下は短沈線が縦位に集合する。14は縦位の刻み・短沈線・刻みが沈線を境にして施される。

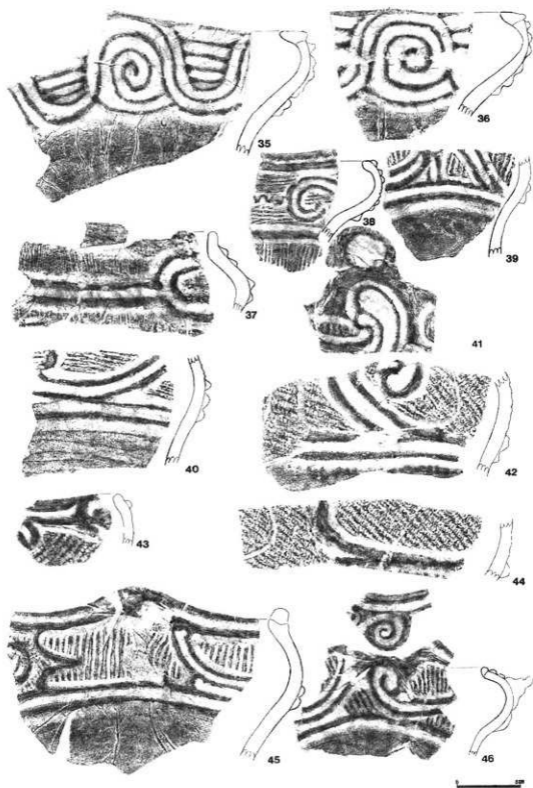
15～18・22～26は隆帯により意匠文や区画文が形成される土器。15～17の隆帯には細かな刻みが附加されており、15は区画内に刻みや沈線が充填される。16は隆帯が波状に施されるのであろうか。17は把手と思われる破片で隆帯下には2本の沈線が巡る。18は口縁部破片で横位の隆帯により分帯される。口縁部文様帯は2本の沈線により縦位区画され、区画内には交互刺突による鋸歯状文が横位に施される。22・23は太い刻みが附加された隆帯により意匠文が描かれる土器で、間隙部分には



第61圖 18号住居跡出土遺物1 (1/4)



第62图 18号住居跡出土遺物2 (1/3)



第63图 18号住居跡出土遺物3 (1/3)

沈線や刻みが充填される。24は隆帯による区画文が形成される土器。半截竹管を縦位に引いた集合する沈線を地文としたもので、平行沈線間は「カマボコ」状に隆起する。また、隆起部は一部交互刺突により鋸歯状文となる。25は隆帯による区画内に、沈線や半截竹管の連続刺突による連弧に縁取りされた密集した爪形文が充填される。26は隆帯と波状沈線間に幅広い施文具の押し引きによる連続刺突文が施される。

19は無文帯下に交互刺突による鋸歯状文が2条巡り、Rの撚糸文が施される。

20は折影図では不明瞭であるが、波状口縁となる土器である。刻みや半截竹管による刺突が施される。

21は丸棒状の施文具により平行沈線を施し、それに交差するように隆帯を貼付する。

27～29は浮き彫り状に文様が施される土器。27・29は平行沈線で区画文を作出するが、沈線間が「カマボコ」状に盛り上がる。区画に沿って、27が波状沈線によってなぞられた密集した爪形文が、29はペン先状の施文具の押し引きによる連続刺突文と半截竹管の刺突文が施される。28は刻みが附加された平行沈線により文様が描かれ、部分的に交互の刺突文が加えられる。

30・31は器形が「く」字状に鋭く内屈し、浅鉢形土器の可能性もある。屈曲部には刻みが加えられる。30には隆帯による区画文がみられる。

32は強く内湾する口縁部破片で、口唇端部は平坦で肥厚する。R Lの単節縄文を地文とし、刻みの附加された隆帯が貼付される。

33・34はR Lの単節斜縄文を地文とし、33は横位の短沈線が加えられた隆帯が巡る。34の隆帯上には矢羽根状の刻みが加えられる。

35～58は加曾利EⅠ式段階の土器。

35・36は同一個体の土器で、文様は隆帯の貼付によってなされる。波状文の波底部を隆帯で結び、「U」字・逆「U」字状の区画とし、逆「U」字状の区画内には渦巻文が、「U」字状の区画内には横位の隆帯が4段充填される。

37～41は地文に撚糸文をもつ土器。37・38は連結した横「S」字状文ないしは渦巻文が施される。39・40は頸部を無文帯とする土器。41は角形を呈した管状の把手がつけられる。

42～44は地文に縄文をもつ土器。42・44は同一個体の土器で、R Lの単節斜縄文を地文とし、隆帯の貼付により渦巻文や楕円形の区画が作られる。

45・46は隆帯により区画が形成され、集合した沈線が充填される。

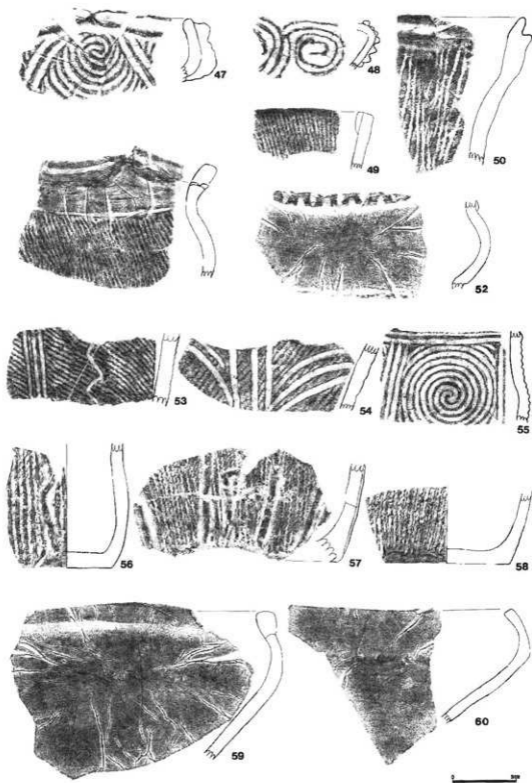
47はドーム状の貼付文上に、沈線による渦巻文が施される。

48は隆帯による渦巻文が貼付される。

49～51は撚糸文が施された土器。50は口唇部直下に隆帯が巡る。51は波状口縁の土器で、頸部がくびれ制部がふくらむ壺形の形状をとり、口唇端部はくぼむ。頸部には沈線が回り口縁部は無文帯となる。

52は胴上部が大きくふくらむ土器か。頸部と思われるくびれ部には交互に刺突が加えられた隆帯が巡る。

53～55は胴部破片。53・54は単節の斜縄文を地文とし、沈線による懸垂文・弧線文が施される。



第64图 18号住居跡出土遺物4 (1/3)

55は沈線による懸垂文間に渦巻文が施される。

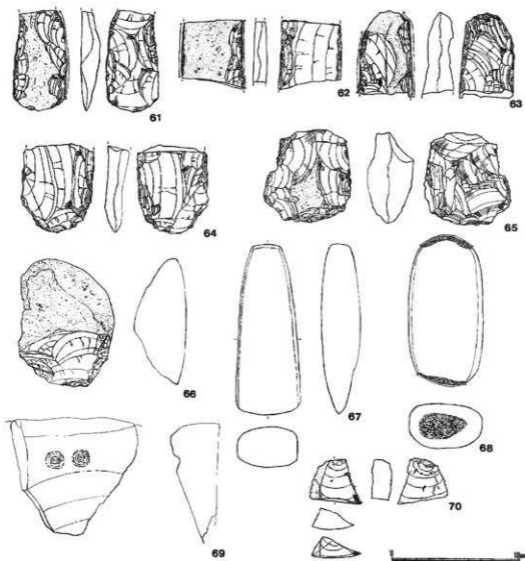
56~58は底部破片。いずれも撫糸文を地文とし、56・57は降帯による懸垂文が垂下する。

59・60は浅鉢形土器。60は内面に一部赤彩が認められる。

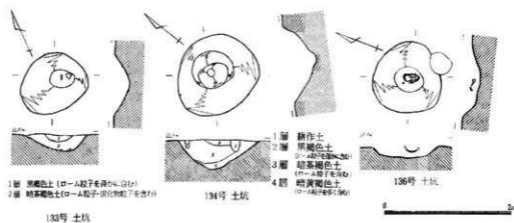
61~65は打製石斧。61~64は破損品であるが、いわゆる短冊形を呈したものである。61~63は礫面を残す。61は縦長の、62・64は横長の剥片を素材とする。61~63は硬砂岩、64は粘板岩製。重量は、それぞれ67.3g・54.7g・82.3g・84.3gを測る。65は長さ7.2cm・幅6.3cm・厚さ3.5cmを測る寸づまりで肉厚の打製石斧。表面に一部礫面を残し礫核を用いた可能性もある。凝灰岩製で重量は210g。

66は長さ10cm・幅7.8cm・厚さ4cmを測る片刃の礫器。裏面には全面礫面を残す。重量は350g。

67は長さ13.5cm・最大幅5cm・厚さ3.2cmを測る定角式石斧。刃部は鋭利に作出されている。重



第65図 18号住居跡出土遺物5 (1/3)



第66図 土坑 (1/60)

量は390g。

68は敲石。喉の両端に敲打痕を残す。両面には磨痕が認められ、磨石としても使用されている。重量は430g。

69は石皿の破片。凹石としても利用されている。緑泥片岩製。

70は踵面を打面とする縦長の片。岡右側縁には微細な刃こぼれが認められる。珪岩製で重量は22g。

本住居跡から、他に6点の打製石斧の破損品がある。

133号土坑 (第66図)

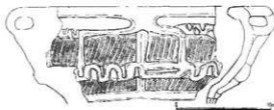
〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 150×90cm。(深さ) 23cm前後を測り、断面はすり鉢状を呈する。
〔覆土〕 2層に分けられ、下層はよく締まっている。

〔遺物〕 土器片が多く出土した。

〔時期〕 勝坂式期。

133号土坑出土遺物 (第68図1～8)

1は口頭部破片と思われる。頸部には蛇行する隆帯が走り、口縁部には弧状の隆帯が貼付される。2は中空の突起が剥落したもので、隆帯により加飾される。3は粘土紐をねじるように貼付した隆帯がみられる。4～6は刻みが追加された隆帯が貼付された土器で、4は沈線による文様が施される。7は入り組み状の渦巻文が沈線によって描かれる。8は隆帯が走り、以下、単節R Lの縄文が施される。



第67図 133号土坑出土遺物 (1/4)

134号土坑 (第66図)

〔構造〕(平面形) ほぼ円形を呈する。(規模) 135×120cm。(深さ) 28cm前後を測り、断面は碗状をなすが、坑底は一段くぼむ。(覆土) ローム粒子を含む暗茶褐色土を基調とし、全体によく締まっている。

〔遺物〕土器片が僅かに出土した。

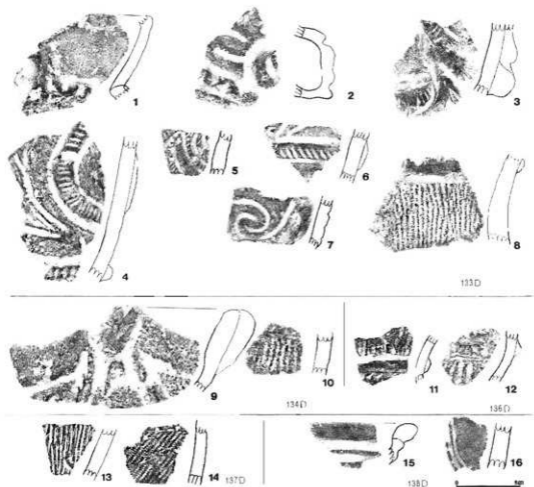
〔時期〕勝板式期。

134号土坑出土遺物 (第68図9・10)

9は波状口縁の土器。口縁部は沈線による区画により無文帯となり、波頂部から隆帯を垂下させる。10はR Lの単節縄文が施された土器。

135号土坑 (第66図)

〔構造〕16号住居跡を切る。土層の状態から判断すると、本土坑の掘り込みは住居跡の床面が露出していた段階になされたと思われるべきか。(平面形) ほぼ円形を呈する。(規模) 99×98cm。(深さ)



第68図 133・134・136～138号土坑出土遺物 (1/3)

20cm前後を測り、坑底はほぼ平坦であるが、2本のピットが検出された。(覆土)ローム粒子を多く含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕土器小破片が僅かに出土。図示できるものはなかった。

〔時期〕加曾利E式期。

136号土坑 (第66図)

〔構造〕(平面形)ほぼ円形を呈する。(規模)112×107cm。(深さ)18cm前後を測り、坑底は平坦である。(覆土)ローム粒子を多く含む暗茶褐色土の単一土層である。

〔遺物〕口頸部の大型破片が出土した。

〔時期〕加曾利E I式期。

136号土坑出土遺物 (第67図、第68図11・12)

第67図は口頸部が1/4程度遺存するキャリバー形土器で推定復元径23cmを測る。口唇端部は平坦で鋸状に張り出し、部分的にそのまま伸び橋状の把手となる。口唇部下の一部交互に押捺の加えられた隆帯と頸部の隆帯により口縁部文様帯が区画される。区画内はRLの甲節縄文を地文とし、波状の隆帯と長楕円形の隆帯を連結させて巡らせ2段に分割し、更に縦位の隆帯の貼付により上段は幅狭、下段は幅広の区画を作出する。

11・12は縄文を地文とし隆帯が巡る。11は隆帯下に刺突文が加えられているようだ。共に上記の土器と同一個体と思われる。

137号土坑 (第66図)

〔構造〕18号住居跡を切る。(平面形)楕円形を呈するものと思われる。(規模)不明×220cm。(深さ)60cm前後を測り、壁は段をもって立ち上がる。坑底にはピットが穿たれる。(覆土)上層はローム粒子を含む黒褐色土、下層はローム粒子を多く含む暗茶褐色土。

〔遺物〕土器片が僅かに出土した。

〔時期〕加曾利E I式期。

137号土坑出土遺物 (第68図13・14)

13はLの撚糸文が施される。14はRLの甲節斜縄文を地文とする。横位に施された沈線には円形竹管の刺突がみられる。

138号土坑 (第66図)

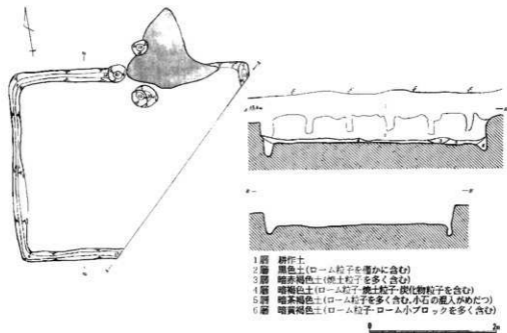
〔構造〕18号住居跡に切られ、南半は調査区外にある。(平面形・規模)不明。(深さ)35cm前後を測り、断面は碗状を呈しようか。(覆土)ローム粒子を多く含む暗茶褐色土の単一土層である。

〔遺物〕土器片が僅かに出土した。

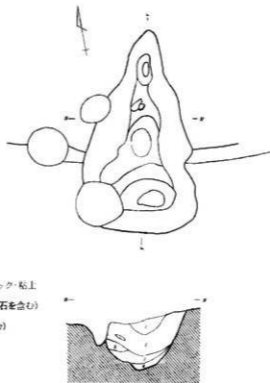
〔時期〕磯坂式期。

138号土坑出土遺物 (第68図15・16)

15は口唇部下に2条の凹線が巡る。16は2条の沈線が弧状に施される。



- 1層 黒褐色土(ローム粒子・焼土粒子を多く含む)
 2層 暗赤褐色土(ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック・粘土粒子・小石を多く含む)
 3層 灰褐色粘土(ローム小ブロック・焼土粒子・小石を含む)
 4層 暗灰褐色粘土(焼土粒子・炭化物粒子を含む)
 5層 黒褐色土(ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む)



(2) 平安時代の遺構と遺物

6号住居跡(第69図)

〔住居構造〕南東コーナー部は調査区外にある。(平面形)長方形。(規模)3.8×3.05m。(壁高)30～30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)調査できた範囲ではカマド右側を除き全周する。上幅10～18cm・下幅4～8cm・深さ9～20cmを測る。(床面)壁際を除いて硬化面が認められる。(カマド)北壁東に偏って位置する。長さ125cm・幅120cm・壁への掘り込み95cmを測り、袖部及び天井部は灰褐色粘土により構築されている。(覆土)黒色土を基調とするが、床面上に焼土粒子・炭化物粒子を含む層があり、焼失家屋の可能性はある。

〔遺物〕須恵器坏形土器の破片が僅かに出土したのみで、図示できるものはなかった。

〔時期〕平安時代。

追記

志木市遺跡調査会では、1996年7月から6カ月間にわたり、今回報告した地点に近接する部分(第35地点)の発掘調査を実施した。縄文時代中期後半の住居跡については20軒を数えたが、その中の1軒(118号住居跡)から本報告の18号住居跡出土遺物(第61図2)と接合する土器片を検出することができた。

118号住居跡は、18号住居跡の北西35mの位置にある。平面形は楕円形を呈し、規模は7×6.5m、深さ0.7mを測り、炉跡の埋設土器から加曾利E I式期の住居跡であることが判明している。

兩住居跡の遺物は、覆土上層に廃棄されたと思われる状態で多量に出土しており、本接合資料も共にこのような中から検出された。接合した部位は、頸部無文帯から口縁部にかけてのものである。

第9章 中野遺跡第41地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

中野遺跡は、志木市柏町1丁目を中心とする遺跡である。遺跡は北方に柳瀬川を、西方に小支谷を臨むやや舌状に突出した台地上に立地する。遺跡の標高はその北端で約9m、南端で約11mを測り、台地縁辺はきわだった崖もなく比較的ゆるやかに北側の低地に移行している。低地との比高差は約3mである。遺跡の現状は、宅地化が急速に進行している地域であり、畑地は残り少ないと言える。

本遺跡の第1回の発掘調査は、昭和60年に実施され、以後の調査で旧石器時代、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代中・後期、平安時代、近世の複合遺跡であることが判明してきている。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成7年10月26日に実施した。調査区の長軸方向に合わせ、2本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を削ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、住居跡と思われる遺構を2基確認した。同日には、遺構のプランを確認するため周囲の表土剥ぎを行い、その作業を終了し



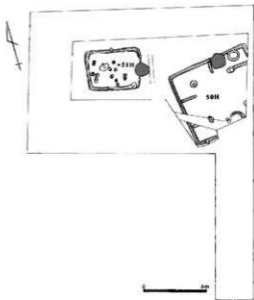
第70図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

た。また、残土については、調査区域内の遺構が存在しない箇所にその置場を当てることにした。

人員導入による発掘調査は、翌27日から実施した。まず、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行い、同日には遺構の精査を開始する。遺構は、古墳時代後期の住居跡1軒(50H)と平安時代の住居跡1軒(51H)であるものと判明した。

31日には、51Hの遺物出土状態の写真撮影・実測を終了し、11月1日からはカマドの精査を開始する。6日にはカマドの実測を終了し、51Hの調査は完了した。

50Hについては、11月2日に遺物出土状態の写真撮影・実測を行い、実測に併行して遺物取り上げ作業を開始する。6日にはその作業を終了し、翌7日には遺構の写真撮影・実測を行う。8日、カマドの実測を開始し、13日には住居の掘り方の精査を含め、すべての調査を完了した。埋め戻しは15日に行った。

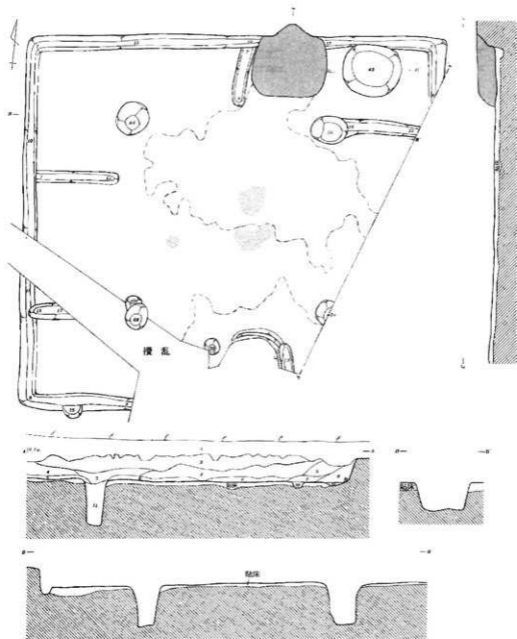


第71図 遺構分布図(1/300)

第2節 検出された遺構と遺物

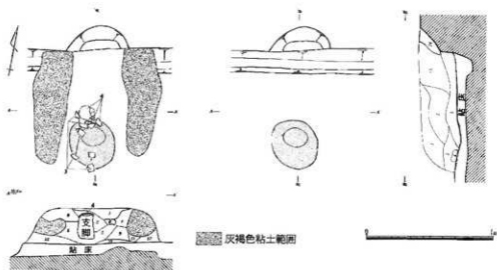
50号住居跡(第72~74図)

[住居構造] 南東コーナーは調査区域外にあると思われる。(平面形) 長方形。(規模) 3.06×3.0 m。(長軸方位) N-84°-E(壁高) 30~40cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できる範囲では全周する。上幅18~28cm・下幅7~12cm・深さ5~13cmを測る。各壁から住居内へ直角に延びる間仕切り溝が5本確認された。(凸壁) 南壁に付設される馬蹄形状の隆起部で、上幅5cm・下幅15cm前後、高さ3cmを測る。入口部分に相当する施設である可能性がある。(床面) カマドの前面と南壁凸壁付近が、よく硬化していた。中央付近には3ヶ所の焼けて赤化した部分を確認された。(カマド) 北壁の中央よりやや東に偏って位置する。主軸方位はN-10°-W。長さ113cm・幅102cm・壁への掘り込み19cmを測る。壁溝の一部を埋め戻した後に構築されている。床面への掘り込みはほとんどなく、燃焼部が僅かに窪む程度である。粘土の範囲から内袖部が確認できたが、ロームによる隆起部分はみられなかった。煙道は垂直に立ち上がった後、40度程の勾配でゆるやかに立ち上がる。また、支脚が壁から50cm程離れた燃焼部のやや裏側から直立した状態で検出され、その上部には環(4の土器)が被せてあった。(柱穴) 主柱穴が各コーナーより4本検出された。深さ56~74cmを測る。(貯蔵穴) カマド右横の北東コーナーに位置する。平面形は楕円形、規模は90×82cm、深さ42cmを測る。覆上はローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む黒色土を基調とする。



- 1層 表土及び掘乱
- 2層 ローム粒子を僅かに含む黒色土
- 3層 ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土
- 4層 ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土(3層よりやや明色)
- 5層 焼土粒子を多く、ローム粒子・炭化物粒を含む暗赤褐色土
- 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗赤褐色土
- 7層 ローム粒子・ロームブロックを多く含む暗赤褐色土
- 8層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土
- 9層 ロームブロック
- 10層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗赤褐色土
- 11層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明赤褐色土

第72図 50号住居跡 (1/60)



- | | |
|--|---|
| <p>1層 ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む黒褐色土</p> <p>2層 粘土粒子・粘土小ブロックを多く、焼土粒子・焼土小ブロックを含む暗灰褐色土</p> <p>3層 焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子を含む暗灰褐色土（2層よりやや暗色）</p> <p>4層 被熱ロームブロック</p> <p>5層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子を含む黒褐色土</p> <p>6層 焼土ブロック</p> <p>7層 焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む暗赤褐色土</p> | <p>8層 焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・粘土粒子・粘土小ブロックを含む暗茶褐色土</p> <p>9層 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・粘土粒子を含む黒色土</p> <p>10層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子を含む黒褐色土</p> <p>11層 ローム粒子を含む暗茶褐色土（粘土質層）</p> <p>12層 ローム粒子を含む黒褐色土</p> <p>13層 焼土粒子・焼土小ブロック・粘土を多く、炭化物粒子を含む暗赤褐色土</p> <p>14層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・焼土小ブロックを含む明茶褐色土</p> |
|--|---|

第73図 50号住居跡カマド (1/30)

〔覆土〕 上層はローム粒子を僅かに含む黒色土、下層はローム粒子を含む明茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕 遺物は覆土及び床面上から多く出土した。

〔時期〕 古墳時代後期。

50号住居跡出土遺物 (第75～77図)

土師器環形土器 (1～9)

1は体部上半でややくびれ、口縁部は僅かに外反する。底部は平底気味に作られている。内面はヘラナデ、外面は口縁部横ナデ、以下ヘラ削りが施され、底部は平底気味に作られている。外面底部を除き赤彩。ほぼ床面上からの出土で、遺存度は2/3程である。

2は底部から口縁部にかけて内湾し、底部は器厚が分厚く、平底気味に作られている。内面はヘラナデ、外面は口縁部横ナデ、以下ヘラ削りが施される。外面底部を除き赤彩。床面上13cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は2/3程である。

3は底部から口縁部にかけて内湾し、底部は器厚が分厚く、平底気味に作られている。内面はヘラナデ、外面は口縁部横ナデ、以下ヘラ削りが施される。外面底部を除き赤彩。床面上13cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は2/3程である。

4は碗状のもので、底部はやや平底気味に作られている。内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。外面底部を除き赤彩。カマド内の支脚の上に被せられた状態で出土し、口縁部を欠く。

5は須恵器坏身の模倣坏である。底部と口縁部の境に段をもち、口縁部は内傾する。口唇部は丸い。口縁部は内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は磨かれているが底部にはヘラ削り痕が顕著に残る。内外面赤彩。床面上16cm浮いた覆土中からの出土で、ほぼ完形である。

6は須恵器坏蓋の模倣坏である。底部と口縁部の境に段をもち、口縁部は内湾する。口唇部は内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は磨かれているが底部にはヘラ削り痕が残る。内外面赤彩。床面上からの出土で、ほぼ完形である。

7は須恵器坏蓋の模倣坏の小破片である。底部と口縁部の境に段をもち、口縁部は外傾する。口縁部内面及び外面はいいいな横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。口縁部内面及び外面は赤彩。床面上17cm浮いた覆土中からの出土である。

8は黒色土器の底部破片である。内面はヘラナデ後放射状の暗文が施される。外面は磨かれているが底部にはヘラ削り痕が残る。また、外面には細線による線刻あり。南西コーナーの柱穴内からの出土である。

9は黒色土器の底部破片である。底部と口縁部の境に段をもち、口縁部は外傾する。口唇部は内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ後放射状の暗文が施される。外面は磨かれているが底部にはヘラ削り痕が残る。床面上20cm浮いた覆土中からの出土で、遺存度は1/3程である。

土師器壺形土器 (10)

底部は平底を呈し、強く張った肩部をもつ。内面は胴部下半までヘラナデ、以下ハケ目調整が施される。外面にはヘラ削り痕が顕著に残る。外面赤彩。なお、実測図は胴部上半と下半が接合しなかったため、合成して作成した。ほぼ床面上からの出土で、胴部上半から底部にかけて1/4程遺存する。

土師器甕形土器 (12)

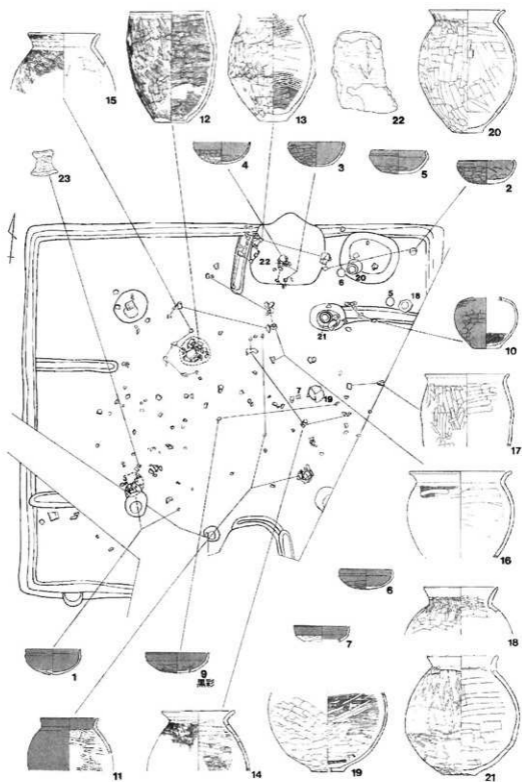
胴部上半に膨らみをもち、底部から口縁部にかけて全体に内湾する。口縁部は内外面横ナデ、以下全面に粗いハケ目調整が施される。口唇部の一部に布目の圧痕が残る。輪積み痕が顕著に残る全体に粗雑な作りの土器である。床面上からの出土で、ほぼ完形である。

土師器甕形土器 (11・13～21)

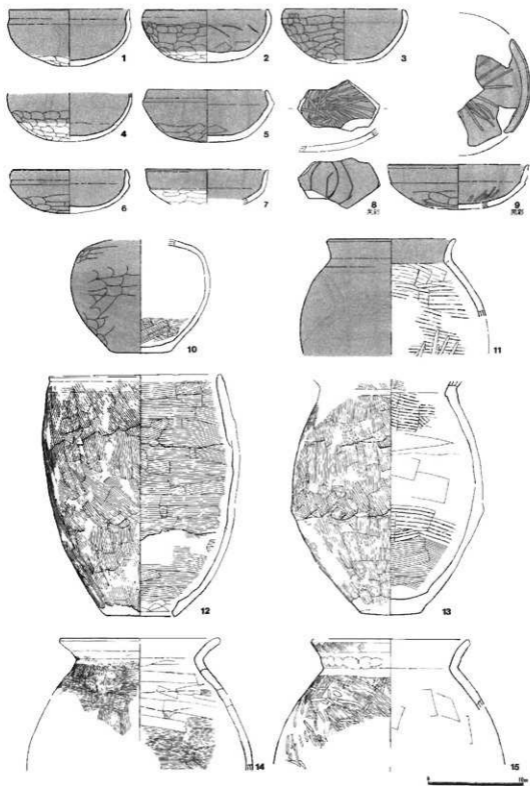
11は球状の胴部をもち、口縁部は外反する。口縁部は内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ（先端ささら状）、胴部下半には縦方向の暗文状の磨きが施される。外面はヘラ削り後ナデ調整か。特に、外面の剥落が著しい。外面及び口縁部内面は赤彩の可能性あり。床面上7cm浮いた覆土中からの出土で、口縁部から胴部中位にかけて2/3程遺存する。

13は胴部中位に膨らみをもち、胴部は長胴化の傾向にある。頸部は内外面横ナデ、以下内面は胴部下半にかけて粗いヘラナデ（先端ささら状）、胴部下半はハケ目調整が施される。外面は全面に粗いハケ目調整が施される。輪積み痕が顕著に残るなど粗雑な作りは12の土器に近似する。外面及び口縁部内面は赤彩の可能性あり。カマド周辺からの出土で、頸部から底部にかけて2/3程遺存する。

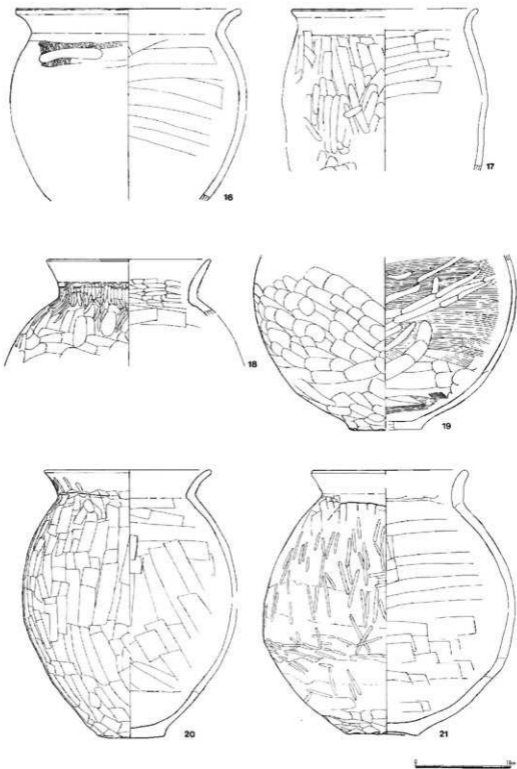
14は球胴のもので、頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部は大きく外傾する。口縁部は内外面横ナデ、以下内面はハケ目調整後ヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。床面上6～20cm浮いた覆



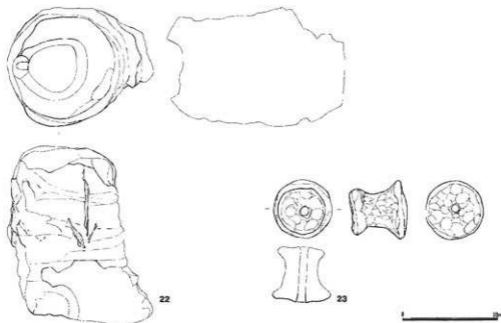
第74图 50号住居跡遺物出土状態(遺構 1/60. 遺物1/9)



第75图 50号住居跡出土遺物1 (1/4)



第76图 50号住居跡出土遺物 2 (1/4)



第77図 50号住居跡出土遺物3 (1/4)

土中からの出土で、口縁部から胴部中位にかけて1/2程遺存する。

15は14に比べ、口縁部の外傾はやや弱い。非常に堅緻な作りの土器である。口縁部は内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はハケ目調整後粗い磨きが施される。床面上12~17cm浮いた覆土中からの出土で、口縁部から胴部中位にかけて1/2程遺存する。

16は胴部上半に最大径をもち、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。口縁部は内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はハケ目調整後ヘラナデが施される。特に、外面の剥落が著しい。床面上13~21cm浮いた覆土中からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて1/2程遺存する。

17は口縁部の外反が弱く、長胴のものである。口縁部は内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラナデが施される。床面上22cm浮いた覆土中からの出土で、口縁部から胴部中位にかけて、1/4程遺存する。

18は球胴のもので、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。口縁部は内外面横ナデ、以下内面は頸部に幅5mmの削り痕が残り、胴部上半はヘラナデが施される。外面は全体にヘラ削りが施されるが、頸部は内面頸部と同様の工具により縦方向に密な削りが施される。床面上11cm浮いた覆土中からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて2/3程遺存する。

19は球胴のもので、胴部中位に最大径をもち、内面はヘラナデ(先端ささら状)、外面はヘラ削りが施される。床面上17cm浮いた覆土中からの出土で、胴部中位から底部にかけて1/3程遺存する。

20は胴部がやや長胴化の傾向にあるもので、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。口縁部は内外面横ナデが施されるが、外面には縦方向に間隔の開いた暗文風の磨きが施される。以下内外面ヘラナデが施される。貯蔵穴内からの出土で、ほぼ完形である。

21は20に比べ、胴部が球状で、頸部の「く」の字は崩れている。口縁部は内外面横ナデ、以下内面はヘラナデが施される。外面はヘラナデ後間隔の開いた粗い磨きが施されるが、胴部下半にはヘラ削り痕が残る。北東コーナーの柱穴内からの出土で、完形である。

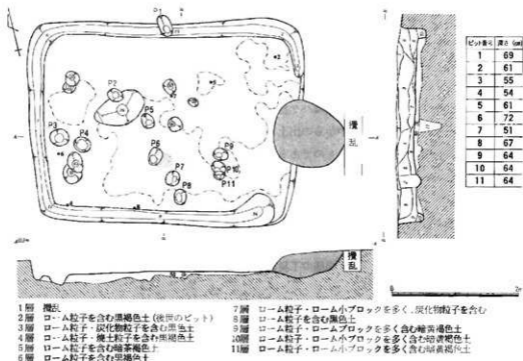
土製品 (22・23)

22は支脚である。側面には粘土しわがみられ、全体に象の足状を呈する。上面には1.5cm程の窪みをもつ。カマド内からの出土である。

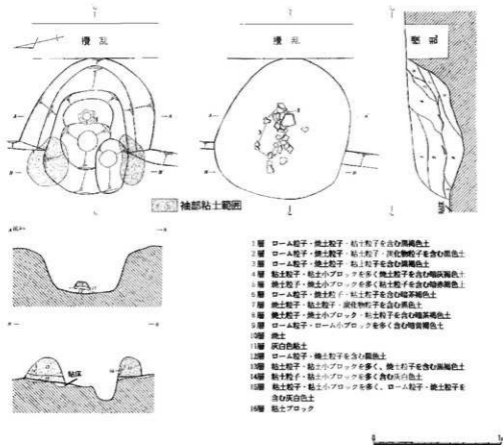
23は糸巻き型の紡錘車である。長さ5.9cm、上幅5.0cm、下幅6.1cm、穿孔径0.7cm。表面には全面にわたり指頭による成形痕と指紋が観察される。ほぼ床面上からの出土で、完形である。

51号住居跡 (第78・79図)

「住居構造」(平面形) 長方形。(規模) 4.33×3.30m。(長軸方位) N-78°-W。(壁高) 22~30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) カマドのある東壁で一度途切れている。上幅20~30cm・下幅7~15cm・深さ3~16cmを測る。(床面) カマド周辺と中央付近がよく硬化していた。また、中央より少し南寄りの床面が一部よく焼けて赤化していた。(カマド) 東壁のほぼ中央に位置する。主軸方位はN-73°-W。長さ110cm・幅104cm・壁への掘り込み70cmを測る。袖部の構築土は純粋な灰白色粘土ではなく、黒色土と粘土を混ぜたような粘土質のものを使用している。煙道は約50°



第78図 50号住居跡 (1/60)



第79図 50号住居跡カマド(1/30)

の勾配で立ち上がっている。また、坑底より5cm程浮いた位置から、環(1の土器)が伏せられた状態で出土し、その上からは3の土器が出土した。1の土器の中及び直下には焼土と灰白色粘土が検出された。(柱穴)多数のピットが床面及び貼床下より検出されたが、中でも西壁寄りの深さ36cmの比較的大きなピットは主柱穴に関係するものであろうか。(覆土)8層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

[遺物] 覆土中及び床面上から、土器・土製品・石製品・鉄製品が出土した。

[時期] 平安時代。

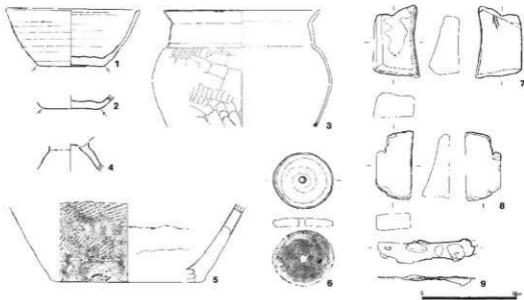
51号住居跡出土遺物(第80図)

須恵器環形土器(1・2)

1は器高6.0cm、口径14.1cm、底径7.0cm。ロクロ回転は右回転。色調は灰褐色を呈し、胎土に小石・白色砂粒を含む。カマド内からの出土で、遺存度は4/5程である。

2は現器高1.5cm、底径5.8cm。ロクロ回転は右回転。色調は灰白色を呈し、胎土に砂粒を含む。床面上からの出土で、底部のみの遺存である。

土師器壺形土器(3~4)



第80図 51号住居跡出土遺物(1/4)

3は胴部上半に最大径をもち、口縁部から頸部にかけて「コ」の字状を呈する。口縁部は内外面へラ削り後横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はへら削りが施される。カマド内(1の土器の上)からの出土で、口縁部から胴部中途にかけて1/2程度遺存する。

4は台付甕の脚台部破片である。上端は輪積み痕で離れている。内外面横方向のへらナデが施される。床面上10cm浮いた覆土中からの出土である。

須恵器甕形土器(5)

胴部下半から底部にかけての破片である。色調は濃灰褐色を呈する。内面はナデ調整が施され、外面には平行叩き目が残る。

土製品(6)

須恵器环形土器の底部を転用した紡錘車である。外径6.4cm、穿孔径0.8cm、重さ41.7g。底部外面には回転糸切り痕が残る。胎土に白色針状物質を含む。床面上8cm浮いた覆土中からの出土である。

石製品(7・8)

7・8ともに砥石である。7は断面が長方形で3面を使用している。よく使用されており、中央部が弓状に窪んでいる。3本の細溝が観察される。床面上5cm浮いた覆土中からの出土である。

8は断面が長方形で4面とも使用している。7よりもよく使用されていたのであろうか、弓状のカーブが強い。床面上5cm浮いた覆土中からの出土である。

鉄製品(9)

いわゆる「半月形鉄製品」と呼ばれるものであろう。長さ10.2cm、背厚0.1cm。両端部より中央部がやや細身である。両端部にはそれぞれ小穴が開けられている。右端部を一部欠損。床面上12cm浮いた覆土中からの出土である。

第10章 ま と め

ここでは特に、以下の2点について、若干のまとめを行うものとする。

1. 城山遺跡第29地点の馬の埋葬遺構について

127号土坑から馬骨が人為的に埋葬された状況で検出されている。馬骨は横臥した状態で出土し、頭部及び上半部を欠損するが、馬1頭分が検出されている。馬骨の下部からは、イネわら状に包まれた「おにぎり」あるいは「ちまき」と考えられる炭化物が検出されているが、これは供養のために供された食品であったと推測される。

その他、当遺構から検出された遺物には、板碑片と素焼土器がある。板碑は、連座の形状や栗研の彫り方から鑑み14世紀後半から15世紀にかけての年代観が与えられる。素焼土器に関しては、浅野氏の年代観によれば、16世紀頃のものだと判定される。このことから、伴出する遺物には年代観のずれが認められる。ここから検出された遺物から、遺構の周囲にカクランが及んでいることや追善供養等の遺物の存在も予想されることから、遺構の構築時の決定的な年代を示すものではないと言える。とはいえ、同種の遺構は、長野県長野市松原遺跡Ⅲ等で平安時代と考えられるものが確認されているものがあるが、東京都北区御殿前遺跡Ⅲや神奈川県相模原市新戸遺跡あるいは群馬県上栗須寺遺跡等の例のように中～近世のものが一般的である。従って、当遺構も柏城の三の丸に該当する地点に存在している状況等から鑑み、やはり中世末頃の遺構と考えられる。

柏城の廃絶年代は、現状では不明であるが、堀跡内からは、17世紀前半代の遺物が検出され、堀がこのころから埋没していったと予想される。このことから、当遺構もこのころの年代観を与えることも可能である。現に、一の丸調査時に地下式坑や土坑墓が検出されており、16世紀末～17世紀にかけての柏城の内部の一部が墓地化していた様相も見せており、今回検出された馬埋葬遺構もこのような状況の中で構築されたものと考えていくことが最も妥当のように考えられよう。

しかし、未だ周辺の調査が実施されていない状況から、当調査区の周辺が墓地化されていた状況は把握されていないということも事実である。今回は当遺構が柏城の廃絶前後の時期に当地区が墓地化して行く過程での産物と捉えておけるが、地鎮等の祭祀として馬が埋葬されていたという可能性が無い分だけではなく、本当に当遺構が柏城の廃絶前後に構築されたものか否かの確定は今後の課題となろう。

2. 中道遺跡第37地点の19号住居跡出土土器の時期について

19号住居跡からは、多くの土器が出土しており、実測個体数は56点を数える。器種としては、土師器杯・鉢・高杯・埴・甕・甕形土器、須恵器蓋・甕形土器、ミニチュア土器に分類される。ここでは、質・量ともに良好な土師器により、時期の比定について考えてみたい。

まず、埴形土器では器高の高い境状(1～4)のもの、やや偏平化したもの(5～8)須恵器蓋の模倣杯(9)と大きく分けることができるが、さらに口縁部・底部形態により細分は可能である。調整技法については、全体としてヘラ削りの盛行が看取される。

高埴形土器は坏部下端に明瞭な段をもち、口縁部が大きく外反する大型のもの(13・14)、坏部下端に段をもち、口縁部が大きく外反するが、やや内湾ぎみのもの(15～20)、坏部下端に段をも

たず、全体に浅い皿状を呈するもの(21)、坏部下端に段をもち、体部は深く、口縁部は外反するもの(23)に大きく分けられる。調整技法については、坏部の口縁部で回転ナデ的なナデ調整が目立ち、ヘラ磨きは全くないとは言わないがその技法にもはや主流があるとは言えない。

甕形土器は胴部に膨らみをもつ甕形土器に類似するような形態のものである。調整技法については、ヘラ削りが胴部下半に観察され、全体としてはヘラナデ・ヘラ磨きが併用される。

甕形土器は全体として、口縁部が「く」の字状で、球割を呈する堅緻な作りの土器である。調整技法については、胴部下半はヘラ削り後、粗いヘラ磨きが施されるが、胴部上半では、ハケ目調整・ヘラナデ後、粗いヘラ磨きが施される。全体の印象としては、ハケ目なのかヘラナデなのか、磨きであるのかナデであるのかというように区別するのに困難な土器が多く、これが逆に大きな特徴と言えるかもしれない。また、器形においても甕形土器と分類が困難であることも特徴と言える。

近年、5世紀の土器編年については、比田井克仁氏や坂口 一氏による土器編年の業績がある。両者の須恵器認定観については、木對和紀氏によりおよそⅠ型式期のずれが存在していることが指摘されているが、ここでは比田井編年(南武蔵地域参照)に対比させて考えたい。まず、器形では甕形土器の「くの字に屈曲した頸部からゆるく湾曲する口縁部をもつ」、坏形土器は「いずれも器形の深いもの」、高坏形土器は「Ⅰ段階に比べて、脚柱がハの字に開き、高さも低くなる。」などまさにⅡ段階の特徴を備えていると言える。しかし、これに調整技法を加味してみると、甕形土器を除き、Ⅱ段階に顕著なミガキが主体ではないことから、Ⅱ段階よりも後出的であるものと考えざるを得ないであろう。管見であるが、木資料に関する限り、その土器群の変化については、形態の変化の前にまず、調整技法の衰退化が看取でき、さらにその変化の速度は、甕形土器などの大形の器種より、手持ち可能な坏形土器などの小形のものの方が速いものと考えられる。

以上から、比田井編年のⅡ段階とⅢ段階の間にもう1段階期の設定が可能であることを付け加え、本資料を現段階では5世紀中葉の所産のものと考えたい。

【引用・参考文献】

- 浅野晴樹 1991「東国における中世在地系土器について」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第31号
 飯島哲也・寺島孝典 1993『松原遺跡Ⅲ』長野市の埋蔵文化財第58集 長野市教育委員会
 石塚久剛 1996『上栗須寺前遺跡群Ⅲ』群馬県埋蔵文化財調査事業(調査報告第205集)
 木對和紀 1993「縦穴住居の耐久年数からみた房総における古墳時代須恵器の出現と終焉」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』
 後藤昌徳・金子浩昌 1992『御殿前遺跡Ⅲ』北区埋蔵文化財調査報告書10集 東京都北区教育委員会
 坂口 一 1987「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要』4 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 志木市史編さん室 1984『志木市史 中世資料編』
 志木市史編さん室 1990『志木市史 通史編Ⅰ』
 比田井克仁 1988「南関東五世紀土器考」『史館』第20号
 御堂島正・金子浩昌 1988『新戸遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告17集 神奈川県埋蔵文化財センター

〔付 編〕

自 然 科 学 分 析

I 城山遺跡第29地点127号土坑出土のウマについて

西本豊弘（国立歴史民俗博物館）

127号土坑からウマの下半身の骨が出土した。左右の寛骨・左右の大腿骨・左右の脛骨・左足根骨・仙椎・椎骨などである。出土状態から見て、埋葬されたウマ一頭体分である。上半身の部分は、おそらく後世の擾乱により失われたのであろう。

ウマの骨の保存状態はかなり悪く、完形を保ったものはなかった。しかし、骨端は癒着しており、成獣である。比較的保存がよかった左側大腿骨の骨頭からの長さは約30cmと小さかった。大腿骨全長を32cmとすると、体高約110cmと推定された。かなり小さなウマと言える。雌雄についてはわからない。

II 城山遺跡第29地点出土灰試料の植物珪酸体

鈴木 茂（パレオ・ラボ）

イネ科植物は、別名珪酸植物とも呼ばれ、根より大量の珪酸分を吸収することが知られている。植物珪酸体は、この吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）で、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。こうしたことから、試料中より植物珪酸体を抽出・観察することにより、どのような植物の珪酸体が含まれているか検討することができる。当城山遺跡の第29地点127号土坑より検出された灰試料についても、植物珪酸体分析からその母材である植物について、ある程度目安がつくことが期待される。

1. 試料と分析方法

分析用試料は、城山遺跡127号土坑より検出された灰で、若干のローム粒子が混入している。この土坑から頭部を除いてはほぼ一頭分の馬の骨が検出され、馬を埋葬した遺構ではないかと考えられており、時代は中世と推測されている。この灰試料の他に、炭化したイネやオオムギ、コムギ、アワ、ヒエなどの炭化種実（大型植物化石分析参照）が検出されており、クリやネムノキなどの炭化材（樹種同定参照）も得られている。

植物珪酸体分析は上記した灰試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料約0.5gをトルビーカーに採り、これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 μ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、鏡検した。

2. 分析結果

鏡検の結果、イネやキビ族、ネザサ節型、ウシクサ族、シバ属などの機動細胞珪酸体が観察された。計数は行っていないが、これらの中ではイネの機動細胞珪酸体が多いように思われ、連なった

ものも認められる。他に、イネ属型の単細胞珪酸体やイネの類の一部とみられる珪酸体も若干観察される。また、機動細胞珪酸体の形成される割合が他のイネ科植物に比べ少ないキビ族も比較的多くみられ、キビ型単細胞珪酸体も認められる。ウシクサ族もやや多く、連なった状態の珪酸体も観察される。

3. 灰試料の母植物

上記したように、イネ、キビ族、ネザサ節型、ウシクサ族、シバ属などの機動細胞珪酸体が観察され、灰試料はこれらの葉が火種などの燃料として焼かれ、灰化したものと推測される。このうちキビ族について、キビであるのかアワやヒエであるのか、またはエノコログサなどの雑草類であるのかについて機動細胞珪酸体の形態からは分類することは現時点においてはできないのが現状である。しかしながら、アワやヒエの炭化種実が検出されており、イネも含め、これらが収穫された残りの葉や茎が火種などに利用されたと推測できよう。同じくオオムギやコムギの炭化種実も検出されているが、これらムギ類の葉には機動細胞珪酸体は形成されず、よって、ムギ類の葉が焼かれたかどうかは不明である。しかしながら、イネやキビ族のことから推測すると、これらムギ類の葉も焼かれた可能性は高いように思われる。また、ネザサ節型のササ類（サズマネザサ、ゴキダケなど）やウシクサ族（ヌスキ、チガヤなど）、シバ属については、試料に混入しているローム粒子からもたらされた可能性もあるが、保存状態などから考えると焼かれたものと推測される。

引用文献

- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—, 考古学と自然科学, 9, P.15-29.
- 藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）—イネ（*Oryza*）属植物における機動細胞珪酸体の形状—, 考古学と自然科学, 11, P.9-20.

Ⅲ 城山遺跡第29地点・中野遺跡第41地点から出土した炭化材の樹種

植田弥生（パレオ・ラボ）

埼玉県志木市柏町に位置する城山遺跡第29地点と中野遺跡第41地点から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。

1. 試料と方法

城山遺跡第29地点の試料はすべて中世と考えられている127号土坑から出土したものであり大破片1個と複数の小破片であった。

中野遺跡第41地点の試料はすべて5世紀末から6世紀の50号住居跡より出土した20番土器と21番土器から検出されたもので複数の小破片であった。

検出されたこれらの試料から同定可能な大きさの試料を選び、まず実体顕微鏡下で横断面の組織を観察し選別した。さらに詳細な組織観察を行うために次の手順で走査電子顕微鏡用の組織試料を作成した。横断面（木口）は炭化材を手で割り新鮮な面を出す。接線断面（板目）と放射断面（柁目）は片刃の剃刀を炭化材に軽くあて弾くように割り新鮮な面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に向面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（朝日本電子製 JSM T-100型）で観察・写真撮影を行った。

組織観察を行った試料には便宜的に番号（No.1～20）をつけ、走査電子顕微鏡観察に用いた試料片はバレオ・ラボに保管してある。

2. 結果

1) 城山遺跡第29地点

中世と考えられている127号土坑から出土した炭化材のうち、走査型電子顕微鏡で観察した試料（No.1～14）の同定結果を第5表に示した。

試料No.	樹種	備考
1	広葉樹 A	直径0.5cmの小枝
2	スルデ	小片
3	広葉樹 A	直径0.5cm
4	スルデ	直径5.0cm
5	エゴノキ属	直径0.8cm
6	ネムノキ	直径5.0cm
7	クリ	直径0.4cm
8	ススキ属	直径0.4cm・葉鞘の一部あり・中空ではない
9	ヨシ属	直径0.5cm
10	ヨシ属	直径0.5cm
11	ヨシ属	直径0.5cm
12	ヨシ属	直径0.5cm
13	イネ科タケ亜科	直径1.8cm
14	イネ科タケ亜科	小破片

第5表 城山遺跡127号土坑から検出された炭化材の樹種同定結果

2) 中野遺跡第41地点

5世紀末から6世紀の50号住居跡より出土した土器中より検出された炭化材のうち、走査型電子顕微鏡で観察した試料（No.15～20）の同定結果を第6表にまとめた。

試料No.	樹種	備考
15	クリ	21番土器 約0.5cm角破片
16	クリ	20番土器 約0.5cm角破片
17	コナラ属クヌギ節	20番土器 約0.5cm角破片
18	クリ	20番土器 約0.5cm角破片
19	イネ科	20番土器 小破片
20	イネ科A	20番土器 直径0.3mm・葉鞘の一部あり

第6表 中野遺跡50号住居跡から検出された炭化材の樹種同定結果

3. 記載

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版22 1. (No. 17)

年輪の始めに1~2層の中型から大型の管孔が配列し徐々に径を減じ、その後円形でごく小型・厚壁の管孔が単独で放射方向に配列する環孔材である。接線状・網状に配列する柔組織が顕著である。当試料は細片であり横断面の観察しかできなかったが、道管の配列と広放射組織があることからクヌギ節と同定できた。

クヌギ節は落葉性のドングリの仲間でクヌギ (*Q. acutissima*) とアベマキ (*Q. variabilis*) がある。いずれの種も暖帯の山林に普通の高木でクヌギは二次林に多く、関東ではクヌギ、瀬戸内海沿岸地方にはアベマキが多い。

クリ *Castanea crenata* Sieb. s: Zucc. ブナ科 図版22 2. (No.7) 3. (No.16) 4a-4c. (No. 15)

年輪の始めに1~3層の中型~大型の管孔が密に配列し徐々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性である。

試料No.7は直径0.4mmの当年枝であるが、中心に菱形の髓があり小型の管孔が火炎状配列しその後極めて小型の管孔も火炎状に配列していることからクリであることがわかる。クリは2年輪めの始めから大きな管孔が孔圏を形成するようになる。なお、アカガシ亜属の当年枝の管孔配列と似ているがアカガシ亜属の髓は五角形であることから区別できる。

暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は耐朽性にすぐれ、縄文時代からは柱材の使用例が有名である。

ネムノキ *Albizia julibrissin* Durazz. マメ科 図版22 5a-5c. (No.6)

年輪の始めに中型の管孔が並び徐々に管孔の径を減じてゆき、晩材では小型の管孔が散在し年輪界付近では極めて小型の管孔が放射方向に配列する環孔材である。管孔は単独のものが多く、複合しても2から3個であるが年輪界ではやや多くなる。周囲状・翼状の柔組織が顕著である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、おもに2細胞幅、外形はややいびつである。

熱帯から暖帯の本州以南に分布し、原野や河岸に普通に生育する落葉高木である。材は軟らかく耐朽保存性も低い、加工は容易で材面は光沢がある。

ムルテ *Rhus javanica* L. ウルシ科 図版23 6a-6c. (No.4)

年輪の始めに単独または2個が複合した中型の管孔が雑然と配列し徐々に径を減じてゆき、年輪界付近では極めて小型の管孔が集合して配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状でその孔口は水平に長いレンズ状、穿孔は単一、小道管には明瞭ならせん肥厚がある。放射組織は異性、1~3細胞幅、多列部は平伏細胞や方形細胞・直立細胞が混在し、道管との壁孔は中型でその孔口は大き

い。

熱帯から温帯の山野に普通の落葉小木である。材は軽く加工は容易、耐朽性があり水分を吸収しにくい性質をもつ。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 図版23 7a-7c. (No5)

小型の管孔が単独または2~数個が放射方向・やや斜め方向・塊状に複合し分布する散孔材である。年輪界付近で管孔は小さくなる。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒数が10~15本の階段状である。放射組織は異性、1~3細胞幅、多列部が単列部を介して連なるものがある。

落葉高木で、亜熱帯~温帯下部の山地や原野の川沿いに普通に生育するエゴノキ (*S. japonica* Sieb. et Zucc.)、温帯の山中に生育するハクウンボク (*S. obassia* Sieb. et Zucc.)、関東以西の温帯の深山に生育するコハクウンボクがあるが、材組織から3種を区別することはできていない。材はやや硬く割れにくい加工はしやすい。

広葉樹A 図版23 8a-8c. (No1)

直径0.5cmの小枝で中心部に丸い髓があり年輪界がないことから当年枝であることがわかる。小型の管孔が単独または2個が複合し散在している。道管の壁孔は交互状、穿孔は単独、らせん肥厚は認められない。放射組織は異性、1~2細胞幅、細胞高は高い。木繊維に階層性が見られた。

以上の形質からは樹種を決めることはできなかった。

イネ科タケ亜科 Gramineae subfam. Bambusoideae イネ科 図版24 9. (No13)

維管束が散在する不整中心柱である。一つ一つの維管束は原生木部の左右または左右と中心部側に後生木部の大きな管孔が全部で2~3個あり、原生木部と後生木部の管孔の間には厚壁の繊維細胞が介在し、さらに維管束全体が厚壁の繊維細胞からなる維管束鞘に囲まれている。維管束鞘は外側の維管束のものほど細胞層が多く厚くなり広がりをもつ。散在する維管束数が多いこと、維管束の原生木部の向きがほぼ放射方向に揃っていること、維管束鞘が全般に厚いことからタケ亜科であることが判る。いわゆるタケ・ササの仲間である。

試料No13は直径1.8cmであり、試料No14は小破片であった。

ササ類は日本自生のものが多数あり、タケ類は中国から渡来したといわれているがマダケ・ハチクは本州の中系統から化石が報告されており自生していた可能性もあるといまれる。遺跡からは中世になると普遍的に出土するようになる。

ヨシ属 *Phragmites* イネ科 図版24 10. (No9)

いずれの試料も直径0.5cmのやや軟らかい稈で中心部は空洞である。

維管束が散在する不整中心柱であり、一つ一つの維管束は原生木部の左右または左右と中心部側に後生木部の大きな管孔が全部で2~3個あり、維管束全体が厚壁の繊維細胞からなる維管束鞘に囲まれていることからイネ科の稈であることがわかる。タケ亜科に比べ維管束の向きが放射方向の

軸から振れるものもあること、維管束の分布数が少ないこと、原生木部と後生木部の間の厚壁の細胞は不明瞭であり、維管束鞘があまり厚くないこと、稈が空洞であることからヨシ属と判断した。

川岸や湿地に普通に生育し大型になる多年性草本で3種ある。北海道以南に生育しオギまたはアシに違名があるヨシ (*P. communis* Trin.)、本州以南に生育するツルヨシ (*P. japonica* Steud.) とセイタカヨシ (*P. Karka* Trin.) がある。稈の組織から区別はできていない。

ススキ属 *Miscanthus* イネ科 図版24 12a-12b. (No8)

直径0.4cmのやや軟らかい稈で葉鞘にかこまれており、稈の中心部は中空ではない。

維管束が散在する不整中心柱をなし、一つ一つの維管束は原生木部の左右または左右と中心部側に後生木部の大きな管孔が全部で2~3個あり、維管束全体が厚壁の繊維細胞からなる維管束鞘に囲まれていることからイネ科の稈であることがわかる。中心部に空洞がないこと、維管束の向きが放射方向の軸から振れるものもあること、原生木部と後生木部の間の厚壁の細胞は不明瞭であり、維管束鞘がタケ亜科ほど厚くないことからススキ属と判断した。

ススキ属は大型になる多年性草本で一般にはカヤ(茅)と呼ばれており、約7種ある。おもな種は北海道から九州の湿地に生育するオギ (*M. sacchariflorus* (Maxim.) Benth.)、関東南部以西の堤防の草地に生育するトキワススキ (*M. floridulus* (Labill.) Warb.)、日本全土の平地から山地の陽地に普通で対して屋根をふく材料とするススキ (*M. sinensis* Anderss.)、東北地方南部から近畿北部の山中の陽地に生育するカリヤス (*M. tinctorius* (Steud.) Hack) がある。現在の時点では稈の組織から種を識別する検討はされていない。

イネ科A Gramineae A イネ科 図版24 11a-11b. (No20)

稈は直径0.3cmで葉鞘にかこまれており、稈の中心部は中空である。横断面の組織はヨシ属と同じである。本試料は非常に直径が細いので、多種ある草本性のイネ科との区別はできない。

IV 城山遺跡第29地点・中野遺跡第41地点から出土した大型植物化石

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

城山遺跡第29地点、中野遺跡第41地点は埼玉県志木市柏町に所在する。城山遺跡からは中世と考えられている127号土坑より、また、中野遺跡からは5世紀末~6世紀の50号住居跡より出土した土器(20番および21番土器)から大型植物化石が検出された。この大型植物化石から当時の栽培植物について検討した。なお、同定にあたって、流通科学大学の南木睦彦助教にご指導して頂いた。

2. 出土した大型植物化石

1) 城山遺跡127号土坑から出土した大型植物化石 (図版25・26)

イネ、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエ、タデ属、ササゲ属（アズキ、リョクトウの類）を出土した。このうち、タデ属を除き全て栽培植物と考えられる。これら出土した大型植物化石の一覧を第7表に示す。

分類群	部位	個数
イネ	炭化胚乳	45
	炭化穎果	24
	塊状炭化胚乳	6
オオムギ	炭化胚乳	186
	炭化穎果	660
コムギ	炭化胚乳	6
アワ	炭化穎果	60
ヒエ	炭化穎果	3
タデ属	炭化果実	1
ササゲ属（アズキの仲間）	炭化種子	(7)
ササゲ属	炭化種子	151 (60)
	塊状炭化種子	6

() 内は半分または破片の数

第7表 城山遺跡127号土坑から検出された大型植物化石

2) 中野遺跡50号住居跡から出土した大型植物化石

21番土器：不明

20番土器：タデ属1点と雑穀類（アワ、ヒエなどの栽培植物かその野生種のエノコログサ属、イヌビエ）1点

3. 考察

城山遺跡127号土坑から検出された大型植物化石はタデ属を除き全て栽培植物と考えられる。ただし、タデ属も他の栽培植物とともに栽培されていた可能性はある。栽培植物のうちイネ、ササゲ属は塊状に集合したのもみられ、イネの塊状に集合した炭1、炭2は「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであると思われる。このイネの塊状のものは、一部がイネわら状のもので覆われた状態になっており、他の部分は種子様のもの（長さ4mm程度、幅2mm程度）が種皮の部分だけを残して中身が抜けた状態で集合している。従って、種子様のものは大半が同定不能であるが、一部イネと同定できるものが残っており、この塊状種子はイネが集合したものである可能性が高い。この塊状イネは種皮を残した状態になっており、玄米の集合であることがわかる。以上のことから、塊状イネは、調理済みの段階であれば玄米の「おにぎり」、調理途上の段階であれば「ちまき」のようなものであろう。イネわら状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」を包む役割をしているものと思われる。一方、ササゲ属の塊状に集合したものは不明であるが、10~30粒程度が集合したものであり、一部イネも混じっていた。ササゲ属の中には、吉崎(1992)によるアズキの仲間と思わ

れるものがみられた。

中野遺跡50号住居跡から出土した大型植物化石は、21番土器のものは不明であり、20番土器のものはタデ属と雑穀類であった。雑穀類は、アワ、ヒエといった栽培植物かその野生のエノコログサ属あるいはイヌビエであるが、同定には至らなかった。

4. 大型植物化石の記載

イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化胚乳、炭化穎果

炭化した胚乳と穎果を出土した。側面観は楕円形、上面観は偏平。

オオムギ *Hordeum vulgare* Linn. 炭化胚乳、炭化穎果

炭化した胚乳と穎果を出土した。側面観は楕円形、上面観は偏平。

コムギ *Triticum aestivum* Linn. 炭化胚乳

炭化した胚乳のみを出土した。側面観は楕円形、上面観は偏平。

アワ *Setaria italica* Beauv. 炭化穎果

炭化した穎果を出土した。果軸のついているものもあった。

ヒエ *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno 炭化穎果

炭化した穎果を出土した。側面観は楕円形、上面観は両凸レンズ形。

タデ属 *Polygonum* 炭化果実

側面観は卵形、断面はかなり丸みを帯びた三角形、不明瞭な3本の稜がある。

ササゲ属 *Vigna* 炭化種子

子葉の内面には、本葉につく長くて明瞭な柄の痕跡がみられる。なお、一部には子葉の内面の幼根と初出葉が確認できるものがみられ、幼根の立ち上がりの角度から吉崎(1992)によるアズキの仲間と思われる。

引用文献

吉崎昌一(1992)「古代雑穀の検証」『考古学ジャーナル』No.355

图 版



1. 調査区全域



2. 123号住居跡



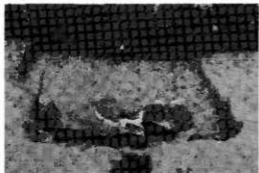
3. 123号住居跡遺物出土状態



4. 124号住居跡



5. 124号住居跡(掘り方)



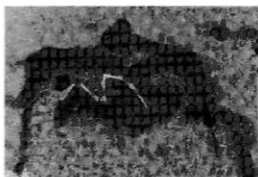
1. 127号土坑遺物出土狀態



2. 127号土坑遺物出土狀態



3. 127号土坑遺物出土狀態



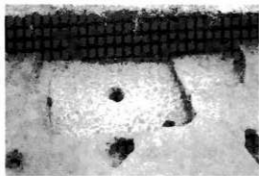
4. 127号土坑馬骨出土狀態



5. 127号土坑馬骨出土狀態



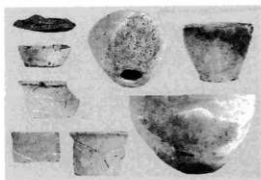
6. 127号土坑調査風景



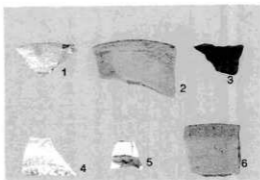
7. 126・127号土坑



8. 127号土坑出土遺物



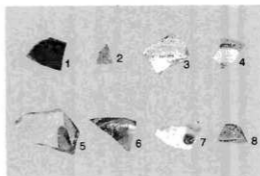
1. 123号住居跡出土遺物



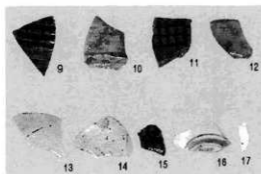
2. 土坑出土遺物



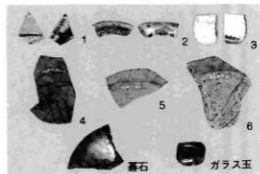
3. 土坑出土遺物



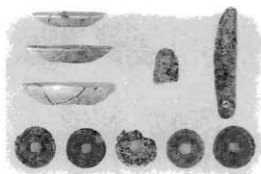
4. 29号溝跡出土遺物



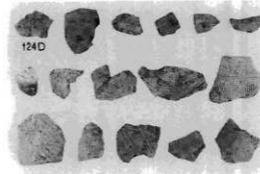
5. 29号溝跡出土遺物



6. ピット群出土遺物



7. ピット群出土遺物



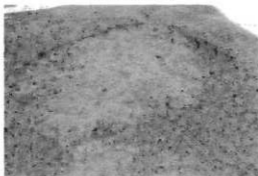
8. 124号土坑・遺構外出土遺物



1. 調査区近景



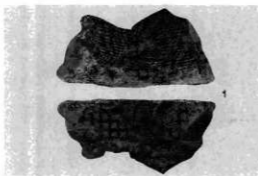
2. 発掘調査風景



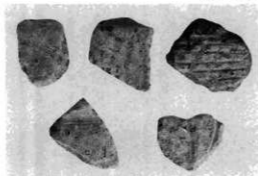
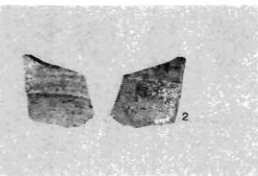
3. 128号土坑



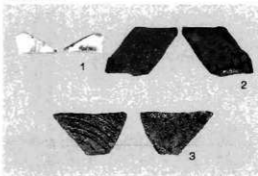
4. 1号ピット



5. 1号ピット出土遺物



6. 遺構外出土遺物



7. 遺構外出土遺物



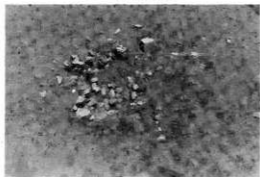
1. 調査区全景



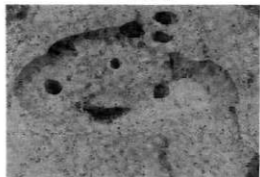
2. 発掘調査風景



3. 2号集石



4. 3号集石



5. 4号炉穴



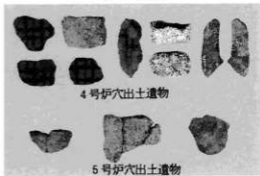
1. 8号溝跡



2. 9号溝跡



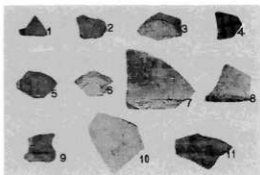
3. 2・3号集石出土遺物



4. 4・5号炉穴出土遺物



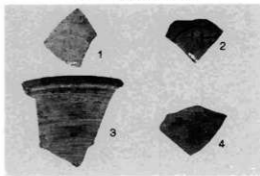
5. 7号溝跡出土遺物



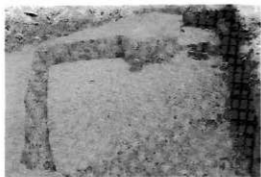
6. 8号溝跡出土遺物



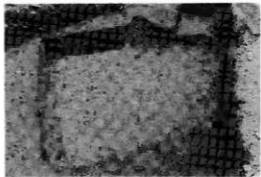
7. 8号溝跡出土遺物



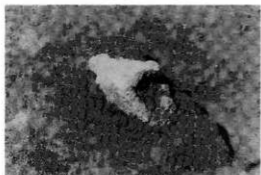
8. 9号溝跡出土遺物



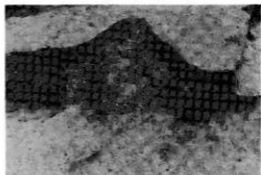
1. 50号住居跡・202号土坑



2. 50号住居跡(掘り方)



3. 50号住居跡遺物出土状態



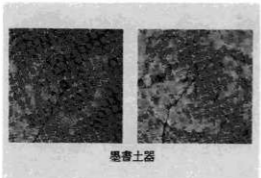
4. 50号住居跡カマド(掘り方)



5. 50号住居跡出土遺物



6. 50号住居跡出土遺物



墨書土器

7. 50号住居跡出土墨書土器



8. 202号土坑出土遺物



1. 18号住居跡・18号溝跡



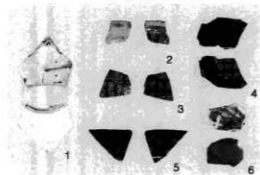
2. 18号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



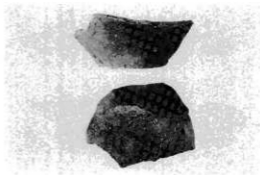
3. 18号住居跡出土遺物



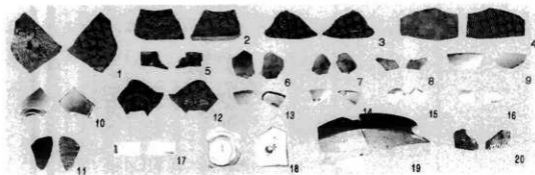
4. 18号住居跡出土遺物



5. 18号溝跡出土遺物



6. 1号ピット出土遺物



7. 遺構外出土遺物



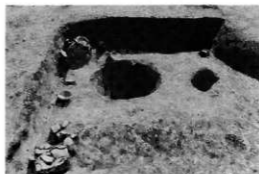
1. 調査区近景



2. 確認調査風景



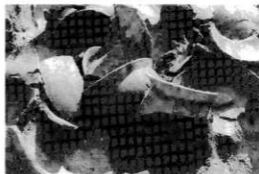
3. 19号住居跡遺物出土状態



4. 19号住居跡遺物出土状態



5. 19号住居跡遺物出土状態



6. 19号住居跡遺物山上状態



7. 発掘調査風景



8. 発掘調査風景



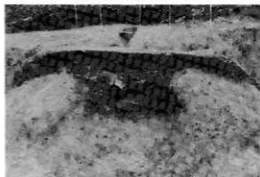
1. 19号住居跡



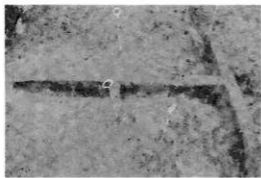
2. 19号住居跡貯蔵穴



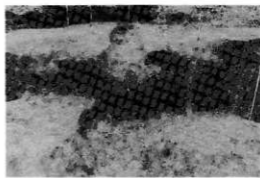
3. 19号住居跡入口施設



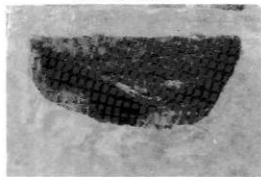
4. 19号住居跡カマド



5. 19号住居跡カマド



6. 19号住居跡カマド(裾り方)



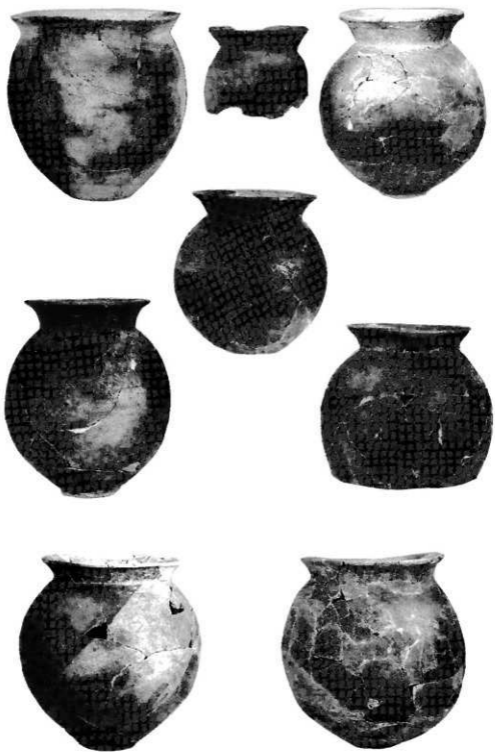
7. 37号上坑(土層断面)

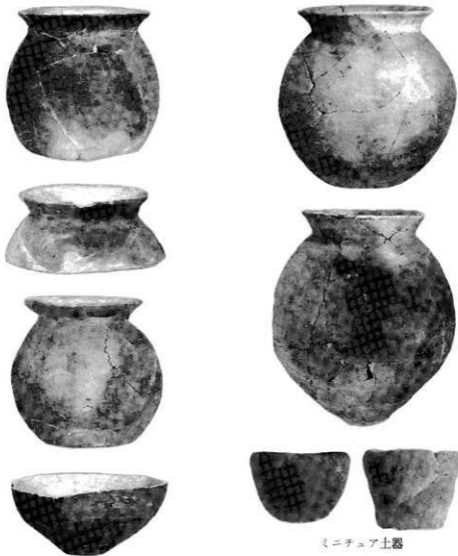


8. 37号上坑遺物出土状態



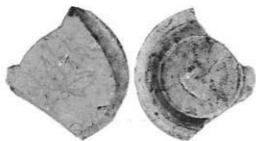
19号住居跡出土遺物



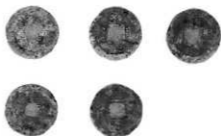


ミニチュア土器

1. 19号住居跡出土遺物



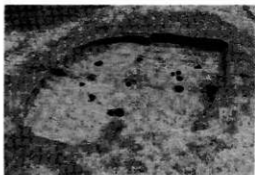
2. 1号道路状遺構出土遺物



3. 37号土坑出土古銭



1. 16号住居跡・135号土坑



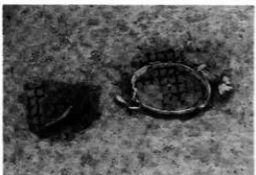
2. 17号住居跡



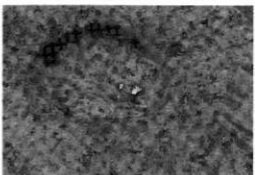
3. 18号住居跡遺物出土状態



4. 18号住居跡



5. 18号住居跡(如跡)



6. 133号土坑



7. 136号土坑



8. 6号住居跡



16号住居跡出土遺物

17号住居跡出土遺物



18号住居跡出土遺物



18号住居跡出土遺物



133号土坑出土遺物



134号土坑出土遺物



136号土坑出土遺物



137号土坑出土遺物



138号土坑出土遺物



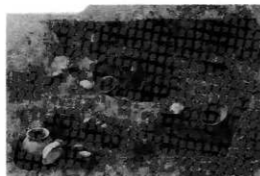
1. 確認調査風景



2. 50号住居跡遺物出土状態



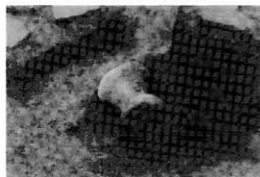
3. 発掘調査風景



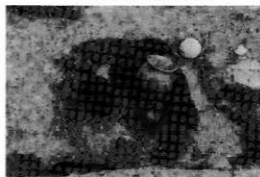
4. 50号住居跡遺物出土状態



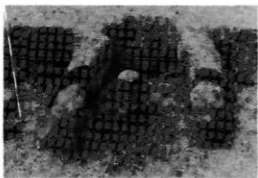
5. 50号住居跡遺物出土状態



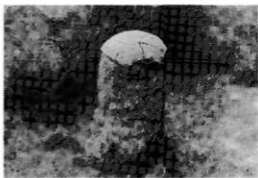
6. 50号住居跡紡轆車出土状態



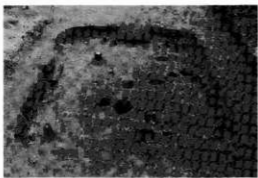
7. 50号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



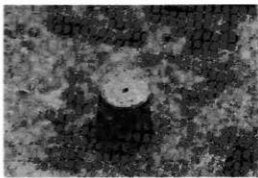
1. 50号住居跡カマド



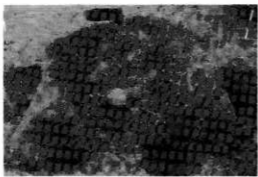
2. 50号住居跡支脚山上状態



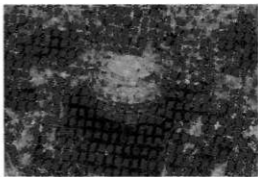
3. 51号住居跡遺物出土状態



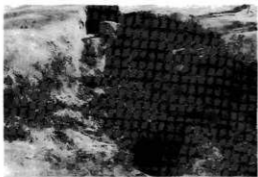
4. 51号住居跡紡錘取出土状態



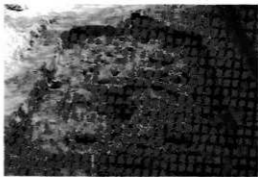
5. 51号住居跡カマド



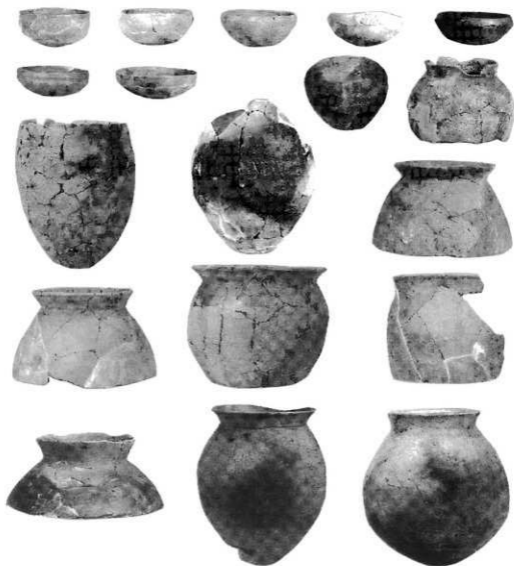
6. 51号住居跡カマド遺物出土状態



7. 51号住居跡カマド (掘り方)



8. 51号住居跡 (掘り方)



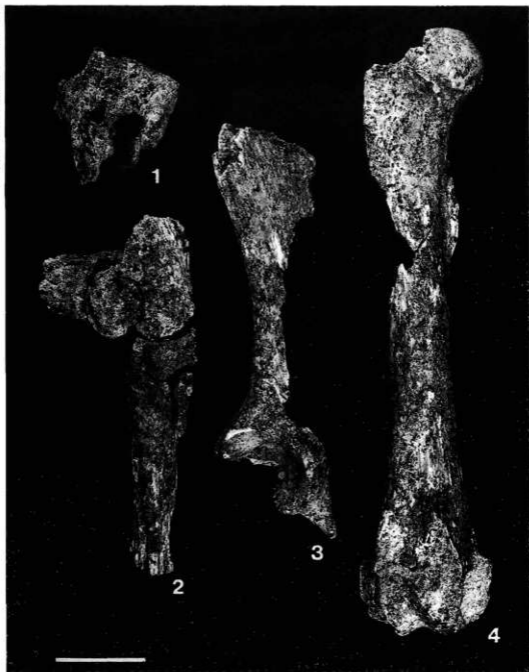
1. 50号住居跡出土遺物



2. 51号住居跡出土遺物



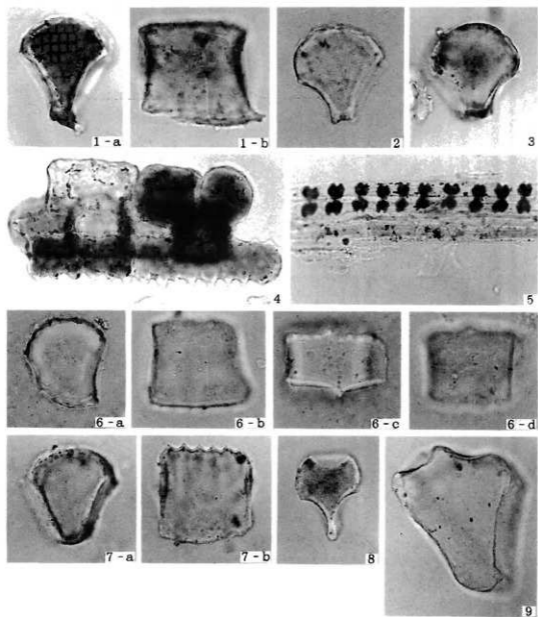
3. 51号住居跡出土遺物



127号土坑出土のウマ

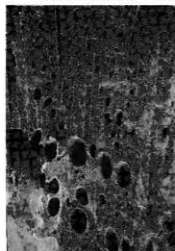
1. 左脛骨 2. 左足根部（脛骨、踵骨、距骨、中足骨、足根骨） 3. 左寛骨 4. 右大腿骨

bar: 5 cm

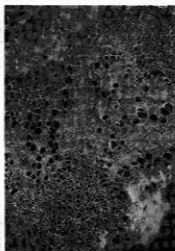


城山遺跡灰試料のプラント・オパール

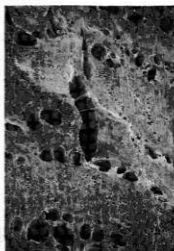
- 1～4：イネ（1 a, 2, 3：断面、1 b：側面、4：機動細胞柱酸体列）
 5：イネ属型単細胞粒酸体
 6：キビ族（6-a：断面、6-b：側面、6-c：表面、6-d：裏面）
 7：ネザサ節型（7-a：断面、7-b：側面）
 8：シバ属（断面）
 9：ウシクサ族（断面）



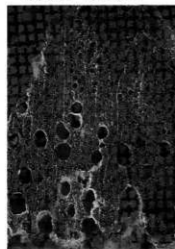
1. コナラ属クヌギ節 (横断面)
試料no.17 bar: 0.5mm



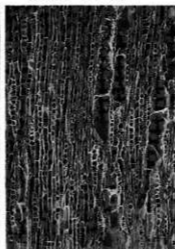
2. クリ (横断面)
試料no7. bar: 0.5mm



3. クリ (横断面)
試料no.16 bar: 0.5mm



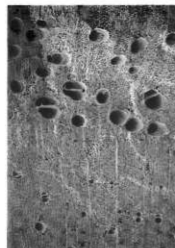
4a. クリ (横断面)
試料no.15 bar: 1mm



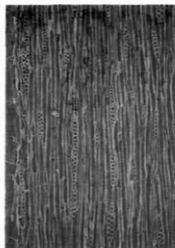
4b. 同左 (接線断面) bar: 0.1mm



4c. 同左 (放射断面) bar: 0.1mm



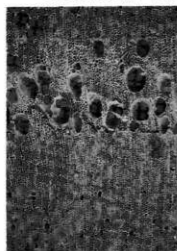
5a. ネムノキ (横断面)
試料no.6 bar: 1mm



5b. 同左 (接線断面) bar: 0.1mm



5c. 同左 (放射断面) bar: 0.1mm



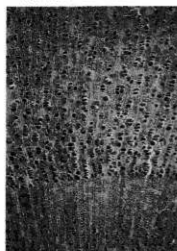
6a. ヌルデ (横断面)
試料no.4 bar: 0.5mm



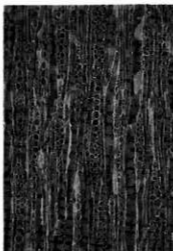
6b. 同左 (接線断面) bar: 0.1mm



6c. 同左 (放射断面) bar: 0.1mm



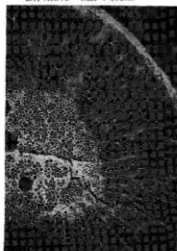
7a. エゴノキ属 (横断面)
試料no.5 bar: 0.5mm



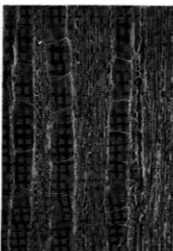
7b. 同左 (接線断面) bar: 0.1mm



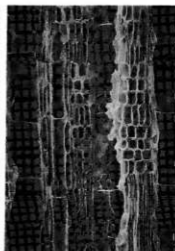
7c. 同左 (放射断面) bar: 0.1mm



8a. 広葉樹 (横断面)
試料no.1 bar: 1mm



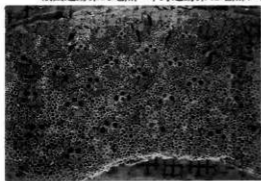
8b. 同左 (接線断面) bar: 0.1mm



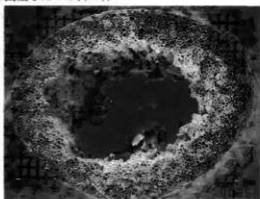
8c. 同左 (放射断面) bar: 0.1mm

城山遺跡第29地点・中野遺跡第41地点から出土したイネ科の稈

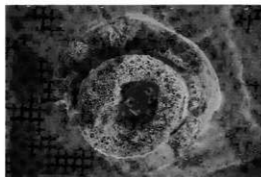
図版二十四 城山遺跡第二十九地点・中野遺跡第四十一地点



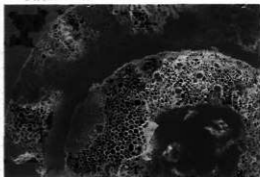
9. イネ科タケ亜科
試料no.13 bar: 1mm



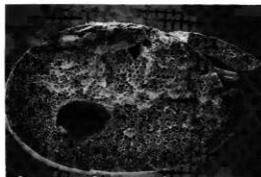
10. ヨシ属
試料no.9 bar: 1mm



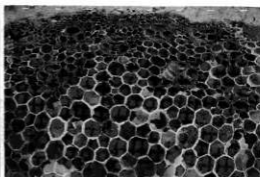
11a. イネ科A
試料no.20 bar: 1mm



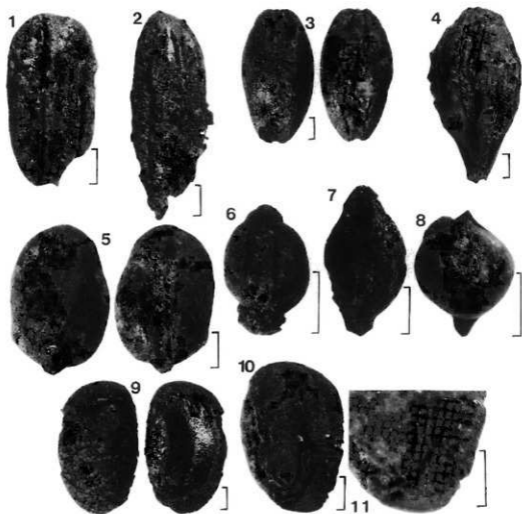
11b. 同左 bar: 0.5mm



12a. ススキ属
試料no.8 bar: 1mm

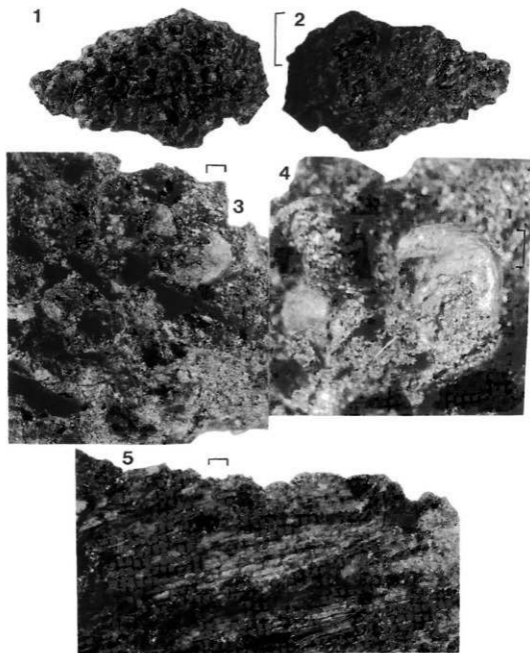


12b. 同左 bar: 0.1mm



城山遺跡から出土した大型植物化石（スケールは1mm）

1. イネ、炭化胚乳 2. イネ、炭化穎果 3. オオムギ、炭化胚乳 4. オオムギ、炭化穎果
5. コムギ、炭化胚乳 6. アワ、炭化穎果 7. ヒエ、炭化穎果 8. タデ属、炭化果実
9. ササゲ属、炭化種子 10. ササゲ属（アズキの仲間）、炭化種子 11. 10の子葉部分の拡大



城山遺跡から出土した大型植物化石（スケールは、1、2は1cm、3、4、5は1mm）

1. イネ、塊 2. 1の裏（イネわら状） 3. 1の拡大 4. 1の拡大 5. 拡大（イネわら状）

報告書抄録

ふりがな	しきしいせきぐん								
書名	志木市遺跡群 Ⅲ								
副書名							巻次		
シリーズ名	志木市の文化財						巻次	第25集	
編集者名	佐々木保俊 足形 剛敏								
編集機関	埼玉県志木市教育委員会								
所在地	〒353 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 Ⅲ 048 (473) 1111								
発行年月日	1997(平成9)年3月31日								
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(°′″)	(°′″)		(㎡)		
城山遺跡 (第29地点)	志木市柏町 3丁目2618-15他	11228	003	35° 49′ 45″	139° 34′ 18″	19950411 ～ 19950428	146.41	個人専用住宅	
城山遺跡 (第32地点)	志木市柏町 3丁目2618-15他	11228	003	35° 49′ 45″	139° 34′ 18″	19951105	59.62	個人専用住宅	
田子山遺跡 (第39地点)	志木市本町 3丁目1816-5	11228	010	35° 49′ 38″	139° 35′ 10″	19950616 ～ 19950531	154.12	個人専用住宅	
田子山遺跡 (第41・42地点)	志木市本町 2丁目1744-2	11228	010	35° 49′ 38″	139° 35′ 10″	19950828 ～ 19950904	111.60	個人専用住宅	
中道遺跡 (第36地点)	志木市柏町 5丁目2994-1他	11228	005	35° 49′ 34″	139° 34′ 17″	19950602 ～ 19950621	179.51	個人専用住宅	
中道遺跡 (第37地点)	志木市柏町 4丁目2617-8	11228	005	35° 49′ 34″	139° 34′ 17″	19950807 ～ 19950906	154.44	個人専用住宅	
西原大塚遺跡	志木市幸町 3丁目3253他	11228	007	35° 49′ 16″	139° 34′ 00″	19950804 ～ 19950829	317.00	個人専用住宅	
中野遺跡	志木市柏町 1丁目1618-4	11228	002	35° 49′ 48″	139° 34′ 34″	19951027 ～ 19951113	235.63	個人専用住宅	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
城山遺跡 (第29地点)	集落	古墳時代後期 平安時代 中・近世	住居跡 土坑 溝跡	2軒 1軒 11基 1本	土師器 須恵器 須恵器小片 馬骨 板葺 陶・磁器小片 陶・磁器小片	127号土坑は、馬を埋葬した屋敷と考えられる。馬骨の下層からは炭化した大木が広い範囲で検出されていることから火葬墓である可能性がある。			
城山遺跡 (第32地点)	集落	時期不明	土坑 遺構外	1基 1本	土器小片 陶器小片 縄文土器小片				
田子山遺跡 (第39地点)	集落	縄文時代 平安時代	集石穴 灰溝	2基 2基 3本	縄文土器小片 石器 縄文土器小片 石器 土師器 須恵器				
田子山遺跡 (第41・42地点)	集落	平安時代	住居跡 土坑	1軒 1基	土師器 須恵器 鉄製品				
中道遺跡 (第36地点)	集落	古墳時代前期 近世	住居跡 溝跡 ピット	1軒 2本	土師器 磁石 陶・磁器小片				
中道遺跡 (第37地点)	集落 墓跡	古墳時代中期 中世	住居跡 遺跡溝 土壊墓	1軒 1本 1基	土師器 須恵器 磁石 陶器 人骨、古銭	古墳時代中期の19号住居跡はカマドを有する住居跡としては、市内最古である。また、出土遺物も豊富である。			
西原大塚遺跡	集落	縄文時代中期 古墳時代後期	住居跡 土坑 住居跡	3軒 4基 1軒	縄文土器 石器 縄文土器 土師器小片				
中野遺跡	集落	古墳時代後期 平安時代	住居跡 住居跡	1軒 1軒	土師器 鉄器 土師器 須恵器 鉄製品 磁石				

志木市の文化財 第25集

志木市遺跡群 VIII

発 行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 1997（平成9）年 10 月 31 日
印 刷 梅田印刷株式会社